



TATにおける時間性の検討ーナラティブ・アプローチの立場からー

楠本, 和歌子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6347号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006347>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

TAT における時間性の検討
—ナラティブ・アプローチの立場から—

平成 27 年 1 月

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科

065D803D 楠本和歌子

— 目次 —

第1部 問題と目的	1
第1章 TATの問題点	1
第1節 TATの特徴	
第2節 TATの問題点	
第3節 時間性に関する問題	
第2章 本論文の目的と研究意義	12
第1節 本論文の目的	
第2節 構成	
第3節 研究意義	
第2部 理論的検討—物語と時間—	16
第3章 国内の文献展望（研究1）	16
第1節 国内の文献展望	
第2節 TATにおける二つの真実	
第4章 TAT領域における物語論（研究2-1）	27
第1節 ナラティブの視点以外の研究	
第2節 ナラティブの視点による研究	
第3節 ナラティブの視点による物語の定義	
第5章 ナラティブ領域における時間論（研究2-2）	40
第1節 ナラティブの視点から見た物語の時間	
第2節 時間性に関する認識論	
第3節 物語と投映	

第3部 臨床研究1—人称性への着目—	52
第6章 人称性に着目した時間性の検討（研究3）	52
第1節 問題・目的	
第2節 方法	
第3節 結果	
第4節 考察	
第4部 臨床研究2—時間喪失への着目—	70
第7章 時間喪失に着目した時間性の検討（研究4）	70
第1節 問題・目的	
第2節 方法	
第3節 結果	
第4節 考察	
第5部 臨床研究3—内言への着目—	83
第8章 内言の意味に着目した時間性の検討（研究5）	83
第1節 問題・目的	
第2節 方法	
第3節 結果・考察	
第6部 総合的考察	104
第9章 要約・臨床哲学的考察	104
第1節 要約	
第2節 臨床哲学的考察	
第10章 Murray,H.A.の意図	110
第1節 TAT 成立の背景	
第2節 欲求—圧力理論	

第11章 総合的考察・今後の展望 115

第1節 総合的考察—TATの時間性とは—

第2節 今後の課題と展望

引用文献

補助資料

謝辞

第1部 問題と目的

第1章 TATの問題点

第1節 TATの特徴

1. TATとは

TAT (Thematic Apperception Test ; 主題統覚検査) は, アメリカの Murray, H.A. (1938 ; 1943) とハーヴァード心理クリニックのスタッフによって, 1943年に発表された心理検査である。TATにはいくつか種類があるが, 最もよく使われている Harvard 版は, 「“現実”のコピー」(安香, 1997) とされるような, 様々な人物や場面が描かれた図版 31 枚からなる(表 1 および補助資料を参照)。各図版には, 人生の決定的な場面における決断や葛藤を思わせるような絵が描かれており, この中から被検者の年齢や性別に合わせて 20 枚の図版を選択する。そして, 「今どういう状況で, これまで何があって, これからどうなるかということの一つの簡単なお話にして話してください」という教示に従って過去・現在・未来を含む物語を作らせ, その形式や内容から被検者のパーソナリティを読み解く投映法である。イメージの表現に必ずしも言語的媒介を必要としない描画法や箱庭と違い, TAT は, 図版を前にして浮かんできたイメージを必ず言葉にして語らなければならない。

表1 Harvard版TAT図版に描かれている絵の内容		
	図版番号	絵の内容
1	1	一人の少年がバイオリンを前にして考えている
2	2	畑を背景にして、若い女性、年老いた女性、男性が立っている
3	3BM	一人の人物が長椅子にもたれてうずくまっている
4	3GF	若い女性がドアに手をかけて、うつむいている
5	4	異様な視線の男性に女性が手をかけている
6	5	テーブル、花瓶、ランプのある部屋を女性が覗いている
7	6BM	若い男性と、窓の横に佇む年老いた女性がいる
8	6GF	ソファに座る若い女性の後ろに年長の男性がいる
9	7BM	若い男性と、年長の男性がいる
10	7GF	人形を抱いている少女と、女性がいる
11	8BM	一人の少年の背景に、手術場面が描かれている
12	8GF	一人の少女が夢見るようなポーズを取っている
13	9BM	男性達がグループで寝そべっている
14	9GF	二人の女性がいて、一方は木陰に隠れ、もう一方は走っている
15	10	男性と女性が寄り添っている
16	11	首をのばしているドラゴンと動物様のものがある
17	12M	寝ている若い男性に、年長の男性が手をかざしている
18	12F	若い女性の後ろに、年長の女性がいる
19	12BG	草の茂った場所にボートと樹がある風景
20	13MF	裸で横たわる女性の隣で、男性が顔に手をあてて立っている
21	13B	丸太小屋の入り口に、少年が座っている
22	13G	一人の少女が階段を登っている
23	14	黒い画面に、男性と窓が描かれている
24	15	墓場のような場所に男性が立っている
25	16	白紙図版
26	17BM	一人の男性がロープにつかまっている
27	17GF	背の高いビル、太陽があり、橋の中央に女性がいる
28	18BM	一人の男性と、その背後に三つの手がある
29	18GF	女性が若い人物を抱きかかえている
30	19	雪に覆われたように見える小屋がある抽象的な風景
31	20	暗い画面に、ぼんやりした灯と一人の男性がいる

坪内（1984）を参考に作成

2. 検査の特徴

言語的な応答を要請する心理検査には、ロールシャッハ・テストや SCT, P-F スタディ、言語連想法なども挙げられるが、TAT にはこれらの検査とは異なる 4 つの特徴がある。

(1) 図版の存在

TAT は、思い浮かんだ物語を好きに語るのではなく、図版に即した物語を作らねばならない。これは図版を一方向的に提示し、物語る行為を強いる構造でもあるので、被検者によっては、脅かされたり見透かされている不安を抱く可能性がある。一方で、自分の物語ではなく他人（図版の主人公）の物語、空想の物語を作るという規定が守りとなって、被検者の心理的負担を和らげたり、自分のことを語りたくない、あるいは語る準備が整っていない被検者でも安心して行えるという側面もある。

(2) 検査者による物語の選択

ロールシャッハ・テストはどの被検者にも同じ 10 枚の図版を施行するのに対し、TAT は 31 枚の図版の中から、被検者の年齢や性別に応じて 20 枚を選択する。例えば、被検者が成人男性であれば選択される図版も男性が主人公になっているものが多く、被検者が児童であれば子どもが主人公として描かれている図版が多くなる。これは、被検者が図版の主人公に同一視することによって、自身の葛藤や内的欲求を物語に投射しやすくするためである。しかし、実際には物理的な時間の制約があるために、20 枚の施行は困難である場合が多い。結果として、被検者についてアセスメントしたいパーソナリティの側面に応じて、検査者が図版の種類や枚数を選択して実施しているのが現状である（10 枚以下の施行が大半を占める）。このように、TAT には、被検者に語らせた物語を検査者があらかじめ選ぶという特徴がある。

(3) 物語る行為

ロールシャッハ・テストが曖昧なインクプロットの図版を見て、見えたものをそのまま語ってもらう課題であるのに対し、TAT は図版を見て一つの物語を作ってもらう。例えば、図版 1（一人の少年がバイオリンを前にして考えている絵）において「少年、バイオリン」と見えたものを単語で答えるだけでは不十分であり、少年とバイオリンを関係づけて物語を作らねばならない。そればかりでなく、過去、現在、未来という時間軸を有する物語が

求められる。「少年がバイオリンを見て考えています」という現在の描写だけでも不十分で、その前にどういうことがあり、これからどうなっていくかという過去と未来をも語ることが要請される。単語ではなく文章で応答してもらう検査には SCT や P-F スタディも含まれるが、書字ではなく口頭で応答し、さらに時間的な流れを持った物語を作らねばならない検査は投映法の中では TAT に独自である。

(4) 聴き手としての検査者の存在

独語と違って物語を語る行為には、必然的に聴き手の存在が必要となってくる。大山 (2004) によると、TAT で語られる物語は「被検者と検査者の関係性において、間主観的に布置され」、「両者の共同の結果生まれてくるもの」であり、「語り手が、聴き手に向けて語ることが、表現の仕方やプロットに影響を与え、語りの生成に制約を加えている」。そのため、イメージを言葉にして聴き手に伝えることで物語は生まれていき、語っている最中に物語は新たな展開をし続けていく。TAT は、図版と語り手だけではなく、聴き手が存在してこそ成立する課題であり、物語は三者の相互作用によってその場で生成されていく動的な性質を持っている。換言すれば、TAT は検査者の影響を強く受ける検査だと言える。通常、心理検査は検査者の影響を排して分析・解釈しなければならないが、TAT はそれが困難な検査なのである。

第2節 TAT の問題点

このような特徴を有する TAT は、イメージを語る検査においてロールシャッハ・テストと並ぶ代表的な投映法として位置づけられている。それにも関わらず、心理臨床場面における使用頻度は、ロールシャッハ・テストに比べると格段に低い。臨床心理士の間で、TAT という検査があることは誰もが知っているが、具体的な施行法や分析法となると知っている者はそう多くない。また、研究領域においても、TAT 導入当時は盛んに研究されていたのだが、現在はほとんど行われていない (小山, 2012)。こういった背景には、従来から指摘されている 4 つの問題点が関与している。

1. 標準化された分析・解釈法が確立されていない

最大の問題点は、標準化された分析・解釈法が確立されていないことである。もちろん、Murray,H.A.の考案した欲求-圧力分析が基本的な分析・解釈法として存在している。し

かし、Murray,H.A.は客観的測定では人間の究極的理解は得られないと考えていたため、自らの考案した欲求-圧力分析を一応は提示しながらもそれにこだわることをせず、被検査者の語りを中心においた検査者それぞれの柔軟な解釈を推奨していた。このような創始者の意図で完成された TAT に対し、我が国では幾つかの代表的な分析・解釈法が考案されてきた。例えば、坪内（1984）、安香（1992）、山本（1992）は、図版ごとの刺激特性の違いを重視し、それぞれの反応特徴をまとめている。また、鈴木（1997）は、多く見られる一般的な反応と、特異的・例外的な反応を分類した図版ごとの分類枠をもとに分析・解釈する方法を提唱している。現在は、形式分析は坪内（1984）、内容分析は鈴木（1997）、全体的な分析視点と解釈のポイントは安香・藤田（1997）を参考にして分析・解釈を行う研究が大半である。ただし、依然として統一したマニュアルはないため、それぞれの検査者が、検査目的や自身の依拠する理論的立場に応じた分析・解釈法を採用するのが実状である。従って、使用する図版の枚数や種類、分析対象の範囲（プロトコルのみを対象とする研究もあれば、表情や語り口、検査者の影響も対象とする研究もある）等が研究ごとに異なる上、分析から導き出されるパーソナリティ理解も多様となってしまう。結果として、同じプロトコルに対しても、多様、もしくは相互に矛盾するような解釈がなされる場合もあり、心理検査としての妥当性を疑問視する声すら上げられている。分析・解釈の妥当性については、研究場面では評定一致率を、心理臨床場面ではスーパーバイズ等で検討された臨床的妥当性を根拠に置くものが多い。

ここで、解釈の多様性を伝える狙いから、実際に行われた分析・解釈の一例を提示する。雑誌『臨床心理学』では、2002年の第2巻第5号において TAT の特集が組まれた。そこでは、摂食障害の16歳女性に実施した22枚分の TAT プロトコルを基に、4名の臨床家がブラインド・アナリシスを行っている（井口，2002；藤田，2002；鈴木，2002b；鈴木，2002c；豊田，2002；氏原，2002）。本論文では、4名の解釈のうち、客観性を重視した藤田（2002）の解釈と、長年の臨床経験に基づいた氏原（2002）の解釈を例示する。雑誌には22枚分の全プロトコルと、それに対する解釈が掲載されているが、本論文では図版1（図1）のプロトコルと解釈のみ掲載する。



図1 図版1の略画

表2 16歳の摂食障害女性のTAT図版1のプロトコル (井口, 2002)	
図版	TATプロトコル
1	<p>初発反応時間15秒 全体反応時間1分7秒 * () は検査者のことば</p> <p>これ見て話すんの？ どうやってこたえるの？ どうやってこたえたらいいんですか？ (この子が今どんな風で、これからどんな風になっていくって話をつくってくれたらいい。) 悩んでいます。(どんなことに?) 上手にひけるかな。(えっと、上手にひけるかなっていうのはバイオリンを?) バイオリン。(この子はやったことあるの?) もうすぐコンクールとかあって、上手にひけるかなとか考えとる。(で、どうやろ。) ちょっと不安。(どうするやろ?) コンクールに出やんとこかなとか、出たくないなあとか、失敗したらどうしようとか、そういうの考えとる。(で、どうなると思う?) 成功すると思う。</p>

(1) 分析・解釈例①—藤田 (2002) —

藤田 (2002) は、客観性を重視した分析・解釈法として「情報分析枠」を提唱している。具体的には、「初発反応時間」「導入人物」「テーマ」といった10の分析項目に基づいて図版毎の反応をチェックする。そして、多くの図版に共通する特徴、逆に共通する特徴から外れている反応に注目しながら仮説を作成し、出てきた仮説を重ね合わせて総合解釈としてまとめる。例えば、「結末：結末をどのようにまとめているか」という分析項目では、表2のプロトコルに対して、「なんども質問されて初めて『成功すると思う』と述べている」ことから、「①課題に真剣に取り組んでいない、②全般的に前向きの意欲が乏しく、良くも悪くも将来のことを考えられない状態にある」と分析している。そして総合解釈では、「①表面的には無難に対応するが、基本的には外界に積極的に、深く関わろうとする意欲は乏

しく、課題回避的である」と述べている。

(2) 分析・解釈例②—氏原 (2002) —

氏原 (2002) は、長年の臨床経験と理論的な枠組みを背景にした直観的な方法に依拠し、図版毎に解釈を述べている。図版 1 に対する解釈は、「まず目につくのは、主人公（したがって被験者）の関心もっぱら『いま・ここ』に集中していることである。… (略) …関心が『いま・ここ』集中しているのは、主人公もっぱら『いま・ここ』を生きる、単純化すれば利他的、衝動的ということである。… (略) …だから、物語の結末で『成功する』と言われても、具体的な迫力に欠け、単なる願望充足的なとってつけとしか思えない。16 歳にしては未熟な印象を禁じえない。」「しかし… (略) …主人公はコンクールに出ようとしており… (略) …ひとりよがりではすまない客観的な場に身をさらして、おのれの相対性に気づかざるをえない。そしてそのことは、まさしく思春期的課題としてこの年頃の子どもたちすべてが引き受けるべきものである」と述べている。そして、総合解釈として、「“意識的”には年齢相応の発達をとげているが、無意識的には葛藤回避的な傾向が強く、そのズレが身体化—摂食障害という形で顕在化している可能性がある」とまとめている。

他の検査と違って TAT の場合、2 名のどちらの解釈が妥当かという見方はせず、いずれの解釈も妥当であると見なす（標準化された分析・解釈法がない以上、そうならざるを得ない側面もある）。もちろん、解釈の妥当性を巡って議論が起きることは必然であり、この特集後にも、鈴木と氏原の間で論争が巻き起こった（鈴木, 2003a ; 鈴木, 2003b ; 氏原, 2003a ; 氏原, 2003b ; 藤掛, 2003）。客観性を重視する鈴木 (2002c) が、氏原 (2002) を「解釈の独り歩き」と批判し、これについて氏原 (2003a) が、解釈にあたっては「“直観的”な方法に依拠している」が、その背景には「長年の臨床経験と理論的な枠組み」があり、「何とか辻褄が合っておれば、大体において解釈は妥当という臨床的な感触が私にはある」と反論したのである。さらに氏原 (2003b) は、臨床的に妥当な解釈は幾通りもありえ、その妥当性は、その解釈がクライアントの役に立ったか否か、その後の臨床プロセスが大体解釈どおりであったかどうかによると述べた。これに対して鈴木 (2003b) は、「もし 1 つの物語がどんな解釈をも許すのだったら、もうそれはテストとはいえない」のであり、「解釈における確かな根拠」は「同じ絵に対し作られる可能性のある多種多様な物語との比較検討をおいて他にない。…それは、物語があくまで共通の絵に対する振る舞い方で

あるからである」と述べ、TATの反応分類の必要性和、客観性の確保を強調している。このように、現在もTATの解釈に関して統一した見解は得られていない。

2. 直感と臨床経験を必要とする

TATの分析・解釈は誰もができるようなものではなく、よく訓練された直感が必要であり、経験を積んだ臨床家でないと使いこなせない(山本, 1992)。これが第二の問題点である。雑誌『臨床心理学』でブラインド・アナリシスを依頼された4名の臨床家も、それぞれが豊かな臨床経験を有し、人間を理解するための共感性や直感を十分に備えた熟練者達である。そのような臨床家であれば、標準化された分析・解釈法がなくてもパーソナリティ・アセスメントを行うことは可能であるが、若手の臨床家や、研究ツールとしてTATを用いようとする者はそうはいかない。使用頻度が低いためにTATのスーパーバイザーを見つけることすら難しい現状において、厳密な記号化が可能で初心者でもそれなりに施行可能なロールシャッハ・テストの方が選択されやすいのは当然と言える。

3. 多大な時間と労力を要する

第三の問題点は、テストの実施及び分析・解釈に多大な時間と労力を要することである。Murray, H.A.の施行法に従って20枚を実施すると、検査時間は約1時間～1時間半はかかる。10枚以内の実施であっても、1枚ずつに別々の物語をつくる作業は時間を要するし、被検者の心理的・身体的負担も大きい。テストの実施だけでもこれだけ大変な上、分析の準備段階として、被検者の語りを録音したICレコーダーを基に、それを文字情報に変換する作業が必要となる。プロトコルが完成した時点でようやく分析に着手できるが、分析視点や分析方法を複数の選択肢から自ら選ばなければならないことは先述したとおりである。心理臨床の現場に身を置く多忙な心理士としては、これほど骨の折れる検査を選ぶよりも、他の検査を選ぶ方が自然と言える。

4. パーソナリティの何が分かるのか明確になっていない

第四の問題点は、「テストとしての基本的性格が多義的」(安香, 1990)で、TATの物語が何を意味するのか、パーソナリティのどの側面が明らかになるのか、統一した見解が得られていないことである。これが、「TATを使用・理解する上でTATを不可解で困難なものにし、最も検査者を悩ませ」(草島, 2005)ている。

創始者である Murray,H.A. (1938) は、TAT の目的として「文学的創造力を刺激し、隠されたコンプレックスや、無意識のコンプレックスを暴露するような空想をおこさせようとするものである」と述べ、被検者が「必然的に自分自身の空想を材料（絵）の中に投影」¹⁾ (Murray,H.A., 1938) すると考えた。つまり彼は、TAT の物語を被検者の空想の産物と見なし、そこに無意識的な葛藤があらわれると考えたのである。しかし、このような Murray,H.A. (1938) の構想に対しては多くの議論がある。例えば、Bellak,L.を中心とする攻撃欲求の投射、McClelland を中心とする食欲、成就欲求の投射に関する研究などがあり、現在では Murray,H.A.の基本的な投影仮説は単純には受け入れがたいとされている(佐治, 1963 ; 山本, 1966)。また Holt (1961) は、TAT の物語が空想と同じではないことを強調し、自我の統制が関与した十分目覚めた意識の産物であると述べている。Rapaport,D. (1968) は、精神分析理論の発展、つまり無意識的欲動の内容や欲求の探究から、自我の防衛機制の在り方を重視する自我心理学の流れを考慮し、TAT の物語を想像過程というより課題解決過程と見なし、自我の防衛の在り方やその人の思考過程を重視している。このように、TAT の物語が無意識的な葛藤や欲求の投影なのか、意識的な産物なのかさえ意見が分かれており、TAT の意味するものについて一致した見解は得られていない(草島, 2005)。我が国においては、安香 (1997) は「現実生活における具体的諸条件ないしは状況のコピー」である図版をどう処理するかというところに「現実対処能力」が表れると指摘し、山本 (1992) や鈴木 (2002a) は、「主体が自己の直面する状況に対してどのようにとりくんでいるのか」(山本, 1992) という現実への関わり方が表れていると述べている。これらを総合すると、TAT には被検者の現実に対する関わり方が表れる、という見解が幅広く支持されている。

第3節 時間性に関する問題

TAT は、テキストでは代表的な投影法検査として位置づけられながらも、テストとしての基本的性格や分析・解釈法の曖昧さ故に、心理臨床の現場では置き去りにされているのが実状である。とりわけ、標準化された分析・解釈法が確立されていない点は、客観性が求められる心理検査としては、質問紙法ではなく投影法であることを加味しても致命的な問題である。では、なぜ標準化に至らなかったのだろうか。それは、3~4頁で挙げた『物語る行為』と『聴き手としての検査者の存在』という特徴を有しているためである。TAT は『これまで・今・これから』という語が教示に示され、時間的な流れのある物語を作ら

せるために、記号化・数量化によって切断することのできない物語の流れが生じる。さらに、検査者との相互作用によって物語が作られるので、検査者との関係性や非言語的な要素（表情や語り口など）を排除した、誰が誰にいつ施行しても同じ解釈に行き着くような客観的な分析枠を構築できないのである。

物語る行為とは、単語の羅列や状況の描写ではなく、過去・現在・未来という時間的な流れのある話を作ることに他ならない。心理検査の領域で時間という観点を切り口にする場合、実施日時や全体反応時間、初発反応時間といった物理的な時間か、被検者の時間的展望のような心理的な時間を扱う検査は幾つもあるが、被検者が作った物語の流れや、検査者との相互作用といった物語的な時間を持ち込んだのは TAT だけである。そもそも、物語からパーソナリティをアセスメントするという着想こそが Murray,H.A.の独自性であり、他の検査にはない TAT の魅力である。

物語の流れや、検査者との相互作用に関心を寄せている研究者は筆者だけではない。むしろ近年の TAT 研究は、標準化に向かないこれらの要因を重視し、再検討しようとするものが多い。例えば、大山（2004）、海本（2004）、藤本（2006）、栗村（2007）は、記号化によって切断することのできない物語の流れを読むためには、必然的に検査者の「主観的解釈」（海本，2004）が必要となる。従って、TAT は標準化された分析・解釈法が『確立されていない』のではなく、そのような分析・解釈法が『馴染まない』テストであると指摘する。そして、主観的解釈や相互作用の要因を逆手に取って、治療的利用の方向に活路を見出している。

分析・解釈の主観的側面を取り上げる近年の動向の中で、物語としての性質（以下、物語性）に最も注目しているのがナラティブ研究である（Cramer,P., 1996；大山，2004；海本，2005；草島，2005；栗村，2007；西河，2009；田淵，2011；中島，2012；田淵，2013）。ナラティブの立場は、現場でのアセスメントから一旦離れて TAT の有する物語性を明らかにし、治療的利用に向けた知見を得ようとする。本論文は、TAT 研究の中でもこの立場に身を置き、物語性の一つである時間の問題に着目するものである。すなわち、分析・解釈法の標準化を妨げることとなった物語的な時間とは何か、教示に示された『これまで・今・これから』は何を意味するのか、他の時間概念（物理的な時間、心理的な時間）も含めて TAT はどのような時間の性質（以下、時間性）を有しているのか、といった問題の検討を目的とする。

時間の時間について、従来の分析・解釈では『これまで・今・これから』という教示を、

過去・現在・未来という直線的な時間軸として捉えてきた。主要な分析・解釈法の中でも具体的な分析・解釈手順については安香・藤田（1997）が詳しいが、それをさらに発展させたものが6頁で紹介した「情報分析枠」（藤田，2002）である。この分析項目の一つに「時間的流れ」がある。この項目では、過去・現在・未来が語られているかを○×でチェックし、現在だけでなく過去や未来も語っている被検者は時間的展望があり、現在しか語らない被検者は時間的展望がないと解釈する。つまり、物語の直線的な時間軸を、被検者の時間的展望の投射と見なすのである。TATの領域（心理臨床場面，研究場面を含む）ではこの解釈が自明になっており、教示の『これまで・今・これから』が過去・現在・未来という直線的な時間軸を意味するのか，仮にそうだとした場合に物語に示された直線的な時間軸は被検者の時間的展望の投射なのか，といった部分は十分に検討されていない。もっとも，従来の分析・解釈で重視されるのは形式や内容の分析であって，通常は時間の項目のみを取り出して分析することはしないし，この項目はどちらかと言えば周辺的な情報に位置づけられるので，検討がなされていなくても自然と言えば自然である。

しかし，物語の流れを重視するナラティブ研究においても，時間の問題についてはあまり議論されていない。例えば草島（2005）は，TATは過去・現在・未来という時間軸を有するために，語り手はTATをきっかけにすることで，自分の人生の過去・現在・未来を有機的に結んだ物語を引き出しやすくなると指摘している。従来の分析・解釈と同様，ナラティブ研究でも教示に示される『これまで・今・これから』を過去・現在・未来という直線的な時間軸と見なしている。さらに言及すれば，TATの領域では，過去・現在・未来，時間，時間軸，時間的な流れといった時間に関する用語が明確に定義されないまま使用されているのが現状である。

こういった状況を俯瞰すると，従来の分析・解釈においても，主観的側面を重視する立場においても，ナラティブ研究においても，TATの時間性を明らかにすることは極めて重要である。そもそも，Murray,H.A.が物語の作成を検査課題とし，教示に『これまで・今・これから』という語を取り入れたのは，テーマ（欲求－圧力の力学的構造）を持ったエピソード（出来事）を引き出すためであり，我々が想像するような直線的な時間軸とは概念が異なっている可能性が高い。Murray,H.A.の推奨する欲求－圧力分析が使われなくなって久しい上，その曖昧さ故に心理臨床の現場で置き去りにされている現在，基本的性格の一つである時間性について検討することは，創始者の意図に立ち返る意味でも，治療的利用に向けた知見を得る意味でも，今後のTATの発展に寄与するものである。

<注>

¹⁾ 本論文では、投映法検査における「外界に関する特定の知覚に託して自己の内的な思想、願望、気分などを表現する機制」（小此木・馬場，1972）を『投映』と表記し、フロイトが述べた『自らが認めがたい欲求を他者の中に写し出す』防衛機制を『投影』と表記する。

第2章 本論文の目的と研究意義

第1節 本論文の目的

本論文は、ロールシャッハ・テストと並ぶ代表的な投映法でありながら、その基本的性格や分析・解釈法の曖昧さ故に使用頻度の低い TAT において、現場でのアセスメントから一旦離れ、基本的性格の一つである物語性についてナラティブの視点から基礎研究を行うとしようとするものである。物語性の中でも、物語の流れとして理解されている時間の問題に本論文は着目する。

まず、ナラティブの視点から物語性の定義を行った上で、教示の『これまで・今・これから』は何を意味するのか、分析・解釈法の標準化を妨げることとなった物語的な時間とは何なのか、他の時間概念（物理的な時間、心理的な時間）も含めて TAT はどのような時間性を有しているのか、といった時間性に関する理論的整理を第一の目的とする（第2部）。これにより、過去・現在・未来、時間、時間軸、時間的な流れといった時間に関する用語が明確に定義されないまま使用されている現状に、統一的な知見を提供することができる。

次に、従来の分析・解釈の代表である藤田（2002）が提唱している、過去・現在・未来に3区分して時間の問題を検討する方法について、ナラティブの視点から再検討を行う（第3部）。そうすることで、若手の臨床家や、研究ツールとして TAT を用いようとする者が「情報分析枠」（藤田，2002）を用いる際に、より本質的な時間性理解に基づいた分析・解釈が行えるよう支援することを目指す。

また、本論文は、物語の流れを重視し、「主観的解釈」（海本，2004）や相互作用の要因を加味して TAT を治療的に利用しようとする立場に属している。この立場の研究発展のために、本質的な時間性理解に基づいて、現場で実際に活用できる分析・解釈視点を構築することを第3の目的とする（第4部，第5部）。併せて、TAT の時間性が被検者のパーソナリティのどの側面を明らかにするのかという、従来の分析・解釈では被検者の時間的展望の投映と見なされている部分について、構築された新たな分析・解釈視点を基に考察を加

えることを第4の目的とする（第4部，第5部）。

なお，TAT に関する大半の研究とは異なる本論文の特徴として，基礎研究であること，及び仮説生成型研究であることの2点を強調しなければならない。本論文は基礎研究であるため，現場で行うアセスメント内容をデータとして採用していない。つまり，現場では，形式分析や内容分析，熟練した臨床家の直感など様々な分析視点に基づいて，総合的に被検者のパーソナリティ・アセスメントを行うが，本論文は，アセスメントから一旦離れて，時間性に関する分析視点のみを抽出して検討を行っている。そのため，特に第3部～第5部の臨床研究においては，一つのプロトコルに対して時間性の問題のみを取り出して検討しているのだが，もし同じプロトコルに現場のアセスメントを行うならば，パーソナリティ・アセスメントとしては異なった内容になる可能性が高い。時間性という一部分の情報のみを抽出して検討を行うのであるから，複数の情報を基に総合的に解釈する現場のアセスメントとは多少異なっているとしても，それは必然である。あくまで本論文は，TAT の時間性に関する本質的かつ統一的な知見の獲得のみを目的としている。

さらに，本論文は仮説検証型研究ではなく，仮説生成型研究に位置する。すなわち，仮説を設定した上でそれを検証するというトップダウン方式ではなく，予め結果を想定せず，研究環境や研究条件を人為的に操作することなく得られたデータから，時間性に関する仮説を練り上げることを目的としたボトムアップ方式の研究である。そのため，第3部～第5部の臨床研究は，予め仮説を設定して検討されたものではなく，各部で実際のデータを基にして考察を重ねたものである。TAT 研究では，既存の精緻な理論が存在しているわけではないので，本論文において時間性に関する仮説を生成することで，「主観的解釈」（海本，2004）や相互作用を加味した治療的利用に向けた理論構築の足がかりとなることを目指す。

第2節 構成

本論文の構成は以下のとおりである。

第1部は，TAT の特徴と問題点に触れた上で，本論文の目的と構成，及び研究意義を述べる。

第2部は，国内の先行研究が物語の流れに対してどのようなスタンスを取ってきたのか，全体の動向を確認する。そして，物語の理解について，従来の立場とナラティブの立場はどのように異なるのか，すわなち（従来の研究が述べる）物語とナラティブの違いを明確

にする。その上で、TATの時間性について理論的整理を行う。

第3部は、従来の分析・解釈の代表である藤田（2002）が提唱している、過去・現在・未来に3区分して時間を検討する方法について、本研究のために協力を依頼した被検者29名のプロトコルを素材にして、ナラティブの視点から再検討を行う。

第4部は、心理臨床場面における時間的流れの生じていないプロトコルを、第5部は時間的流れの生じているプロトコルをそれぞれ素材として、本質的な時間性理解に基づく分析・解釈視点を検討する。併せて、TATの時間性が被検者のパーソナリティのどの側面を明らかにするのか考察を行う。

第6部は、これまでの要約と総合的考察を行い、Murray,H.A.がなぜ物語作成課題を考案したのか、教示の『これまで・今・これから』は何を意味していたのか、創始者の意図を再考する。そして、本論文で得られた知見と本論文の限界、及び今後の展望について述べる。

第3節 研究意義

我が国においてTATは、標準化された分析・解釈法は確立されていないものの、坪内（1984）の形式分析、鈴木（1997）の内容分析、安香・藤田（1997）の全体的な分析視点と解釈ポイントを参考にしながら、検査目的や、各臨床家の依拠する理論的立場に応じてアセスメントが行われている。今後もこの流れは変わらないであろうし、変える必要もない。実際、筆者が心理臨床場面でアセスメントを行う際も、上記の手続きで分析・解釈を行っている。

本論文の研究目的は、こういった従来の分析・解釈法や、現場のTAT実践を決して否定するものではない。むしろ、アセスメントとして使用する際にも、心理療法の過程で治療的に使用する際にも、検査者が熟知しておかねばならないTATの基本的性格の一つを明らかにすることで、双方の使用場面において検査者の益となることを目指している。では、分析・解釈の主観的側面を取り上げる立場の中でも、とりわけ物語という部分に注目するナラティブの視点に立つことによって、どのような益が得られるのだろうか。研究意義を以下に述べる。

一つ目に、ナラティブの視点から時間性を検討することで、基本的性格の肯定的側面を確固たるものにするができる。第1章第2節TATの問題点で取り上げたように、TATについては、分析・解釈法の標準化がなされていない、パーソナリティのどの側面が明ら

かになるのか不明確である，といった否定的側面が強調されることが多く，ロールシャッハ・テストに比して格下であるかのような印象を抱く者も多い。しかし，否定的側面の要因である物語の時間的な流れこそ TAT の本質的特徴であり，これにより，心理検査でありながら治療的利用にも適するという独自の性格が生まれていることが明示できれば，検査者が TAT を使用する際，どのような場面で，いかにして使用すべきか公平に判断するための知見を提供できる。この作業が可能になるのは，投映法という観点から一旦離れ，TAT を一つの物語として理解しようとするナラティブの視点だからこそである。下山（1990）が「絵物語法」を考案して TAT の治療的利用に注目しているように，TAT を物語として使用することがクライアントの治療に役立つという指摘は従来からなされてきた。しかし，ナラティブの視点が明らかにするのは，物語的利用法ではなく，TAT の基本的性格である。否定的側面にスポットライトが当たりやすい TAT において，物語作成課題という原点に立ち返り，基本的性格の一つである時間性を再考することは，肯定的側面をも照らして検査者に過不足ない理解を提供してくれる。

二つ目の意義として，創始者である Murray,H.A.の意図に立ち返ることができる。時間性を検討し，過去・現在・未来，時間，時間軸，時間的な流れといった時間に関する用語を理論的に整理していく過程では，必然的にMurray,H.A.の意図を問わねばならなくなる。いかなる概念・理論であっても，混乱や問題が生じたときには考案者の定義に戻ることが鉄則である。Murray,H.A.の推奨する欲求-圧力分析が使われなくなって久しいばかりでなく，被検者の内的欲求と外的圧力の力学的構造が投影されるという Murray,H.A.の主張すらすべての検査者が知っているわけではない現在，ナラティブの視点が TAT にもたらす益は決して少なくない。

三つ目の意義として，「主観的解釈」（海本，2004）を重視する研究の発展に貢献することができる。この立場は研究数が少ないこともあって，研究者それぞれが散発的に研究を行っている段階である。本論文において，ナラティブの視点から物語性をしっかりと定義し，時間性について整理することができれば，例えば大山（2004）や海本（2005）の述べる理論的知見を実際の分析・解釈視点に繋げていく道筋が開けるし，草島（2005）の述べる TAT の治療効果についても理論的な説明が可能となる。

基礎研究である以上，現場の TAT 実践にすぐに役立つ知見を提供することはできないが，上記3点の意義を備えた本論文は，今後の TAT の発展に大きく寄与するものである。

第2部 理論的検討—物語と時間—

第3章 国内の文献展望（研究1）

第1節 国内の文献展望

本節では、TATに関する国内研究の文献展望が殆ど見られない現状を指摘した上で、先行研究が物語の流れに対してどのようなスタンスを取ってきたのか、全体の動向を把握する。

1. 文献展望の必要性

TATに関する国内研究をレビューした論文として挙げられるのは、宗田・岡本（2007）である。彼女らは、アイデンティティ研究にTATを取り入れる試みの中でレビューを行っている。しかし、それは臨床心理学領域と教育心理学領域の一部に限られており、TATに関する学術論文の全体を把握することは難しい。TATを用いた研究では、各研究者がそれぞれの研究目的やスタンスに合致した分析・解釈法を採用しているわけだが、概して同じ方法を用いた先行研究しか把握・引用していないことが多い。TAT研究の全体像や、自身の研究が全体のどの部分に位置するかを確認せずに行っている研究が少なからず存在する事実は、TATの基本的性格の断片しか捉えていない研究者を増やすことに繋がり、ただでさえ多様なスタンスが共存する研究現場に更なる多様性を放り込み、極端に言えば現場を混沌としたものに変えかねない。その結果、TATの本質的特徴がますます不可視化されてしまう危険性もある。そこで本論文では、時間性すなわち物語の流れに対する先行研究の動向を把握する目的に加えて、各研究者の全体的理解の一助となることを意図して、TATに関する国内の学術論文全体のレビューを行う。

そして、レビューにあたっては<テスト性・客観性><物語性・主観性>という2つの観点を切り口に行うこととする。これは、藤本（2006）が提案した観点である。藤本（2006）は、TATが「テスト性・客観性」と「物語性・主観性」の二つを併せ持つ心理検査であることを指摘している。前者は、「査定的な文脈」の中で「分析・解釈の根拠をTAT及びTATの反応そのものに求める」立場で、「集団の中に個人を位置づけ、テストの特徴に従って物語を意味づける」。一方、後者は、「治療的な文脈」の中で、「分析・解釈の根拠を検査者の臨床的経験・主観に求める」立場で、「個人の物語を唯一独自のものとし、唯一独自の関係性や検査者の直観などに従って物語を意味づける」。両者は両立が難しく、どちらかを強調した立場で分析・解釈されることが多い。また栗村（2007）も、TATに関する代表的な書

籍から同様の考察を行っている。栗村（2007）は、藤本（2006）の指摘した TAT の持つ二側面を、それぞれ「記号化や標準反応などを求めて数量化の道を開こうとする立場」、「直観を用いて個別理解の方法を取ろうとする立場」と表現している。両者が指摘するこの二側面は、臨床家の実際の分析・解釈例、及び国内で代表的とされる分析・解釈テキストから導出されたものであり、TAT の本質を指摘した重要なものである。そこで本論文では、藤本（2006）の定義に栗村（2007）の定義も含めたものを<テスト性・客観性><物語性・主観性>と表記し、この観点からレビューを行うこととする。なぜ栗村（2007）の定義を加えたかと言うと、数量化による実証的な TAT 研究を行う者の中には、TAT を査定（アセスメント）的な文脈ではなく、研究のツールとして用いる者が多数見られるためである。藤本（2006）の定義する「テスト性・客観性」だけではそれらの研究を位置付けることが困難なため、栗村（2007）の「記号化や標準反応などを求めて数量化の道を開こうとする立場」という定義を加えることとした。この定義により、物語の流れという点では、<テスト性・客観性>は、アセスメントとしての客観性を重視し、物語の流れを切断して記号化・数量化によって解釈を行う立場、<物語性・主観性>は、治療的利用のために主観性を重視し、物語の流れを活かして検査者の主観性に基づいて解釈を行う立場と換言することができる。

なお、対象とする学術論文は、CiNii（NII 論文情報ナビゲータ 国立情報学研究所）でキーワード『TAT, 心理』か『Thematic Apperception Test』の条件を満たした 123 本（2010 年 11 月時点）に、近年の TAT 研究で引用されている文献 19 本を加えた 142 本である。TAT 研究が行われている領域は、臨床心理学領域、犯罪心理学領域、医学領域、教育心理学領域の主に 4 つであるが、今回は全ての領域において先述の視点から分類・整理することとする。

2. <テスト性・客観性>を重視した研究

この立場は、臨床群、或いは非臨床群を対象として、対象者の心理的特徴を明らかにすることを目的とした研究が多数を占めている。方法としては、統制群を設けて両者の TAT を比較する研究か、もしくは TAT と質問紙を併用して対象者の心理的特徴を検討するものが多い。

まず、臨床群を対象とした研究を概観する。臨床心理学領域においては、アレキシサイミア特性を検討した研究（一木, 2006; 丸山, 2010）の他、摂食障害者（藤本, 2005, 2007）

やDV被害者(井上, 2007), 境界例者(藤田, 1992), 統合失調症者(関山, 2003; 関根・緑川・馬場・植元・土川・青木, 1964), バセドウ病者(石原, 2003), アトピー性皮膚炎者(土井, 2002a, 2002b, 2003), 慢性腎疾患児(西本, 2000), 養護施設児(須和田, 1993), 精神薄弱児(木村・岡部, 1977)を対象とした研究がある。

犯罪心理学領域においては, 殺人犯(斎藤, 2008), 放火犯(斎藤, 2002), 非行少年(水島, 1956; 斎藤, 1995; 坂野・澁澤・宮野・奥野・齊藤・久永・倉崎, 2007; 外川・岡田, 2002; 外川, 1999; 藤田, 1984), 女性犯罪者(坪内, 1979)を対象として, TATからパーソナリティのアセスメントを行っている。

医学領域においては, PTSD患者(井上・林・天野・端詰・坪井, 2009a, 2009b), 内科受診患者(細谷・村山・桂, 1990), がん患者(蝶間林・水口・森口・中里, 1983a, 1983b, 1984; 蝶間林・水口・鬼頭・中里, 1985; 蝶間林・水口・森口・中里, 1986; 水口・蝶間林・鬼頭・中里, 1982; 水口・蝶間林・中里, 1981, 1982), 肺結核患者(花沢, 1957), インポテンス患者(大野・熊本・毛利・青木・豊島・杉山, 1985)が対象となっている。

次に, 非臨床群を対象とした研究を対象者の年代別に概観する。臨床心理学・教育心理学領域においては, 大学生を対象として, 自意識(高橋, 2005)や自尊感情(徳本・北山, 1995), 自我像(広瀬・氏原, 1990), 孤独感(原田, 1999), 強迫性格(関山, 2001b), 心配性(根本・毛利・寺島・中沢・山本, 1984), 対人不安(雨宮, 1995), 対人恐怖(木村, 1983), アイデンティティ(石谷, 1994; 神野, 2009), 防衛機制(木村, 1983)という側面に注目して検討している。他にも, 青年期を対象にした研究には, TATを用いて高校生・大学生の対人関係を検討した研究(石谷, 1993), ユングのタイプ論に基づき高校生・大学生における各タイプ者の特徴を検討した研究(康, 1995), 中学生・高校生・大学生の男性イメージ・女性イメージを検討した研究(辻井, 1980)が挙げられる。思春期を対象にした研究には, 高校生の人格発達と進路決定の関連(下山, 1983)や, 不安条件下での親和動機を検討した研究(那須, 1975), 中学生の達成動機を検討した研究(橘・子安, 1978)がある。他には, 小学生を対象に達成動機(塚本, 1985; 西田, 1978), 攻撃的行動(高橋, 1960)を検討したり, 中流階級と下流階級の児童のTATを比較している研究(鈴木, 1960), 未熟児と成熟児の発達をCAT(児童統覚検査)日本版を用いて比較した研究(泉, 1963), 高齢者のパーソナリティ研究(若本, 2004; 下仲, 1979; 村井, 1980)や, 回想法の内的プロセスの変化を検討した研究(田中・中丸, 2006)などがある。小西(1963)は, 農村と漁村に住む者の行動様式の差異について, TATを用いて検討している。大淵(1979)は,

自衛隊員の攻撃性について検討している。また、対象者の心理的特徴の把握を目的としない研究として、渡部・土屋（1995）は、樹木画で測定されるパーソナリティ特徴を明らかにするために TAT との相関を検討している。内藤（1994）は、自身の発明した PAC 分析を TAT に適用し、その有用性を示している。宗方（1983）は、TAT の各版（Harvard 版、日本版、精研式、名大版）や P-F スタディの図を参考にして独自の絵画刺激を作成し、それを基に青年期（高校生、大学生、非行少年）の対人的価値観を把握する試みを行っている。中島（1959）は、音 TAT（視覚障害者のパーソナリティ理解のために、音刺激を与えて TAT と同様に物語をつくらせる方法）の妥当性を検討するために TAT を併用している。

医学領域においては、双生児の相互関係を TAT の一致度から検討した研究（小島・安藤・大野，1998；小島・大野，2000a，2000b）が挙げられる。臨床群では、臨床心理学、犯罪心理学、医学領域での研究が多いのに対し、非臨床群では健常者を対象とするために教育心理学領域での研究が多くなっている。

ここで、同じくテスト性・客観性を重視する立場にあっても、臨床群と非臨床群では TAT に対するスタンスが異なっていることを指摘しておかねばならない。スタンスの相違を明示するために、臨床心理学領域における土井（2003）と原田（1999）の研究を両群の一例として取り上げる。臨床群を対象とした土井（2003）は、アトピー性皮膚炎患者の外界に対する関わり方の特徴を把握する目的で、外来治療を受けている 31 名を対象に TAT 図版 4 枚と MPI (Maudsley Personality Inventory) を個別に実施している。TAT の分析・解釈にあたっては、安香・坪内（1968）、坪内（1984）を参考にして語りの構成に関する分析指標を作成している。これは、「刺激の認知」（＝刺激の命名をしているか）、「刺激の明細化」（＝刺激の明細化がなされているか）、「時間的継起の付与」（＝少なくとも過去が述べられているか）、「未来設定」（＝未来が述べられているか）、「雰囲気と言及」（＝場面全体の雰囲気について述べられているか）といった 22 の項目から成り、一つのプロトコルに対してこれらが認められるか否かを判定する。認められた場合は 1 点、認められない場合は 0 点を与え、図版 4 枚分の合計得点をその被検者の得点とし、MPI の得点によって分類された 3 群間で TAT の得点を比較している。その結果、各群に「大まかな骨組みは捉えるが、情緒的な肉付けが欠けるアレキシシミックなかかわり」「主人公が決定され、関係性や内面の葛藤が主題にされる神経症的なかかわり」「それぞれの刺激に対して感じたことが一つの体系をなさず、従って関係性や葛藤を生成しない両価的なかかわり」という特徴があることを見出している。

一方、非臨床群を対象とした原田（1999）は、孤独感の強い青年の内的世界を探る目的で、中学生 243 名、大学生 242 名に対して、孤独感尺度などの質問紙に加えて TAT 図版 5 枚分の物語を記述させる形式で集団実施している。TAT の分析・解釈ではテーマのみを扱い、例えば図版 1（図 1）では、「ヴァイオリンをうまく弾けない悩み（解決）」「ヴァイオリンをうまく弾けない悩み（未解決）」「ヴァイオリンを壊してしまった悩み（解決）」「ヴァイオリンを壊してしまった悩み（未解決）」といったテーマを抽出し、孤独感尺度得点の高群と低群で比較検討を行っている。その結果、孤独感の強い青年の内的世界の特徴として「親との愛情関係にまつわる悩みが解決の見えない形で存在する」「内的世界に住む他者（内在化された他者）は、悲しみや心配を共有するような他者ではなく、それどころか、自分の存在を脅かすような存在である」といった点を考察している。

以上のような臨床群と非臨床群の共通点として、物語の流れを切るという特徴が挙げられる。＜テスト性・客観性＞を重視した研究は、必然的に「比較的大雑把な基準で物語の流れを切る」（藤本，2006）ことになる。例えば土井（2003）の研究では、22 の分析指標がプロトコルに認められるか否かをチェックするのみなので、被検者一人ひとりの 4 枚分の物語がどのような内容であったのか、いかなる展開を見せたのか把握することは難しい。原田（1999）の研究では物語のテーマを扱っているが、仮に同じ「ヴァイオリンをうまく弾けない悩み（解決）」に分類された被検者であっても、どのような背景で悩むことになり、いかなる展開を経て解決したのか、また解決とはどういった事態を指したのかは一人ひとり異なるはずである。このように、被検者が語ったその人独自の物語を窺い知ることができない分析・解釈は、物語の流れを切っていることを意味する。



図 2 図版 2 の略画

これについて、藤本（2006）は図版 2（図 2）を例にとって次のように説明している。例えば、図版 2 において『描かれている 3 人を全て関係付けたか』という分析項目があったとする。この時、『3 者関係が持てるかどうか』という一点においてはチェックできる物語も、その後 3 人がばらばらになっていくという展開や、『3 人は仲のいい友達同士でした。しかしあることをきっかけに仲違いしたまま、死ぬまで会うことはありませんでした』という筋であった場合、3 者関係が持てるとは言い難いところもある。つまり、『3 者関係が持てるかどうか』という内容と、その後の 3 者関係の様態は完全には切り離せないのだが、分析枠の設定や記号化・数量化によって『3 者関係が持てるかどうか』という項目のもとに流れを切ってしまうと、その質的な差異を見落としてしまう恐れがあるのである。

また、＜テスト性・客観性＞を重視する研究において、切るのは物語の流れだけではない。河合（2001a）が、近代科学においては「切る」ことが重要となり、「研究者と研究される対象とは切断されていなくてはならない」と述べているように、検査者と被検者との関係もまた切断されている。さらには、被検者の表情や語り口といった非言語的側面も切断され、文字化されたプロトコルのみが分析対象となっている。TAT で物語を語る際の表情や語り口といったものは、被検者が図版をどのように受け取り、登場人物をどのように捉え、意味づけているかを判断するための重要な材料である。例えば、図版 1 で『この少年はバイオリンを前にして悩んでいます』という内容を語るにしても、あたかも自分がその少年であるかのように感情の込もった口調で語る場合と、抑揚のない声で淡々と語る場合では、その後の物語をどのように意味づけていくかの方向性が異なってくる。それは、必然的に解釈にも影響を与えるはずである。このように、＜テスト性・客観性＞を重視する立場では、物語の流れだけでなく、検査者との関係性や非言語的側面を分析対象から切り離すことによって、誰が誰にいつ施行しても同じ解釈に行き着くような客観性を担保するという特徴がある。

このような共通項がある一方で、土井（2003）と原田（1999）の相違点として、何のために物語の流れを切るのかという目的の違いが挙げられる。土井（2003）は臨床群のアセスメントを目的とし、心理検査として TAT を用いているため、対面形式で個別に実施し、結果についてもフィードバックを行っている。それに対して原田（1999）は、青年期の孤独感という構成概念の検討を目的とし、測定ツールとして TAT を用いているために、記述形式で集団実施している上、フィードバックの記述は論文中には見られない。仮にフィードバックをしていたとしても、おそらく対象者全員の全体的な傾向であって、その人個

人の TAT を分析・解釈した結果ではないはずである。ここで重要なのは、TAT が心理検査であるという基本的事実である。心理検査とは、何らかの問題や疾患を持った個人の心やパーソナリティを把握・理解し、その個人の治療に役立てる目的で行われるものである。そのため、非臨床群を対象とした研究のように、アセスメントの目的を持たずに物語の流れを切ることは、TAT が本来持つ〈テスト性・客観性〉から外れてしまう危険性を孕んでいる。この点は、原田（1999）が記述式で実施していることから窺える。聴き手に向けて直接語られた口頭（オーラル）の物語と、下を向いて紙面に記述されたリテラルな物語を、同次元では検討できない。もしアセスメント場面で TAT を記述形式で実施したならば、検査者に批判が向けられるはずである。なぜなら、TAT の通常の手続きではないからである。筆者は、集団実施と記述形式での実施には、ことさら危機感を抱いている。こういった手続きで行われた先行研究を目にした別の研究者が、「パーソナリティに関する構成概念の研究手法として TAT が使える」と安易に受け取りかねないし、それによって TAT の本来性はますます不可視化され、研究現場が混沌としたものになりかねない。文献展望は、TAT 研究にこういった危険性が孕んでいることを示唆してくれる。そして、危険性を省察した上であれば、TAT をツールとして用いることにも意義が生まれ得る。なぜなら、こういった研究が多数あるということは、TAT の記号化・数量化されたデータが、アセスメントとしてだけでなく基礎的な資料として扱えることを示しているからである。その結果、TAT の本来性に関する新たな知見が得られる可能性も考えられる。例えば、孤独感の検討のために TAT を用いた結果、特定の図版に孤独感が表れやすいという図版の特徴が示されるといったように。要するに、〈テスト性・客観性〉の立場に身を置く研究者は、TAT の問題点や本来性を踏まえた上で、なぜ敢えて TAT を用いるのか、どのように TAT を用いようとしているのか、記号化・数量化のために物語の流れを切った場合削ぎ落とされるものは何か、といった点について熟考しておく姿勢が求められるのである。

3. 〈物語性・主観性〉を重視した研究

この立場には、TAT の治療的効果や、検査者－被検者の関係性を重視した事例研究、実証研究、及び文献研究が名を連ねる。

TAT を使用した事例研究として、臨床心理学・教育心理学領域では、田畑・生越・間宮・渡辺（1979）、神野（1980）、下山（1990）、小川（1993）、槇田・増野（1995）、豊嶋（1998）、安藤・田村（2003）、渡部（2009）、犯罪心理学領域では藤田（1996）の研究がある。実証

研究においても、高齢者に TAT を実施しその治療的有効性を考察した研究（杉浦，2003）や、TAT を媒介としたエンカウンターグループには参加者の心理的成長を促す効果があることを指摘した研究（西原，2003）は、物語性を重視した研究と言えよう。また、読み手の主観的領域の重要性を考察した海本（2004）の文献研究も挙げられる。

一例として、渡部（2009）の事例研究を取り上げる。この事例では、子どもの問題を主訴に来談した Cl.（40 歳，女性）に対する 2 年間の面接の中で、面接開始から 1 年を経過した時期に、Th.が検査者となって TAT 図版 22 枚を実施している。当初は Cl.の人との関わり方のアセスメントと、面接の仕切り直しを目的として行われた TAT であったが、結果をその後の面接で取り上げたことで Cl.の自己開示が促され、面接にとって治療促進的に機能したことを報告している。アセスメントについては、鈴木（1997）を参考にして形式分析・内容分析を行い、「母親に受容された経験が乏しいことから、基本的信頼感が低く、人に対して不信感を抱きやすい。…対人関係においては、情緒的に関わるより知的に関わる傾向強い。しかし、…気持ちにゆとりを感じることができれば、人と情緒的に関わる能力を備えている」といった特徴をまとめている。このアセスメント結果を基本としながらも、＜物語性・主観性＞を重視しているポイントとして、まず Th.が検査者となっている点が挙げられる。これは、「結果をその後の面接で取り上げ、ともに考えることを目指していた」ためであるが、検査者－被検者の関係を切るよりも、むしろ繋ぐことによって物語を理解していこうとする姿勢の表れである。また、「開始直後に少し緊張が見られた」「次第にやや退行した様子で、ゆっくりとしたペースではあったが自発的に語った」など、被検者の態度や語り口といった非言語的側面にも注目している。さらに、最終図版である図版 16（白紙図版）に対して、検査者は「初めて Th.に開示された Cl.の深い心情」との印象を受け、この図版を重視している。これは、分析・解釈の根拠を検査者の臨床的経験・主観に求めていることに他ならない。検査者が、図版 16 の物語の流れについて、「目的に向かって迷うことなく進みたいが、家族も含めて人との調和をとりながらなので、まっすぐ進めない。自分が自分でありたいという気持ちはすごく強いけれど、ほんとにそれでいいのかと、それにもなりきれない。常にバランスと保ちながらやっていくというのに割り切れたら、それもいいのかとも思う」とまとめている点や、この流れから Cl.のどちらとも決められない気持ちを感じ取っている点、「一生懸命伝えようとする Cl.の思いを強く感じた」と述べている点なども、＜物語性・主観性＞を重視していなければ記述できない部分である。

＜物語性・主観性＞について文献展望を行った結果、この立場は必然的に検査者－被検

者の関係性を分析視点に取り入れるために、治療的意義を見出す事例研究や、治療場面での有用性を示唆する調査研究に適していることが示唆される。さらに、それだけではなく、もう一つの動向が浮かび上がってくる。これまでに取り上げた〈物語性・主観性〉の先行研究は、〈テスト性・客観性〉の立場が切断してきた物語の流れ、検査者との関係性、非言語的側面のうち、主に後ろの 2 つに注目しており、物語の流れを切断することなく活かそうとする分析・解釈については、まだ十分には検討されていないのである。この検討にあたっては、分析・解釈以前に、そもそも物語とは何なのか、物語の流れとは何を意味するのかといった物語性の解明が求められるため、心理臨床研究が担う領域というよりは、ナラティブ研究が担う領域であろう。

もっとも、この部分にも既に関心は寄せられている。〈物語性・主観性〉を重視する立場の中に、TAT が物語作成課題であることに立ち返り、投映仮説に基づく心理検査の視点とは異なるナラティブの視点から、物語性を明らかにしようとする動きが近年盛んになっている（大山，2004；海本，2005；草島，2005；栗村，2007；西河，2009）。現在この立場からは、「人生の決定的な場面においてその被検者が図らずも自ら毎回選びとり、自らが構成してしまうパターン」（大山，2004）が物語に表れるという TAT の本来性や、「時間的な流れを含む TAT 物語をきっかけにすることで、過去・現在・未来を有機的に結び、自分自身に関係し、かつ時制を含む物語を引き出すことが可能」（草島，2005）という治療的効果に関する指摘がなされているが、未だにナラティブ概念の整理がなされていない状態であり、物語性の解明にはさらなる研究が待たれるところである。本論文は、TAT 研究の中でもこの立場に位置し、物語の流れが何を意味するのかについて検討を行うものである。

4. その他の研究

これには、TAT そのものの性質や、分析・解釈法について検討する実証研究、文献研究が多くを占めている。TAT の性質を検討した研究では、TAT の施行法（西河，2009；郷古，1980a，1980b）や時間制限の効果（堀口，1982）、分析基準の検討（岩川，1966；丸井・今井，1964；豊嶋，2004）、図版の原典への考察（齊藤，2003）、鳥獣戯画との関連を検討する研究（岡本・蓑下・佐藤，2008）、TAT とロールシャッハの相違を考察した研究（Dreger，R. M.，1982；鈴木，2004；高瀬，2008）などが挙げられる。他にも、TAT の攻撃反応（大淵，1977）や、うつ病のアセスメントへの適用可能性（杉山，2007）を考察した文献研究、TAT 反応時のポリグラフ反応を測定した研究（本田，1970）、TAT の否定的感情部分から

個人的特徴の反映を見極める基準を検討した研究（染谷，2005）がある。

分析・解釈法に関する研究には，海外の理論を検討したものとして，精神分析的立場からの分析・解釈を概観した研究（西河，2008），自我心理学的な精神分析理論に拠って立つ Murray, H.A., Bellak, L., Rapaport, D.らの分析・解釈法ではなく，対象関係論に立脚した分析・解釈を強調する研究（広瀬・氏原，1987），対象関係論の中でも Westen, D.W.の理論に立脚した研究（赤塚・豊田，1994；大矢，2003）がある。また，Cramer, P.の防衛機制を捉える理論を重視して分析・解釈を行う研究（赤塚・豊田，2004）もある。

国内の理論を検討したものとして，一事例をもとに4人の臨床家が分析・解釈を行った研究（藤田，2002；井口，2002；鈴木，2002b；鈴木，2002c；鈴木，2003a；鈴木，2003b；豊田，2002；氏原，2002；氏原，2003a；氏原，2003b；藤掛，2003），国内の代表的な分析・解釈法を概観した研究（藤本，2006；栗村，2007）がある。安香・坪内（1968）は，TAT アナリシス（坪内，1984）の基となる刺激認知の分析基準の検討を，山本・越智（1964）はかかわり分析（山本，1992）の出発点として現象学的アプローチを試みている。

また，分析・解釈法の標準化を行う試みとして丸井（1960），藤田（2001），内藤（2005），川越・安香・藤田（2001），関山（2001）の研究，教示の効果と信頼性を検証した研究（川越・藤田，1999）などがある。

教育心理学領域においては，学校教育または障害児教育を専攻する大学院生がTATの集団学習を行い，その事例を紹介した一連の研究がある（藤田・藤野・辻本・岩溪，1993；藤田・中村・山内・蔡，1993；藤田・高橋・大蔵・桐石・窪田・曾我本・林，1994a, 1994b；藤田・小笹・澤田，1996；藤田・三野・林，1996；藤田・中井・清水・松森，1997a, 1997b；藤田・阪木・富田・小栗，1999, 2001；藤田・篠崎・林，2002, 2003；藤田・平岡・西面，2003, 2004；藤田・堀内・平沼，2007a, 2007b）。

犯罪心理学領域では，性的虐待被害児童のアセスメントに関する文献展望（越智，2003）や，非行性のアセスメントについて TAT とロールシャッハの相違を考察した研究（進藤，2006）がある。

中村（1973）は，TAT 研究ではないが，共感性に関する文献考察の中で TAT を用いて共感性を検討した海外文献を紹介している。

第2節 TAT における二つの真実

先行研究を整理した結果，藤本（2006）や栗村（2007）の指摘する通り，TAT を用いる

研究は大きく 2 つの立場に分かれることが示された。一つは、＜テスト性・客観性＞を重視する立場である。この立場は集団の中に個人を位置づけ、個人の反応が標準的な反応から外れているか否か、その個人の属する集団の反応特性は何かといった点を基準にして物語を理解するために、必然的に物語の流れの切断と、プロトコルの記号化・数量化を必要とする。川越ら（2001）が、「これまで、被験者の反応から認知された領域を推論するにあたって、標準化作業（normative study）のような、実証的研究はなされていない」と述べ、導入人物の認知や物語の筋・主題に関する実証的研究がなされていないことを問題点として挙げているように、彼らからすれば、標準化された分析・解釈法が未だに『確立されていない』ことが TAT の真実であり、その確立を目指す方向に向かって研究を行っている。一方、もう一つの立場は＜物語性・主観性＞を重視する。この立場は、個人の物語を唯一独自のものとして理解するために、記号化・数量化によって物語の流れを切ることをせず、語られた物語一つひとつをじっくりと読み味わう。そして、その場にいた検査者でしか感じ取ることのできない非言語的側面も含めて、検査者の主観性を中心に据えて分析・解釈を行う。彼らから見れば、TAT には分析・解釈法の標準化が『馴染まない』ことが真実であり、最初から標準化を目指す方向には向かっていない。では、どこに向かっているかと言うと、心理臨床場面で治療促進的に働く使い方が目標なのである。そもそも Murray,H.A. 自身が、高度に厳密化した条件のもとで客観的測定をすることでは人間の究極的な理解は得られないと考え、被検者自身が主観的に語ることを中心に吟味していくことが大切だと考えていた事実を照らせば、標準化された分析・解釈法が『馴染まない』のも当然と言える。むしろ、こうした解釈の柔軟性があるからこそ、臨床的に豊富な素材を提供してくれる可能性を持つのである。

本論文の文献展望から明らかになったように、TAT の基本的特徴は、＜テスト性・客観性＞＜物語性・主観性＞という二側面を併せ持っている検査であることが挙げられる。しかし、この点は代表的な論文や書籍を基にした藤本（2006）や栗村（2007）の指摘を、先行研究全体の動向において再確認したに過ぎない。筆者がそれ以上に強調したいのは、この二側面には一方が正しく他方が間違っているとか、一方が優れて他方が劣っているといった差異が存在せず、双方が表裏一体となって TAT を構成している点である。標準化された分析・解釈法が『確立されていない』とする声、『馴染まない』とする声は、一見すると相反するものに聞こえるし、そこには斥力が働いているように見える。しかし、そのどちらもが TAT の真実であり、双方がバランスを保って併存している点こそ TAT の重要な基本

的性格なのである。この点が十分に認識されていないからこそ、〈テスト性・客観性〉に身を置く者は〈物語性・主観性〉の側面を問題点として指摘するし、〈物語性・主観性〉に身を置く者は〈テスト性・客観性〉の側面が被検者のパーソナリティ理解を困難にしていると批判しがちになるのではないだろうか。これは筆者のみの意見ではなく、TAT 研究が始まった約 50 年前から同様の指摘がなされている（例えば、丸井、1960）。こういった状況を踏まえると、TAT の現場においては、これまでになかった新たな研究結果や知見を得ることよりも、過去に蓄積されてきた知見をもう一度振り返り、創始者の意図が記された書籍である『Explorations in personality』（Murray,H.A., 1938 ;『パーソナリティ I, II』外林大作（訳編）、1961, 1962）を読み返す作業の方が、長期的な視点で見れば大切であり、優先されるべきものである。

第 4 章 TAT 領域における物語論（研究 2 - 1）

前章では、時間性すなわち物語の流れに対する先行研究の動向を確認することができた。本章は、物語の流れを理解する前提として、〈物語性・主観性〉を重視する立場において物語という語がどのように受け止められ、使用されてきたのか整理を行う。そのためには、ナラティブの視点以外の研究と、ナラティブの視点による研究に二分して検討しなければならない。日本では心理臨床場面において物語という語が使われるとき、河合隼雄（1993 年『物語と人間の科学』、1994 年『昔話の深層』、2002 年『昔話と日本人の心』など）を代表とする臨床家の提唱した物語論が有力な学派としてあり、本論で検討するナラティブの視点と区別する必要がある。ナラティブという語は、通常は物語と訳されるので混同されやすいが、成立の場は社会学（特に社会構成主義の立場）であり、心理臨床場面では家族療法の分野に導入された経緯を持つ。すなわち、従来の物語論と、ナラティブの視点の違いを明確にしておかなければ、TAT の時間性を検討するにあたって、なぜナラティブの視点を用いるのか、その根拠と有用性を示すことができない。本章では、両者の立場で物語の理解がどのように異なるのか、従来の物語論と本論におけるナラティブの視点の違いを明確にした上で、TAT の物語について、ナラティブの視点から明確な定義を行いたい。

第 1 節 ナラティブの視点以外の研究

まずは、〈物語性・主観性〉を重視する先行研究のうち、ナラティブの視点以外の研究において、物語がどのように理解されてきたかを概観する。

1. 鈴木（1997, 2000, 2002a）の研究

鈴木（1997, 2000, 2002a）は、国内の TAT 研究における内容分析の第一人者である。彼は、心理検査を媒介とした診断の感覚を養うことが昨今の心理士の課題であり、TAT を使用する際には標準的な反応内容を熟知していなければならないと述べる。どちらかと言えば「テスト性・客観性」を重視する立場であるが、『TAT—絵解き試しの人間関係論』（鈴木, 2002a）の中では物語理解について詳しく述べている。鈴木（2002a）によると、TAT の「物語のなかの人物の内面、およびそれと結びついた関係様態のポテンシャルティ」には、語り手の「関係様態のポテンシャルティ」が投映される。すなわち、TAT の物語は「当人が現に生きている、あるいは生きる可能性がある物語を断片的に表して」おり、その断片から語り手の外界・他者への関わり方、ひいてはパーソナリティについて正確な見立てを行い、心理療法の場で「当人が生きるべき物語、生きるのがふさわしい物語」を探っていくことが TAT の治療的利用法なのである。

物語の定義に関して、彼はまず国語学者大野晋の定義を紹介している。大野（2001）によると、物語とはモノとカタリの複合語である。モノとは、「運命、動かしがたい事実、世間的制約、世間的に決まっていること」などであり、カタリには①「内密のこと、秘密を相手に打ち明ける」、②「相手の知らない状態、内情を報せる」、③「事柄の成り行きを、順を追って話す」、④「作為的な言葉を使う」という意味がある（④は、現代語の『騙る』と共通の要素を含む）。①～④のどの意味を用いるかによって、物語の意味は異なる。例えば④を用いると、「人の運命を虚構の言辞で書き上げた作品」という意味が生じ、竹取物語やシンデレラといった童話、寓話、おとぎ話がこれに属する。物語と言うと一般的にはこの意味が想起されやすいが、①～③は虚構ではなく事実（過去の事実や現実の事実、一般的な事実や道理などを含む）を示していることに注意したい。この定義から鈴木は、物語の意味がかなり広い範囲に及ぶことに言及しながら、物語の定義を「あったこと、あるいは現にあることを言葉で伝えること、あるいは伝えたもの」と要約している。また、河合（2001b）の物語論にも次のように触れている。鈴木（2002a）によると河合の論は、物語という言葉の意味より、その実際の機能に重点を置いている。すなわち、「過去と未来、男と女、親と子、生と死など、相互に無関係に見えるもの、あるいは相反的見えるもの同士をつなぐ機能」を有しており、この機能を備える言語行為は物語だけであると言う。鈴木という言葉で言い換えれば、「物語がつなぐ機能をもつというより、事実をつないで理解しようとする、人間の本来的傾向が物語を生む、あるいは、その傾向自体が『物語る』ことであ

る」。

このような物語理解を示しながらも、TAT の物語はそれらとは一線を画するというのが鈴木の見解である。なぜなら、TAT の物語は「世間によくある話」が多く、「時間的経過も劇的などころも含んでいない、物語と言えないようなものが少なくない」からである。こういった特徴を踏まえると、『物語』の代わりに、『生きざま』（生き方）と言っても、『人やものとのかかわり方』あるいは『関係様態』と言っても、その人が『住んでいる世界』と言っても、さらには『世界の理解（解釈）の仕方』と言ってもよい」と述べている。従って、鈴木（1997, 2000, 2002a）が重視しているのは、TAT の内容に語り手の「関係様態のポテンシャルティ」、すなわち「人やものとのかかわり方」が投映されるという臨床的事実であり、物語という言葉の定義やその形式、構造については「ある意味でのいい加減さ」（鈴木, 2002a）を持つことを勧めている。

2. 下山（1990）の研究

下山（1990）は、TAT の「検者－被検者関係の介在性」の問題を逆にとり、治療者－患者関係（治療的対象関係）に介入していく治療手段として、TAT を用いた絵物語法という独自の技法を提案している。施行法は、まず検査（テスト）ではないことを明示した上で、語りたい図版を被検者に一枚選択させ、絵の印象を尋ねた後に物語を作ってもらう。そして、物語を語る体験や物語の感想などを、フォーカシングをベースにしながらか検査者と味わっていくというものである。通常の施行法と大きく異なるために、TAT の分野で絵物語法が使用されることがほとんどないが、TAT の物語性について下山（1990）は興味深い考察を行っている。

彼は、物語が relate と訳される点に注目し、物語る行為には、文字通り「関係(=relation)」を繋いでいく (relate) 側面があるために、図版を媒介とした「物語る－聴く」関係には、語り手と聴き手の関係を新たに創造、展開させていく創造機能があると述べる。そして、対象関係論の立場から TAT を移行対象と捉え、内的現実と外的現実の中間領域である TAT の場において、絵物語法の施行によって二者関係を展開させていくことが治療促進的に機能すると指摘している。＜物語性・主観性＞を重視すると言っても、鈴木のように物語に投映される内容を重んじる立場もあれば、河合や下山のように治療的な機能面に注目する立場もある。さらに下山は、物語る行為とは「図版刺激によって生じた情緒的な感じを物語という筋をもった形に構成していく」、「絵という視覚刺激から時間構造を備えた物語を

構成していく」作業であるために、「時間概念や因果認識等の認知構成力が必要とされる」とも述べている。このことから、物語の機能面だけではなく、「筋」「時間構造」といった構造面にも注意を促している。

3. 藤本 (2006) の研究

藤本 (2006) は、本論文 5 頁で取り上げた雑誌『臨床心理学』の TAT の特集 (藤掛, 2003 ; 藤田, 2002 ; 井口, 2002 ; 鈴木, 2002b ; 鈴木, 2002c ; 鈴木, 2003a ; 鈴木, 2003b ; 豊田, 2002 ; 氏原, 2002 ; 氏原, 2003a ; 氏原, 2003b) をもとにして、文献研究を行っている。この中で藤本は、TAT の物語とは「検査者と被検者の関係性の中で紡がれる唯一独自のもの」であり、「物語になる以前のことは、被検者の表情、語り方など、物語が生成する状況」や「ことばやイメージの持つ多義性」をも含み込んでいること、図版にどの程度規定されているか、何人中何人が示す反応であるかといった<テスト性・客観性>の側面も物語理解には必要であるが、「それらのことを越える深さがある」ことを指摘している。深さとは、「語ることによって心が動き、心が動くことによって語られる TAT の物語には、被検者自身の在り方だけでなく、被検者本来のもっている関係の持ちよう、被検者の願う在り方が重ねられる」という、無意識まで射程に入れている投影法の特質を指している。そのため、分析・解釈にあたっては「その人にしかない深い物語として聴き、連想を働かせながら理解」する姿勢が不可欠なのである。また、そのような姿勢を要するもう一つの理由として、物語の流れを読まねばならない点を強調している。物語の流れについては、森岡 (2004) を引用して、「具体的な出来事、事象と事象の間をつなぎ筋道を立て」るものであると述べている (流れの具体例として藤本が挙げたのが、21 頁の図版 2 を例にした説明である)。

そして、表 2 (6 頁) のプロトコルに対して、上記のポイントを考慮した解釈の試論を行っている。形式分析、内容分析といったアセスメントとしての解釈だけでなく、物語の流れを読もうとする解釈を実際に試みているのはこの論文だけであるため、その内容についても紹介する。藤本は、心理療法において Cl の語りに耳を傾ける時と同じスタンスを取ってプロトコルを読み、「上手にひけるかな」「不安」という言葉がどういう意味なのかを考え、それがどのような流れで語られるかを最も大切な糸口としている。そして、「上手に」を繰り返していることから「自分をよくみせたい思い」の強さを、不安がコンクールを前に喚起されていることから「人に評価されることの不安、また評価されることに怯えねば

ならない『自分』が感じられることの不安」を、それぞれ読み取っている。結末については「成功すると思う」と語られているが、「成功に至るプロセスについては一切省略され、観念的なレベルにとどまっていることから、成功したいという思いの強さや、…大きな不安を一気に解決に導きたいという思い」が窺える。と同時に、「プロセスはよくわからなくとも、最終的には成功すると一言語れるところに、大きな不安はあっても自分はやれるであろう、という自分に対する信頼を推測することも可能」であると述べている。最終的に、被検者のパーソナリティについては、「人に見られること、評価されることについて非常に不安で、人によくみられたいと願っている…不安の対処の仕方は、一気に解決を試みるというところがうかがわれたが、そこには不安ながらもやっつけていける一面もある」という解釈を行っている。この解釈について、物語の流れという観点から言い換えるならば、現在の状況から未来の結末に至るプロセスが省略され、物語が一足飛びに展開しているという流れを読み取っていると言えよう。

4. ナラティブの視点以外の研究が指摘する物語性

<物語性・主観性>を重視する先行研究のうち、ナラティブの視点以外の研究においては、河合隼雄の物語論や投映法理論、精神分析理論をベースにして物語が理解されてきた。その理解とは、<テスト性・客観性>の立場が切断してきた物語の流れ、検査者との関係性、非言語的側面のうち、主に後ろの2つを活かそうとするものであった。具体的には、検査者の主観性を活かして、投映法ならではの物語の深みを読み取ること、物語の関係促進的な機能によって Cl-Th.関係の展開を目指すことを意味している。しかし、物語の流れとは何かという点は、藤本の試論においてもまだ明確化されていない。藤本が、ナラティブ研究者である森岡（2004）の言葉を引用していることから見ても、物語の流れについて理解するには、ナラティブの視点が有効なようである。そこで次節では、<物語性・主観性>を重視する先行研究のうち、ナラティブの視点による研究では物語がどのように理解されてきたかを概観する。

第2節 ナラティブの視点による研究

1. 大山（2004）の物語論

大山（2004）は、正規の施行法である20枚の図版を実施したとき、その20個の物語の中に「特定の物語の筋書き（プロット）が反復して出てくる」臨床的事実があると述べる。

プロット (plot ; 筋) とはナラティブ概念の用語で、ストーリー (story ; 話) と区別して用いられる。ストーリーが「出来事を時間軸に従い、どちらかといえば客観的に記述していくもの」であるのに対し、プロットは「その語り手の視点から出来事の中に意味的な関連づけが行なわれ提示されるもの」である。ストーリーのように必ずしも時間軸に従うわけではなく、「どのような順序でどのような意味連関で語られるかに、語り手が構成している意味世界が反映」されている。TAT を 20 枚実施すると、各図版の特徴や系列性に影響を受けながらも、そこには語り手独自のプロットが繰り返されるという事実を大山は指摘している。そして、これこそが、ナラティブの視点が明らかにする語り手のパーソナリティ特性なのである。TAT は、物語の内容に被検者の在り方が投射されると考えられているが、第 1 部の TAT の問題点で述べたように、物語のどの部分に、何がどのように投射されるかは一義的ではない。そのような TAT において、ナラティブの視点は以下の解釈可能性を提供する。物語はストーリーだけでなくプロットによっても作られるものであり、TAT を 20 枚施行した時、語り手は自分の癖とも言うべき固有のプロット (端的に表現すれば、外界の意味づけ方) を無意識のうちに繰り返し物語ってしまう。「人生の決定的な場面においてその被検者が図らずも自ら毎回選びとり、自らが構成してしまうパターンが、この (TAT の) 物語構成にも表われている」のである。従って、TAT の物語から遡ることで、語り手独自のプロットというパーソナリティ特徴を明らかにすることが可能となる。

さらに大山は、ナラティブ概念の一つであるナラティブ・トーン (語り口) にも注目している。「被検者の語りは、物語の筋書きのみによって構成されるのではない。文章には文体が必要であるように、語りにおいて選択されるトーン (音調) は、語り手が事象をどのように関係づけ意味づけていくかに影響を与えている」。ナラティブ・トーンは、「同じ体験であっても、個人個人によってどのように意味づけていくかの方向性を示して」おり、「どのようなトーンが支配的か、どのようなテーマが出てくるときに、そのようなトーンになるか」という分析視点を持つことが、被検者を理解するときの助けになると述べている。

2. 海本 (2005) の研究

海本 (2005) は、大山が述べたプロットの繰り返しの事象に注目し、この事象を実証する研究を行っている。具体的には、TAT の物語に語り手独自のプロットが繰り返されるのであれば、物語修正という課題においても同様のプロットが保持されるとの仮説を立て、TAT の物語を修正させる方法を取ることで、この事象を検討している。対象とした大学生

及び社会人 108 名に対して、TAT の記述課題を集団で実施した。Harvard 版の図版 4 枚 (3BM, 10, 17GF, 20 ; 補助資料参照) のうち、2 枚は「図版を見て思い浮かぶ物語を作って下に記入してください。この絵の人は、今、何を感じ、どうしているのか、この絵の前にはどんなことがあって、この絵の後にはどうなって行くのか、お話の筋をつけて話してください」という教示のもと自由に物語を記述させた (これを自分物語と命名)。残りの 2 枚は、「ある人が図版を見て物語を作りました。以下がその物語です。よく読んでください」という教示のもとにサンプル物語を用意して読ませた (これを他者物語と命名)。次に、修正段階として、4 枚の図版すべてに「物語について修正をしたい部分はありませんか。もしあるのなら、修正を加えてください」と教示し、修正の機会を与えた。分析方法としては、修正の形式を「全体修正」(物語の全体を書き変えた場合)、「部分修正」(部分的な書き換えや削除を行った場合)、「続き」(物語の結末を書き換えたり、書き加えた場合)、「修正なし」(全く修正しなかった場合) の 4 つに分け、自分物語と他者物語の修正形式を比較検討した。その結果、自分物語は他者物語に比べ、物語の結末に修正を行わない傾向と物語に全く修正を行わない傾向が強かった。この結果について海本は、「自分物語は、他者物語と比べて、そのままであって良いという肯定の意志の起こるもの、もしくは、ひっきりなく流れていくものであり、その終わり方に納得しやすい」と考察し、物語修正の機会が与えられながらも、被検者は自らの物語を繰り返すことを選んだとしている。そして、プロットの繰り返しの事象が起こるといふ仮説を支持するものとし、ナラティブの視点による解釈可能性を肯定している。

海本の研究は、語り手が日常場面で語る物語のプロットと、TAT のプロットとの対応を検討したものではない。さらに、記述式かつ集団実施という点で、通常の TAT の物語とは質が異なっている。これらの点を考慮した上ではあるが、複数の物語に特定のプロットが反復して出てくることを実証した点は意義深い。海本は、大山の物語論を支持する形で「TAT において、主題やプロットが繰り返される現象は、創り手の中にある主題やプロットが、行為として TAT に表されていると考えることができる」と述べている。なお、海本 (2005) は、物語のテーマ (theme ; 主題) は「包括的かつ焦点を絞る方向にあるもの」であるのに対し、プロットは「時間的、空間的な広がりを持ち、物語のつながりや流れに視点が置かれたもの」と定義している。本論文の目的である時間性の観点から見ると、プロットが鍵概念であることを示唆している。

3. 草島 (2005) の研究

草島 (2005) は、物語を「二つ以上の出来事 (events) をむすびつけて筋立てる行為 (emplotting)」とするやまだ (2000) の定義を採用し、物語の「つなぐ」機能に焦点を当てている。我々は、誰もが自分について物語ることを通して、過去の経験や出来事を有機的に再配置し、まとめ上げ、過去を再構成しながら生きている。つまり物語は、その「つなぐ」機能によって語り手の過去・現在・未来を有機的に結びつけ、アイデンティティの連続性と斉一性の感覚を明確にする役割を果たしているのである。

ところで Murray, H.A. (1938) は、TAT 実施後、物語がいかなる部分から想起されたのかを確かめるために被検者に面接を行い、「本や映画」「友達や家族が関与した現実の出来事」「その人自身の主観的客観的な人生の経験」「その人の意識的無意識的空想」の 4 つが根拠となっていることを記述している。この部分から、被検者は TAT を物語る際に「自身の記憶や経験の連想を自然に想起している」(草島, 2005) ことが読み取れる。TAT の物語を作ることで、自身の記憶や経験を想起する準備状態が整う上に、教示の過去・現在・未来という時間軸が、語り手の過去・現在・未来という時制を有機的に結びつける役割を果たす、というのが草島の主張である。

そして、過去を再構成してアイデンティティの明確化と変容を促すための治療技法として TAT が使用できると考え、女子大生 A 子に図版 12 枚 (1, 2, 3BM, 4, 5, 6BM, 10, 11, 14, 17GF, 20, 12BG; 補助資料参照) を実施した事例を一例として挙げている。まず、鈴木 (1997) を参考に「あなたはあたかもその絵のなかの主人公になった感じで、私小説的にお話を作ってください」という部分を追加した教示を行い、12 枚を通常の手続きで施行した。次に、A 子が図版を一望できるよう机の上に並べ、TAT をきっかけにして①自由に連想されたもの、②懐かしい思い出や出来事、③自分自身にとって大事・大切なものについて、の 3 点を自由に語ってもらう面接を行った。その結果、A 子が、TAT の物語から自然に自分自身の経験を想起し、自己の語り直しを行ったことを考察し、TAT の治療的有効性として「通常の語りの場合と比べて TAT を用いる場合は、語り手の記憶、経験の範囲が時間的にも空間的にもより広く、それぞれ個々にバラバラに散らばっている物事を引き出して、その後、一定の方向に纏め上げるという過程が促進される」と述べている。そして TAT の治療技法としての役割を、「その人が自己を物語る上で『重要』かつ『多様な経験・出来事・エピソードを想起させ、過去の再構成を促進させる』としている。

4. ナラティブの視点による研究が指摘する物語性

<物語性・主観性>を重視する先行研究のうち、ナラティブの視点による研究は物語の構造面への理解を促す。そして、物語の流れはストーリーとプロットに分けられること、パーソナリティのどの側面が明らかになるかについては、TATで繰り返されるプロットを分析することで、語り手のプロット、すなわち外界の意味づけ方が明らかになることを指摘する。また、物語の機能面については、ナラティブの視点以外の研究がCl.-Th.関係の展開を挙げているのに対し、この立場はCl.の自分自身についての語りを促進させ、過去の再構成によって新たな自己理解を得やすくすることを挙げている。これらは示唆に富んだ考察であるものの、大山や海本の研究ではプロットと時間性の関連については具体的に述べられておらず、草島の研究では教示の『これまで・今・これから』を過去・現在・未来と表現していることから見ても、時間性について更なる検討を行わなければ、TATの基本的性格を明らかにすることはできない。そのための第一歩として、TATの物語とは何を意味するのか、物語の定義を次節で行うこととする。

5. Murray,H.A.との理論的親和性

ここで、ナラティブの視点はMurray,H.A.の意図に立ち返らせるだけでなく、彼の人格学ときわめて近い考え方であることに言及しておく。そうしなければ、TATの王道は投映仮説に基づく形式分析・内容分析による解釈のみであり、ナラティブの視点は王道からかけ離れた、言わば外れ値的な存在として認識されかねないからである。

大山(2004)は、ナラティブ研究の背景にある構成主義が、系譜的にはMurray,H.A.の人格学と同じ生態学的心理学に遡れることを前提とした上で、プロットという概念が、Murray,H.A.の人格学ときわめて近い考え方であることを指摘している。そもそも、Murray,H.A.(1938)の人格学は欲求-圧力理論(need-press theory)という独自の理論に基づいている。これは、「個人の時間的に長い活動の系列の中から一部分である生活体に生じたエピソード(出来事)を取り上げることによって、その個人の人格を研究することができる」(山本,1992)という仮説を背景としている。そして、エピソードには個人の内部にある欲求(need)と、その個体に外部環境から作用してくる圧力(press)の力学的構造であるテーマが表現されており、このテーマを分析することによって個人の人格を把握することができるとする理論である。TATは、欲求-圧力理論に基づいて、個人の重要なエピソードを引き出す一つの道具として考案された。すなわち、Murray,H.A.にとっての物

語とは、テーマを持った出来事を意味するのである。図版 1 枚ではなく 20 枚の施行が課せられているのも、被検者独自のテーマがより明確な形で表れることを意図したものである。『物語のプロットには、語り手が構成する意味連関（外界や体験した出来事をどのように意味づけるかということのパターン）が反映されている』とするナラティブの視点と、『物語のテーマには、被検者自身と外界との力動的な構造（外界からどのような影響を受けたり、自身が外界にどのように働きかけたりして生きてきたか、また生きているか）が投影されている』とする Murray,H.A.の人格学に理論的親和性が見られることは注目すべきである。プロットとテーマ、意味連関と力学的構造の違いを含めた詳細な検討は第 6 部の総合的考察で行うが、ひとまず现阶段では、ナラティブの視点が TAT 理解の王道の一つである可能性を挙げておく。

第 3 節 ナラティブの視点による物語の定義

本節では、ナラティブ研究における物語の定義をもとに、本論文における TAT の物語の定義を明確にする。

ナラティブ (narrative) は、通常『物語』と訳される。ナラティブには、国語学者大野 (2001) の定義で紹介した「人の運命を虚構の言辞で書き上げた作品」としての童話、寓話、おとぎ話を始めとして、小説、コミック、テレビドラマ、映画のストーリーなど形式的に様々なものがあるが、心理臨床場面で扱われるナラティブの典型は、CI が自分自身について語る物語、すなわちセルフ・ナラティブ (self-narrative ; 自己物語) である。草島 (2005) が指摘するように、我々は、誰もが自分について物語ることを通して、過去の経験や出来事を有機的に再配置し、まとめ上げ、過去を再構成しながら生きている。それによって自分の人生やアイデンティティを再確認したり、或いは人生の新たな意味や新しいアイデンティティを発見したりして、これから先の人生を生き抜く力を得ていく。ナラティブの視点から見ると、心理臨床の場合は、CI のそのような語り直しの過程を共に歩み、支える場であると言える。心理臨床研究である本論文は、TAT の物語を定義するにあたって、ナラティブ研究の中でもセルフ・ナラティブの定義を基盤に据えることとする。

ナラティブの視点は、被検者の発話内容を文字情報に変換した TAT のプロトコルを、一つの物語として捉える。これは TAT の基本でありながら、実は我々検査者が忘れがちな認識である。アセスメントのために分析方法に頭を悩ませ、プロトコルから何とかパーソナリティ解釈を導き出そうと奮闘する現場において、プロトコルを一つの物語をして捉える

視点は、検査者の心に一時の間（ま）を生み出す。分析や解釈を一旦横に置き、まずは物語をじっくりと読み味わおうとする心の構えを生じさせるのである。さらに、浅野（2001）のセルフ・ナラティブの定義を基にすると、プロトコルは（1）視点の二重性、（2）出来事の時間的構造化、（3）他者への志向という3つの特徴を有する語りとして理解することができる。浅野（2001）を引用しながら、以下にその特徴をまとめる。

1. 視点の二重性

セルフ・ナラティブの第一の特徴は、それが「視点を二重化させるような語り」（浅野，2001）だということである。二重化とは、語る主体と語られる主体という二つの視点を意味する。人が自分について語る際には、語り手（語る主体としての自分）の視点と、実際にその出来事を体験している物語内部（語られた主体としての自分）の視点が生まれるが、両者は原理的に異なっている。例えば心理療法の中で、Cl. が3日前に自動車事故を起こしそうな体験を語ったとしよう。この時、語る主体であるCl.は、静かな面接室で、Th. に向けて3日前の緊迫した場面について語っている。と同時に、その語りに登場するCl.（これが語られる主体である）は、緊迫する場面の真っ只中にいて、事故を避けるのに必死になっている。このように、「一方には、語り手が聴き手に向けて語りかけている世界があり、他方にはそこで語られた登場人物が活躍する世界がある。物語を語るということは、この二つの世界を連関させることを意味するのである」（浅野，2001）。『私が私について語る』時、前者の『私』と後者の『私』は同じ視点ではないことがセルフ・ナラティブの特徴と言える。

TATの物語も、これと同じ構造を有している。ただしTATの場合は、自分について語るのではなく、図版の主人公について語る。そのため物語の視点は、語り手である被検者の視点と、図版の主人公の視点に二重化される。この主人公の視点こそがTATの面白い部分である。TATは、『私が私について語る』わけではない。自分の物語ではなく、他人（図版の主人公）の物語、空想の物語を作るという規定は、被検者の心理的負担を和らげたり、自分のことを語りたくない、あるいは語る準備が整っていない被検者でも安心して行えるという効果を持つ。一方で、赤の他人の物語を語っているわけでもない。主人公の視点には、必ず被検者の視点が反映される。「自分についての物語ではない、でも他ならぬ自分の物語だ、というこの両者の間での微妙なバランスを物語が持っていることがTATの醍醐味」（海本，2005）であり、だからこそ物語から被検者のパーソナリティ理解が可能となるの

である。

2. 出来事の時間的構造化

セルフ・ナラティブの第二の特徴は、それが「諸々の出来事を時間軸に沿って構造化する語り」（浅野，2001）だということである。構造化とは、無数の出来事の中から意味のあるものだけを選びだして相互に関連づける作業を意味する。すなわち、語り手の視点から行為や体験を取捨選択し、且つそれらを一定の基準に沿って配列していく「選択と配列」の作業なのである。これにより、物語に意味と方向性を持った流れが生まれる。ここで重要なのは、選択と配列の際には何らかの基準があるということである。先ほどの自動車事故の話为例にすると、事故を起こしそうになった体験と一口に言っても、自動車に乗る前はどうしていたのか、自動車でどこに向かおうとしていたのか、そのとき何を考えていたのか、その日の天気はどうだったか、それは何時頃のことだったか、相手はどんな人だったのか、なぜ事故に至らなかったのか、その後どうしたのか等、体験を語る際の要素は多数あるし、話をどう切り出して、どこから始め、どのような順序で語るかも選択肢は一つではない。そのような中で CI が語るができるのは、何らかの基準が特定の要素を選択させ、語る順序を方向づけているからである。浅野（2001）は、セルフ・ナラティブにおける選択と配列の基準は、物語の結末であり、結末が納得のいくものになるかどうかに沿って語りは構造化されると述べる。例えば、『自分の冷静な判断によって事故を回避できた』という結末と、『自動車事故がいかに恐ろしいものか身にしみて分かった』という結末、『責任は 100% 相手にあるのに、なぜ自分はこうも不運な目にばかり遭うのか』という結末では、選択される要素や語られる順序は自ずと変わってくる。さらに物語の結末は、語る主体としての自分と密接に関連していることを浅野（2001）は指摘する。セルフ・ナラティブの場合、結末は必ず今・この自分（語る主体としての自分）に説得的なやり方で到来しなければならない。自分は他の人よりも幸せで恵まれていると感じている CI が、先の 3 つ目の結末を基準にするはずがないように。セルフ・ナラティブは必ず結末から逆算された（振り返った）形で選択・配列されるし、結末は今・この自分をどのようなものと考えるかに影響される。いかに冷静かつ客観的に自分について語る CI であっても、物語は単なる事実の羅列ではあり得ないし、そこには必ず語り手の主観性が介在している。だからこそ、セルフ・ナラティブから CI の理解に繋がるのである。

TAT の物語もまた、図版から連想される諸々の出来事を一定の基準に沿って構造化する

語りであり、選択と配列の作業が行われている。ただし、セルフ・ナラティブと違うのは、一定の基準が必ずしも物語の結末を意味しないところである。この点は、時間性的問題と関わって重要であるため、次章において詳しく考察する。

3. 他者への志向

セルフ・ナラティブの第三の特徴は、それが「本質的に他者に向けられた語り」（浅野，2001）だということである。先ほど、セルフ・ナラティブはその結末を納得のいくものにする方向で構造化されると述べたが、納得がいくかどうかを判断するためには、語り手だけでなく聴き手も必要となる。なぜなら、自分について語る行為は、その構造化によって結末を正当化させ、それを自分だけでなく他者にも納得させることによって、語られる主体である過去の自分、ひいては語る主体である今・この自分を、他者との間で共有された現実として確定させる作業だからである。それは、自分が正当化され、伝達され、共有されていく過程とも言える。

TAT の物語も同じで、「語り手が、聴き手に向けて語ることが、表現の仕方やプロットに影響を与え、語りの生成に制約を加えている」（大山，2004）。TAT では、被検者が予め頭の中で考えた物語を一気に語るのではない。浮かんできたイメージを検査者に語り始めることで物語は生まれていき、語っている最中にもイメージは刻一刻と変化し、物語は新たな展開を続けていくのである。最初に語ろうと思っていた話と出来上がった話が違って驚いた、話しているうちに思ってもみない展開になってしまった等の感想が、TAT 場面でよく聞かれるのもそのためである。本質的に他者の存在を前提とし、他者に向けられて語られるという特徴は、物語の生成性をも指摘している。

本論文では、TAT の物語を、上記3つの特徴を有する語りと定義して論を進める。視点の二重性及び出来事の時間的構造化は物語の構造面、他者への志向は物語の機能面に関する特徴であると言える。

第5章 ナラティブ領域における時間論（研究2-2）

第1節 ナラティブの視点から見た物語の時間

ナラティブの視点による物語の定義は、出来事の時間的構造化、すなわち時間の要素が物語に必須であることを指し示す。そこで本章では、物語性の中で時間の要素に焦点を当てて検討を行う。ナラティブの視点から見ると、教示の『これまで・今・これから』は何を意味するのか、分析・解釈法の標準化を妨げることとなった物語的な時間とは何なのか、他の時間概念（物理的な時間、心理的な時間）も含めて TAT はどのような時間性を有しているのか、といった時間性に関する理論的検討を行うと共に、TAT 領域で多用されている過去・現在・未来、時間、時間軸、時間的な流れといった時間に関する用語の整理を目指す。

ナラティブの視点から見た TAT の物語的な時間とは、出来事の時間的構造化、すなわち被検者の視点から語るべき出来事を取捨選択し、かつそれらを一定の基準に沿って選択、配列する作業を指す。例えば、図版1（図1）において以下の3つの語り語が語られたとする。



図1 図版1の略画

- (a) 少年。バイオリン。
- (b) 少年がバイオリンを前にして悩んでいます。
- (c) 少年がバイオリンを前にして悩んでいます。なぜなら、お父さんに買ってもらった大切なバイオリンを、うっかり落として壊してしまったからです。そのことを

お父さんに打ち明けるかしばらく悩みましたが、結局は思いきって打ち明け、許してもらうことができました。

(a) は、図版に描かれている刺激を答えただけで、『少年』と『バイオリン』の間には何の関係づけもなされていない。(b) は、『少年』と『バイオリン』が関係づけられているものの、主人公である少年の現在の状況を述べただけで、まだ物語に時間的な流れや意味は生じていない。読み手からすれば、「それで？」と続きを促したいところだろう。それに対して (c) はどうだろうか。これは、主人公の現在の状況だけでなく、過去（お父さんにバイオリンを買ってもらったこと、そのバイオリンをうっかり落として壊してしまったこと）や未来（しばらく悩んで過ごすこと、その後お父さんに正直に打ち明けること、そして許してもらうこと）の出来事も描かれている。出来事が複数作られ、それらが相互に関係づけられ、前後の方向性を持った時間的な流れと意味が生まれている。(c) のような語り方が、出来事の時間的構造化という特徴を有する物語であり、TAT ではこの物語が要請される。

ここで注目すべきは、浅野（2001）が「諸々の出来事を時間軸に沿って構造化する語り」（傍点は筆者による）と説明したり、野口（2009）がナラティブの最小限の定義を「複数の出来事が時間軸上に並べられている」（傍点は筆者による）ことだとしているように、構造化にあたって『時間軸』という基準が重視されている点である。時間軸と言うと、我々は時計やカレンダーに示されるような、過去・現在・未来という直線的な軸を真っ先に思い浮かべる。また TAT においても、『これまで・今・これから』という直線的な軸が教示に示されている。しかし、セルフ・ナラティブにおいても、TAT においても、構造化の際に重視される時間軸は、直線的な軸のみを指すわけではない。浅野（2001）や野口（2009）が述べる『時間軸』とは、選択された出来事を配列する際の基準の一つを示しているに過ぎないことに注意したい。物語は、多数の出来事を一定の基準に沿って選択・配列しなければならないわけであるが、それは必ずしも過去・現在・未来という直線的な時間軸を基準にする必要はない。選択・配列作業を可能にするべく、出来事を『前』と『後』に分けて順序づけることができれば、他の基準でも構わないのである。もちろん、そのような基準が無数にあるわけではない。主には二つが挙げられる。一つは、時間軸という語で示される、過去・現在・未来という直線的な軸である。浅野（2001）、野口（2009）の指摘や、大山（2004）が「出来事を時間軸に従い、どちらかと言えば客観的に記述していくもの」

と述べた基準はこちらを指し、この基準でつくられた物語はストーリーと呼ばれる。それに対してもう一つは、「語り手の視点から出来事の中に意味的な関連付けが行われ提示される」(大山, 2004) プロットという基準である。この基準に沿った物語の場合、出来事がどのような配列順序で、どのような意味連関で語られるかに、語り手が構成する意味世界が反映される。同じ場所で同じ体験をしたとしても、語り手が異なれば、必然的に出来事の配列順序も異なり、そこには別々の意味が生み出される。38頁の自動車事故の例えにおいて、結末が違えば自ずと出来事を選択・配列も変わると述べたことも同じ意味である。

ここで、ストーリーとプロットという二つの基準の違いをより明確にするために、具体例を挙げる。小学生の男の子が、学校から帰宅して自分の部屋に向かう途中、誤って廊下の花瓶を落として割ってしまった。大きな物音に気づいた母親は、台所から駆けつけてくる。男の子は、母親に怒られると思って体をこわばらせていた。が、母親は真っ先に我が子に怪我がなかったかを心配した。母の態度に男の子は、怒られずにすんだ安心だけでなく、母の愛を感じて深く感動した。そして、その夜帰宅した父親に次のように語った。

(d) 「お父さん。今日ね、家に帰った時に花瓶を落として割っちゃったの。お母さんに怒られると思って怖かったけど、お母さんは僕のことを心配してくれてね。それでとっても嬉しかったし、ホッとしたんだよ。」

(e) 「お父さん。今日ね、とっても嬉しかったし、ホッとしたんだよ。」<どうして?> 「お母さんが僕のことを心配してくれてね。」<何があったの?> 「家に帰った時に花瓶を落として割っちゃったの。」

(d) は、出来事が時間経過に沿って語られており、過去→現在という直線的な軸に従って出来事が配列されている、ストーリーとしてのセルフ・ナラティブである。一方(e) は、時間経過に沿うならば現在→過去に遡っているわけだが、男の子が父親に最も伝えたかった『安心と深い感動』という要素から順に語られている。これは、花瓶を割った一連の体験の中で、男の子が最も強い意味を見出した部分が『安心と深い感動』であったという、彼の構成する意味世界が反映された配列であり、プロットが表れているセルフ・ナラティブである。もちろん、この意味世界が(d)の配列に反映される場合もある。その場合は、一見直線的な軸に沿ってはいるが、実は語り手の意味世界の反映であると見なして、プロットが表れていると捉える。ただし、それを判断するためには、語り手の表情や抑揚など

を読み取らねばならない。物語の流れを読む際に非言語的側面や検査者の主観性が必要となるのは、このためでもある。

以上を要約すると、(1) ナラティブの視点から見た TAT の物語的な時間とは、出来事の時間的構造化である、(2) 構造化の際の基準には、過去・現在・未来という直線的な軸と、語り手の構成する意味世界が反映された基準とがある、(3) ナラティブの視点はどちらかと言えば後者の基準を重視し、物語のプロットから語り手の意味世界を読み解こうとする、と結論づけることができる。さらに、これらの結論からは、〈物語性・主観性〉を重視する立場が指摘する物語の流れとは、そこに意味が生じている (=語り手の意味世界が反映されている) か否かが重要なのであり、記号化・数量化によって物語を切断してしまうと意味が読み取れなくなることを主張したものと考えることができる。

TAT の物語的な時間については、もう一つ検討しておかねばならない点がある。それは、教示の『これまで・今・これから』という直線的な軸が、セルフ・ナラティブにおける過去・現在・未来という直線的な軸と同義であるかという点である。これについては、発達心理学者の守屋 (1994) による絵本を題材とした指摘が参考になる。守屋 (1994) は、絵本の一場面を見て一つの物語をつくる際には、目の前にある「ものごとの結果 (現在)」から逆に「目の前にない原因 (過去)」を推測したり、「目の前にあるものごと」がある経過ののちに到達する「結果 (未来)」を予想したりする因果関係による構造が中心になると述べている (守屋, 1994)。守屋の言葉のうち、括弧外と括弧内の語の対応が興味深い。これは、セルフ・ナラティブにおいて直線的な軸は過去・現在・未来を指すが、絵を刺激として物語をつくる際にはそれが原因・結果に置き換わることを意味している。当然と言えば当然であるが、語られる主体が自分ではなく架空の登場人物の場合、そこには過去・現在・未来という時間軸は存在し得ない。過去・現在・未来とは、今・この自分がこれまでを振り返ったり、これからを展望したりする心理的な時間であり、その主体は生きた人物でなければ成立しないからである。そしてこれこそが、TAT の教示を誤解しやすい原因であると筆者は考えている。教示の『これまで・今・これから』は、本来は原因・結果という直線的な軸を指しているにも関わらず、我々検査者にとって想起しやすい直線的な軸が過去・現在・未来であるために、教示もまたこの意味であると誤解し、そこに疑問を感じさせないのである。従って、教示の本来の意味に基づくならば、「情報分析枠」(藤田, 2002) の「時間的流れ」の項目では、過去・現在・未来が語られているかをチェックするのではなく、図版の状況・その状況に至った原因・その状況の後に到達する結果をチェックする

と表記した方が正確であろう（もっとも、被検者の時間的展望が投映されると見なす限りは藤田の表記も正確である）。また、教示の過去・現在・未来という時間軸が、語り手の過去・現在・未来という時制を有機的に結びつける役割を果たすという草島（2005）の考察については、次のように補足することができる。いかに因果律が中心になると言えど、図版の主人公の視点は被検者の視点の一部であるために、教示の原因・結果という軸には自身の過去・現在・未来という軸が入り込まざるを得ない。それはTATの物語が、直線的な軸が過去・現在・未来を意味するセルフ・ナラティブと、原因・結果を意味する（昔話のような）架空の物語の、中間を行き来する物語であることを意味する。被検者は、選択・配列の際に間接的に過去・現在・未来という軸をも基準にしてしまうために、TATをきっかけに自分のストーリーが語りやすくなるのである。

以上から、TATの物語における直線的な軸とは、因果関係に基づく論理的な基準であること、教示の『これまで・今・これから』のこの意味を指していることが示された。過去・現在・未来という軸との違いを明確にするために、論理的に構造化された物語例を表3に示す。図版1で下線を引いている『今』とは図版の状況であり、『なぜ落ち込んだかというと』は、その状況に至った原因を語っている。『おそらくこの次は』は、図版の主人公の未来であると受け取られる部分であるが、本来的には図版の状況の後に至る結果を語っている。図版4では、『今→ところが→ただ→今→結局』という順序で出来事が配列されている。これは、起承転結の配列であり、過去・現在・未来という軸とは異なっている様を見てとることができる。

表3 原因・結果という直線的な軸を基準に構造化された物語例	
図版	TATプロトコル
1	…（10”）全この少年は、後悔というか落ち込んでいる状況です。 <u>なぜ落ち込んだか</u> というと、その前に何かピアノ、ピアノじゃない、バイオリンの発表会があって、バイオリンの発表会でうまく発表できなくて、もうちょっと練習したら良かったなと落ち込んでいる状況です。 <u>おそらくこの次は</u> 、もうちょっと練習して上手くなるように、おじいちゃんとか家族とかに褒められたいなっていう気持ちで練習をしたいと思います。（1’ 08”）
4	……（22”）これは、この男の人が浮気をして、これが愛人っていう設定。全ドアを開けて、子どもが入ってきました。そして、「何やってんだお父さん！」っていうことで息子が問い詰めまして、お父さんはかなりうろたえています。 <u>ところが</u> この愛人の方は「行かないで」っていうことで、「私の方が大事なんじゃないの？」っていうことで、引き止めようとしています。 <u>ただ</u> 、お父さんの威厳というのがあるので、子どもにはうろたえた姿も見せられないし、かなり焦ってるんですけど、頑張って <u>全</u> 考えています。この女の人は、「あなたが行くなら私はもう自殺してしまう」という脅しをかけているのですが、どうしても子どもの方に気持ちがとられて、今までしたことの後悔をちょっとしているようです。 <u>結局</u> この男の人は、この女の人を置いて出て行ってしまいます。（2’ 06”）
	* 出来事と出来事の連結部分に下線を引いている。

39 頁において、セルフ・ナラティブの場合は、物語の結末が納得のいくものになるかどうかに沿って構造化されるが、TAT は必ずしもこの限りではないと述べた理由もここにある。TAT の場合は、因果関係に基づく論理的構造化が最初から要求されているので（1 枚目の図版でこういった物語が語られなかった場合、再度教示を繰り返す時もあるほどである）、物語に納得がいくかどうかは、結末が今・この自分に説得的なやり方で到来するかどうかではなく、因果関係を含んだ構造になっているかに左右される。被検者が「まとまりのない話ですみません」「うまく作れないですよ」といった感想を口にするのも、検査者と納得感を共有するにはこの要素が必要であることを理解しているからである。ここに、TAT の物語ならではの制約がある。完全に架空の話を作っているつもりで淡々と因果関係のみを語る者はもちろんのこと、自らの構成する意味世界が反映されたプロットを語る者であっても、必ずこの制約を受ける。そのため、分析・解釈にあたっては、そつなく因果関係が語られている物語を前にしても、それを手がかりに被検者の内界にまで接近し、なぜ敢えてこれらの要素が選択され、この配列で語られたのか、被検者の構成する意味世界は何かを読み取っていかねばならない。この難しい作業には、非言語的側面や検査者の主観性が不可欠となるのは必然であろう。

第 2 節 時間性に関する認識論

前節では、教示の『これまで・今・これから』は何を意味するのか、＜物語性・主観性＞の立場が強調する物語の流れとは何かといった、プロトコルに表される時間の問題について考察を行った。しかしながら、TAT の時間性はそれだけではない。実施日時や全体反応時間、初発反応時間といった物理的な時間や、被検者の時間的展望の投射として語られる心理的な時間も含まれる。そこで本節では、これらの時間概念も含めて、ナラティブの視点から TAT の時間性に関する全体的な整理を行う。

ナラティブ研究領域で、時間の問題を論じている第一人者として野村（2010；2012）が挙げられる。野村（2010；2012）によると、ナラティブの視点は、物語や物語の流れをどう理解するかだけでなく、我々の生きるこの世界をどのように捉えるかという認識にも影響を与える。ナラティブの視点から見ると、現実とは次のような認識になる。（1）「人生であれ、現実であれ、病理であれ、それらはすべて言葉でできあがった構成物」（野村，2012）である。つまり、言葉が現実を構成している。（2）「そのように言葉でできた構成物は言葉をとおして書き換えられ、会話を通して新しい現実となる」（野村，2012）。つまり、言

葉で構成されたものなら、言葉による書き換えが可能である。(3)「ナラティブは語りだけじゃない。しぐさ、表情、聴き手が返す言葉や反応で揺らぎ、行き先を変え、書き換えられる。そんな“動き”のこと」(野村, 2012)である。つまり、言葉は語り手と聴き手の双方向性によって構成されるのであり、現実もまた同じである(自分と離れたところに『現実』が鎮座しているのではなく、自分と相手との間で語られる現実が『現実』となる)。この認識論をベースにすると、時間の問題は、実在の問題から語りの問題に移行する。例えば TAT の現場で、5 月 23 日の 11 時から検査を行った、当日被検者が 10 分遅れて到着した、全体反応時間は 47 分で、図版 1 の初発反応時間は 19 秒だった、というように時間について語ったり記述したりする時、それは実在する時間を扱っていると認識している。しかし、『本能』や『重力』といった概念が実体としては存在しない説明原理であるように、『時間』もモノとして実在しない以上、説明原理として扱うべきであると野村(2012)は主張する。すなわちナラティブの視点は、時間の非実在性に立脚した上で、語られた時間や時間について語る行為を扱うのである。TAT の現場でも、時間は必ず言葉を介して思考され、語られ、記述される。その限りにおいてそれは、『時間についての語り』と見なすことができる。実在するのは時間ではなく、我々に『時間についての言葉』(5 月 23 日, 11 時, 10 分遅れた, 等)を語らしめる出来事であり、時間は在るモノではなく、我々の経験の意味として語りだされるモノなのである。これが、ナラティブの視点から認識した場合の時間性である。本論文においても、この認識によって時間性を理解する。なぜなら、この認識は TAT の時間性(ストーリーやプロットのような物語的な時間、反応時間のような物理的な時間、過去・現在・未来のような心理的な時間)について包括的な理解を与えうるし、心理検査における時間とは何かについて新たな考察の可能性をも与えるからである。ナラティブの視点から時間性理解を目指すならば、教示やプロトコルに表される時間だけでなく、検査状況という現実世界の認識から改めねばならないとしても理解に難くない。

さて、野村(2010; 2012)は、哲学者である McTaggart, J.E. の時間論を基にして、我々が思考したり語ったりする『時間についての言葉』には 4 つの種類があると述べている。その 4 つを、A 系列, B 系列, C・D 系列, E 系列の時間と命名し、それぞれの特徴をまとめていく。野村(2012)を引用しながら、以下に紹介する(表 4, 図 3 参照)。

表4 物語としての時間（野村・藤原，2008）

多声的な時間 (polyphonic)	系列	時制	ポジション	順序	方向性	目的性
	A系列	temporal	not-permanent	with order	with direction	with purpose
時制あり		可変	順序がある	方向性がある	目的を持つ (収穫あり)	
B系列	not-temporal	permanent	with order	with direction	with purpose	
	時制なし	不変	順序がある	方向性がある	目的を持つ (収穫あり)	
C・D系列	not-temporal	permanent	with order	no direction	pre-purpose	
	時制なし	不変	順序がある	方向性を持たない	目的を持つ以前の (収穫以前)	
E系列	not-temporal	not-permanent	no order	no direction	no purpose	
	時制なし	可変	順序がない	方向性を持たない	目的を持たない (収穫なし)	

A系列：時制と方向性を持った変化（過去・現在・未来による時間把握）

B系列：時制がなく方向性を持った順序（「より前」「より後」による時間把握）

C・D系列：時制も方向性も持たない順序

E系列：時制がなく方向性を持たない変化（正法眼蔵、有時）

time 時間	心理的な時間	物理的な時間	非時間	対話的な時間
	内在化 されたもの	外在化 されたもの	停止 したもの	同調化 したもの
	(例：自伝)	(例：動画)	(例：静止画)	(例：ダンス)
	A系列の時間	B系列の時間	C・D系列の時間	E系列の時間

図3 時間の種類（野村，2010）

まず、A系列の時間は、「心理的な性格をもった時間」のことである。語り手である自分を中心にして考えられる時間で、自分が『今』という起点を想定して初めて可能になる。過去・現在・未来という時制をもち、ときに長く感じたり、遅く感じたりと時計のように厳密に等間隔の時間を刻まない。「自分と一体となった方向性をもった変化で、生きるために何らかの目的を果たし、語ることによって意味をもつ主観的な時間」である。

B系列の時間は、時計やカレンダーに代表される「物理的な性格をもった時間」のことである。「自分の人生とは離れたとことで、自分と関係なく経過する時間」であり、例えば我々が寝ている時はA系列の時間は消失するが、B系列の時間は消えることなく進み続ける。この時間は、起点とする『今』がないので、過去・現在・未来という時制が存在しない（朝起きて時計を見た時の『7時』という時間は、A系列においては『今』の時間であり、仕事に出かける準備をしなければならないという主観的な意味を持っているが、B系列において

は時計の針が等間隔に動く際の一地点を示しているに過ぎない)。代わりに、出来事と出来事の間『より前』『より後』という順序は存在する(同じ日の朝7時と夜9時では、7時よりも9時の方が後であるし、2000年は2014年よりも必ず前にある)。年表、タイマー、テレビの番組表などもこの種類に属する。まとめると、「B系列には、時制がなく、時の刻む間隔は一定であり、前に進むという方向性があり、順序がある。なんらかの目安に使われ、なにかの目的をもつ」。ただし我々は、「過去・現在・未来という時制がないB系列とそれがあるA系列とを混同することがしばしば」ある。37頁の自動車事故の話为例にすると、もしCl.が『3日前に自動車事故を起こしそうになったんです』と語ったとしたら、この語りには既にA系列とB系列の時間が両方存在している。Cl.にとって、起点は面接にいる『今』であり、自動車事故の体験は『過去』の出来事である。この認識はA系列の時間に属する。同時に、3日前という認識はB系列の時間である。体験のインパクトがあまりに大きかったために、Cl.があたかも先ほど起こった出来事であるかのように感じているとしたら、『3日前』という言葉には、やはりA系列とB系列両方の意味が混在していることになる。この例から分かるように、我々がセルフ・ナラティブで過去・現在・未来に沿ったストーリーを語る時や、TATで原因・結果の軸に沿って物語をつくる際の『直線的な軸』とは、実はB系列の時間をベースにしているし、必然的にそうならざるを得ない。図版1で、『少年がバイオリンを前にして悩んでいます。なぜなら、お父さんに買ってもらった大切なバイオリンをうっかり落として壊してしまったからです』と語った時、悩んでいる出来事とバイオリンを壊した出来事は、因果関係で結ばれていると同時に、物理的な時間の前後関係でも結ばれている。もし完全にフィクションの物語であれば、時間が巻き戻ったりして出来事の前後関係が逆転することもあるかもしれないが、通常そうならないのは、我々が生きている現実においては、B系列の時間に沿って因果関係が成立するからである。

C・D系列の時間は、「時間ならざる時間」、「非時間」を意味する。メトロノームが典型例で、時間を測定するものではあるが、時間を等間隔に区切るだけである。カチカチカチと時を区切る一定の順序(間隔の規則性)はあるが、B系列のような『より前』『より後』という方向性はない。他にも、カレンダーには1から31まで数字がならんでいて、普通はこれをB系列だと認識する。しかし、もし時間というまとまりを等間隔に31個に区切っただけだと認識するなら、それはC・D系列の時間になる。なお、McTaggart,J,E.は非時間のうち、メトロノームのように何らかの数値が増加しないものをC系列、カレンダーのように数値が増加するものをD系列としているが、野村(2012)は両者を統一してC系

列と呼んでいることから、本論文もこれに倣うものとする。TAT の場面に話を戻すなら、必ずしも直線的な軸に沿うわけではなく、語り手の構成する意味連関で出来事が結ばれるプロットは、C 系列に属することになる。また、例えば図版を 4 枚施行する時の、1 枚目、2 枚目、3 枚目、4 枚目という提示行為には、時間というまとまりを 4 個に区切る C 系列の時間が存在する。3 枚目と 4 枚目の順番が入れ替えられることもあるので、『より前』『より後』という厳密な規則はない。

最後に、E 系列の時間とは、「対話的な性格をもった時間」のことである。「自分と身体、他人、環境との調和の中にある」時間で、「生きた時間」を指す。セルフ・ナラティブにおいて、語り手と聴き手の共同生成によって語り生まれ、展開していく時、そこには A 系列、B 系列だけでなく、E 系列の時間も存在していると捉えられる。自動車事故に遭いそうになって心臓が止まりそうだったショックを、一人で呟くのと、聴き手に『それはショックだったろうね』と共感して貰いながら二人で味わうのとでは、体験の質が全く異なる。後者の体験をしている時に流れている時間は、A 系列、B 系列だけでは説明できない。それを、E 系列という新たな時間の種類と見なすのである。ここで当然想定されるのは、E 系列は果たして時間と言えるのか、という意見である。もっともな意見ではあるが、それは、E 系列は実在するのか、実在する時間に E 系列も含めて良いのかという問いを意味する。改めて断っておくべきは、ナラティブの視点は実在する時間を扱うのではなく、我々の経験の意味として語りだされる時間を扱うということである。コンサート会場で、素晴らしい演奏に聴き入って恍惚となっていた 90 分間について語る時、90 分という B 系列の時間だけでなく、演奏者と聴衆が一体となることで作られた特別な時間という意味も含まれているのである。(なお、野村は他にも心臓の鼓動、脈拍、まばたき、星の動き、ダンスなども E 系列として説明しているが、本論文の主旨からは離れるので割愛する。) TAT の場面で E 系列の時間として捉えられるのは、検査者との相互作用によって物語が生まれるという認識であろう。他の系列と違って E 系列は、自分と外界（他人や環境）との相互作用によって成立するので、必ず空間が含まれることになるのだが、これまでは時間の問題と切り離れて論じられてきた検査者との関係性も、『時間についての語り』として理解できるのはナラティブ視点ならではである。

TATの 時間	心理的な時間	物理的な時間	非時間	対話的な時間
	内在化 されたもの	外在化 されたもの	停止 したもの	同調化 したもの
	・被検者が体験 している時間	・検査日時 ・全体反応時間 ・初発反応時間 ・ストーリー ・因果関係に 基づく軸	・図版の提示 ・プロット	・被検者と検査 者の相互作用
	A系列の時間	B系列の時間	C・D系列の時間	E系列の時間

図4 TATの時間の種類

以上から、TATの時間性（ストーリーやプロットのような物語的な時間、反応時間のような物理的な時間、過去・現在・未来のような心理的な時間）について、図4のように包括的に理解することが可能となる。TATの領域で多用されている、過去・現在・未来、時間、時間軸、時間的な流れといった時間に関する用語も、この分類に基づいて整理することができる。さらに、本論文の目的も、TATが有する様々な時間性の中で、プロトコルに示されるB系列（過去・現在・未来や、原因・結果という直線的な軸）とC系列（プロット）の時間を扱うものであると再定義できる。

第3節 物語と投映

第2部では、ナラティブの視点から物語と時間に関する理論的検討を行った。ここで得られた知見を基に、第3部からは臨床データを用いた検討を行っていく。その検討方法は、主には<テスト性・客観性>を重視する従来の分析・解釈と、<物語性・主観性>の中でもナラティブの視点による分析・解釈を、比較させながら論じるものである（従来の分析・解釈の中に、氏原（2002）のように<物語性・主観性>を重んじる方法もあるが、これは熟練した臨床家でなければ不可能であるため、本論文で従来の分析・解釈と言う時には<テスト性・客観性>を重視する立場を指すこととする）。こういった検討を行うにあたり、第2部で補足しておきたいのは、心理検査の投映仮説と防衛機制の投影は同一概念ではないこと、さらに、ナラティブの視点は投映仮説を前提としないことである。

小此木・馬場（1972）は、心理検査における投映と防衛機制の投影について、「正常者が一般に行う投影は防衛機制とは言いがたい。例えば投影法検査による投影は、当然その中に防衛としての投影を含んではいるが、基本的にはより正常な心理機能としての投影、す

なわち外界に関する特定の知覚に託して自己の内的な思想、願望、気分などを表現する機制である」と述べている。「これらの正常な投影で、常にその主体は、投影する内的なものの自己所属性を認めることができる。投影する時点では無意識であっても、何らかの形でその自己所属性を自覚する可能性をもっている（つまり前意識である）。ところが防衛機制としての投影の場合には、これらの内的なものの抑圧や否認が前提となる。従って、本人の内面と投影されたものとの間には連続性が見失われ、外界の認知や知覚の形をとって意識の中に体験されるようになる」と。このように、投映法検査における投映と、防衛機制としての投影は区別すべきであるという意見があり、心理検査領域では現在この理解が一般的になっている（その違いを明示するために、漢字表記が異なっている）。さらに、赤塚（2008）によると Bellak, L. (1971) は、投映法検査における投映のことを統覚的歪曲（*apperceptive distortion*）という用語で概念化し、その歪曲の程度の強いものを（防衛機制としての）投影（*projection*）、弱いものを客観的知覚（*objective perception*）と呼んでいる。投影と客観的知覚を両極とした軸の間にある推移可能なものが統覚的歪曲であり、TAT における投映もこれであると赤塚は述べる。従来の分析・解釈は、＜テスト性・客観性＞＜物語性・主観性＞のいずれを重視するにしても、この投映仮説に基づいている。そこには（程度の差はあれど）無意識の領域が仮定され、その領域も含んだ内的な何かが、図版を媒介として物語に投映されると考える。だからこそ、物語のどこに、被検者の何が投映されるのかについて意見が分かれるのである。それに対してナラティブの視点は、無意識の領域を仮定しない。TAT の物語はセルフ・ナラティブの連続線上に位置する語りであり、出来事が時間的に構造化された語りである以上、TAT の物語も必ずこの構造を有すると捉える。ただし、時間的という基準が、B 系列である直線的な時間軸を意味するのか、C 系列である語り手独自の意味連関を意味するのか、或いは両者の混在であるのかは被検者によって異なるので、それを読み取るには、必然的に非言語的側面や検査者の主観性が必要になると主張するのである。物語のどこに、被検者のパーソナリティのどの側面が投映されるのか一義的ではない従来の分析・解釈に対して、ナラティブの視点は明確な応えを持っている。非言語的側面や、検査者の主観性を働かせて読んでいく物語の流れの中に、被検者が図らずも毎回構成してしまう意味連関の癖（＝プロットの繰り返し）が表れていると。さらには、言葉でできた構成物であるプロットは、その後の心理療法においてセラピストと対話していくことで書き換えられ、新たなセルフ・ナラティブが生まれうるという TAT の治療的効果についても言及するのである。

第3部 臨床研究1—人称性への着目—

第6章 人称性に着目した時間性の検討（研究3）

第1節 問題・目的

TATの〈テスト性・客観性〉〈物語性・主観性〉のいずれを重視する立場でも、分析・解釈の基盤として使用されるテキストが3冊ある。それは、主に形式分析について書かれた坪内（1984）の『TATアナリシス』、内容分析にについて書かれた鈴木（1997）の『TATの世界—物語分析の実際—』、全体的な分析視点について書かれた安香・藤田（1997）の『臨床事例から学ぶTAT解釈の実際』である。そして、安香・藤田（1997）の分析視点をさらに発展させたのが、6頁で紹介した藤田（2002）の「情報分析枠」である。本章では、まずは時間性の観点を一旦置いて従来の分析・解釈に立ち返り、アセスメント場面で実際にどのような手順で分析・解釈が行われているかを概観する。

1. 従来の分析・解釈の手順（安香・藤田，1997）

安香・藤田（1997）は、物語を分析する時に第一に何を見るべきか、次に何を見たらよいかという分析の手順や基準についてこのようにまとめている。

（1）印象の形成

すべてのプロトコルを読み、全体の印象をつかむ。

（2）特徴のチェック

図版ごとにプロトコルを読み、気がついた点をメモする。その際の着眼点としては、①絵の情景から物語がきちんとイメージできるか、②物語の筋に一貫性と流れがあるか、③現在、過去、未来のバランスはとれているか、④物語の結末は明るいか、暗いか、あるいは何も語られていないか、⑤印象に残る言葉づかいはあるか、⑥反応時間や物語するときの態度はどうか、などである。着目した特徴を記述し、そこから引き出される可能性のある人格特徴を一緒に付記する。

（3）特徴の整理

各図版のプロトコルから抜き出した特徴、それに付随する仮説を眺め、整理し、書き直す。なお、この時の整理の枠組みとして「情報分析枠」（藤田，2002）が考案された。これ

は、以下の 10 の分析項目に基づいた分析枠（全図版の一覧表）である。①初発反応時間（RT）：始発反応時間を分析枠に記入する。②D 認知：坪内（1984）による「主要部分領域（D）」の知覚、その意味付けの特徴を参考に分析枠に記入する（D 部分とは、図版 1 でいえば少年、バイオリン）。③D 以外の認知：坪内（1984）による「小部分領域（d）」「特異部分領域（Dd）」の知覚、その意味付けの特徴を参考に分析枠に記入する（d 部分とは、図版 1 でいえば弓、譜面らしい紙、Dd 部分とは、弦、目、腕、耳、髪、机、画面の暗さなど）。④導入人物：物語に導入されている、カードに描かれていない人物を分析枠に記入する。⑤時間的流れ：過去、現在、未来が語られているかを基準とし、分析枠に記入する。⑥テーマ：坪内（1984）の標準反応、Henry（1956）の通常的な筋、鈴木（1997）のデータを参考にして分析枠に記入する（例えば図版 1 で言うと、バイオリンをうまく弾けない悩み、習わせられる悩み、壊してしまった悩み、など）。⑦感情表現：プロトコルに表現されている感情語（形容詞、形容動詞など）をそのまま分析枠に記入する。⑧結末：結末をどのようにまとめているかを分析枠に記述する。⑨人間関係：物語に出てくる人間関係を記述する。⑩その他：気づいたプロトコルの特徴を記述する。

（4） 共通特徴の抽出

分析枠で整理された様々な特徴の中で、いくつかの図版に共通してみられる特徴を抽出する。もし、かなりずれた特異な特徴がいくつかの図版に共通してみられる場合は、基本的な人格特徴として解釈につなげやすい。

（5） 図版ごとの物語の特徴の再検討とまとめ

あらためて各図版のプロトコルを読み直し、（3）（4）で整理した物語の特徴と仮説を再検討する。そして、物語の特徴と仮説を書き直し、そこから引き出される人格像を記述してみる。

（6） 各図版の物語の重みづけ

特定の図版にだけみられた特徴が、なぜその図版にだけ現れたのかを検討し、物語の重みづけを行う。着眼点としては、その特徴がみられたのが、①最初の方の図版だけか、②それは前半カードか、後半カードか、③その図版の意味と同じ意味をもつ別の図版の特徴はどうか（例えば、自己イメージが投映されやすい図版として、3BM, 8GF, 9GF, 12BG,

15, 20 がある) , ④その図版の前後の図版の特徴はどうか, などである。

(7) 総合解釈

物語の重みづけを加えられた物語の諸特徴から, 被検者の人格の核となる基本特徴を見つけ出し, それを軸にして他の諸特徴を組み合わせ, 一つの人格像にまとめる。

2. 従来の分析・解釈例

従来の分析・解釈のイメージを伝える狙いから, 上記の手順に沿って解釈した事例を安香・藤田(1997)から抜粋する。

被検者は, 両親の離婚のトラブルに根ざした外傷体験をもち, 幼児期から金銭持ち出しを繰り返す14歳の少年である。この少年が3歳の時に, 父親は怪我をきっかけに怠惰な生活に陥り, しかも突発的に奇矯な行動に出たため, 両親はトラブルの末離婚した。その後, すぐに母親が再婚し, 現在は, 継父, 実母, 異父妹の4人家族。継父は忙しく, 少年との交流はほとんどない。実父は消息不明である。少年は, 小学校入学前より金銭持ち出しが始まり, やがて家族からだけでなく, 訪問客の財布や祖父母宅からの持ち出しも頻発するようになった。そのため心理療法を受けるに至ったが, 話題は日常生活の出来事に終始しがちで, 内省が深まらなかったため, Th.が検査者に心理検査の依頼を行った。検査は, ロールシャッハ・テストとTATを実施。生育歴や問題行動歴から家族の問題が示唆されたので, TATは主に家族関係を見る図版11枚(#1, 2, 5, 6BM, 7BM, 8BM, 11, 12BG, 13B, 14, 17BM)を選択して実施した。

表5は, 少年の図版1のプロトコルである。これに対して安香・藤田(1997)は, 5つの特徴から以下のように解釈している。

図版	TATプロトコル
1	<身を乗り出してカードを見る> (30") <バイオリンを指して>この絵がなんだか分からない。(何にしてもいいんだよ)物を見て考えごとをしている。……………(どんなこと) <弦を指して>画板の上に絵が描いてある。その絵を見てなんでうまく描けるんだろうって考えてる。(そしてどうなるの)まだ, 子どもだから, こういうまい絵が描ける人になりたいと思っている。

(1) バイオリンの歪曲

絵の主要部分である『バイオリン』を、バイオリンと認知していないことがまず目につく。その理由としては、次のようないくつかの可能性が考えられる。

(a) 検査への拒否感情

導入カードである#1は、検査に対する被検者の取り組み方が現れやすい。そのため、このカードで主要部分を歪曲した場合には、通常、被検者の検査への取り組みが拒否的であることを疑える。しかし、この被検者の場合は<身を乗り出してカードを見る>というように、課題にまじめに取り組もうという姿勢が見受けられるので、この可能性はやや薄い。

(b) バイオリン自体に対する知識の欠如

被検者の文化的背景や年齢により、バイオリンという楽器自体を知らないという可能性もありうる。この場合は質疑が必要であろう。

(c) 性的なとらわれ

バイオリンや弦を性的イメージの象徴として考えてよい場合がある。そう考える際には、バイオリンを言語化しないことは、性的イメージからの逃避とみなすことができる。

(d) 認知構造の病的な歪み

『認知の歪み』と言ってもよいだろうが、これだけでは単に反応の特徴をいっているに過ぎないので、それが何を意味するかをそのつど考えていく必要がある。認知の歪みが現れた場合は、精神症状の1つとして知覚体制の病的な崩れを考えてよいことが多いが、それは1, 2枚のカードでなく、数枚のカードで出現しなければ決めることはできない。したがって。この被検者の場合も今後の反応でその点を検討することが必要となってくる。

この被検者の場合、(b)と(d)の可能性が高いと思われるので、以後のカードでその正否を検討する。

(2) 導入人物なし

このカードでは、親や教師といった導入人物を設定することが通常的であるが、この物語には導入人物が登場せず、少年の絵に対する関心だけが述べられている。これは対人関

係の希薄さや人間でなく物にこだわる傾向を示している。

(3) 現在優位

「うまい絵が描けるようになりたい」と課題達成への意欲が示されている。しかし、物語はそこで終わってしまい、課題達成に向かう取り組みや結末としての将来は述べられていない。また、将来ばかりでなく、過去への言及もなく、現在だけの物語となっている。

したがって、この被検者の成就欲求は願望レベルにとどまっており、現実対処能力は乏しいと思われる。

(4) 課題への取り組みの回避

『うまい絵を描く』という課題達成に対して「まだ、子どもだから」と早々と言い逃れをしている。これは、課題達成を失敗した場合の合理化とも考えられる。このような防衛的態度から、被検者が挫折に対する強い恐れや無力感をもっていることが推測できる。また、初発反応時間の長いことや「この絵が何だか分からない」との表現からもその気持ちが感じとれる。

(5) 乏しい創造力

導入カードということをしり引いたとしても反応量が少なく、創造力の乏しさを推測させる。

(6) まとめ

人間への関心は乏しく、関心はむしろ物に向けられている。また、課題達成の意欲は多少あるものの、挫折への恐れや無力感が強いために、願望レベルにとどまってしまい行動には移せない。創造力や現実対処能力は乏しい。しかし、失敗を合理化するといった消極的な意味での対処能力はもっている。

上記の解釈は、分析・解釈の根拠を TAT 反応そのものに求め、標準的な反応と比較させながら行われている。と同時に、非言語的側面も考慮しながら、検査者の長年の臨床的経験の基に行われている。熟達した臨床家だからこそ可能になる、〈テスト性・客観性〉〈物語性・主観性〉の両面を併せ持った解釈であると言えよう。

第3部～第5部は臨床データを用いた検討を行っていくわけであるが、それは、従来の分析・解釈とナラティブの視点による分析・解釈の比較検討を意味するわけではない。従来の分析・解釈の中でも、とりわけ時間性に関する項目のみを取り出し、その項目に対してナラティブの視点から考察を加えたり、ナラティブの視点による解釈可能性を試論していくものである。すなわち、本論文の立ち位置はあくまでも時間性に関する基礎研究であり、TATの現場で行われている総合的なパーソナリティ解釈とは離れた次元に位置することを明記する。加えて、本論文には従来の分析・解釈を批判したり、否定するような姿勢はなく、いずれの立場から解釈を行うにしても必須である、時間性の本質的理解のみを追求する研究であることを付記しておく。

3. TAT と時間的展望

さて、ここで時間性の観点に戻るならば、従来の分析・解釈において、時間の問題は過去・現在・未来という用語で語られることが多い。また、安香・藤田（1997）の分析視点で、「物語の筋に一貫性と流れがあるか」と「現在、過去、未来のバランスはとれているか」が別々で挙げられているように、物語の流れやプロットと、過去・現在・未来という時間の問題は個別で扱われることが多い。さらには、「結末としての将来」（安香・藤田，1997）と述べられているとおり、将来や未来といった時間が因果関係にもとづく結果を意味することは含有されていても、明確な言及は見られていない。このような状況にあって、過去・現在・未来という物語の時間は、被検者の課題への取り組み方か、時間的展望の投映として解釈されてきた。すなわち、図版の現在の状況しか述べられていない場合、被検者は課題への取り組み方が拒否的であるか、時間的展望が現在指向的で、時間的広がりも短く、未来に対して無関心であるといった解釈がなされやすい。

時間的展望（time perspective）とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」（Lewin, K., 1954）のことで、いわゆる「見通し」を指す。広義には、個人の現在の事態や行動を、過去や未来の事象と関連づけたり、意味づけたりする意識的な働きで、特に人生にかかわるような長期的な時間的広がりのある場合を言う（白井，1997）。時間的展望研究では語りへの注目がなされており、『個人にとっての内的な時間』と『語り』は非常に関連性の高いもので、語りを「過去を再構築し、未来を形づくっていくために、現在において行う1つの行動」と捉えれば、「面接場面での『語り』そのものに変化が生じることは、被面接者の内的世界や時間的展望の変化をも意味する」

と考えられる(河野, 1998)。つまり、語り手のセルフ・ナラティブと時間的展望には関連があり、セルフ・ナラティブの構造の変化は時間的展望の変化をも意味するのである。TATの物語はセルフ・ナラティブと同一ではないが、そこに被検者の時間的展望が投射されるという解釈が一般的になっているのは、臨床的事実に基づくためであろう。ただし、分析の際に、過去、現在、未来が語られているかをどうやって判定するのか、三者のバランスを見るには何を基準にすればよいのか、といった部分は主要なテキストにも記されていない。そこで本章では、ナラティブの視点から、過去・現在・未来に3区分する際の分類基準を探索的に検討することを目的とする。これにより、若手の臨床家や、研究ツールとしてTATを用いようとする者が時間に関する分類を行う際、より本質的な時間性理解に基づいた分析が行える一助となることを目指す。

4. 物語の構造と主人公の人称性

先ほど、TATの物語はセルフ・ナラティブと同一ではないと述べたが、大きく異なる点として、語られる主体の違いが挙げられる。セルフ・ナラティブは、語る主体も語られる主体も、共に語り手である『私』なのに対し、TATの場合、語られる主体は図版の主人公を指しての『私』であったり、『彼』『彼女』であったりする。ここで興味深いのは、セルフ・ナラティブとTATでは視点の二重化構造が異なるわけだが、さらにTATにおいても、図版の主人公を『私』と一人称で語る場合と、『彼』『彼女』のような三人称で語る場合とでは二重化構造が異なる可能性があることである。例えば、主人公を一人称で語った場合は、『私が、(図版の主人公である)私について語る』構造となり、セルフ・ナラティブの『私が、私について語る』構造に近くなる。一方で、主人公を三人称で語った場合は、『私が、彼について語る』構造となり、セルフ・ナラティブからは遠ざかると考えられる。セルフ・ナラティブの構造が語り手の時間的展望をも明らかにするのであれば、当然セルフ・ナラティブの構造に近い物語の方が、時間的展望が反映されやすいと言える。翻せば、主人公を一人称で語る場合と、三人称で語る場合とでは、時間的展望が反映される程度や、その質が異なるということである。そこで、過去・現在・未来に3区分する際の分類基準を検討するにあたっては、主人公の人称性を一つの切り口として設定する。

5. 物語の時制

さらに、もう一つの切り口として模索したいのが、過去・現在・未来という3区分に依

らない分類基準である。なぜなら、従来の分析・解釈で使用されることが多い過去・現在・未来という語は、心理的時間としての A 系列の意味合いが強いからである。確かに、被検者の時間的展望は A 系列に属する。しかし、セルフ・ナラティブであっても、「出来事を時間軸に従い、どちらかといえば客観的に記述していく」（大山，2004）ストーリーという形で語られるならば B 系列にも属するし、「語り手の視点から出来事の中に意味的な関連づけが行なわれ提示される」（大山，2004）プロットという形を取るならば、C 系列に属することになる。つまり、最終的にはそこに被検者の時間的展望が現れるとしても、分析の際に A 系列の言葉を使ってしまうと、検査者に時間性に対する混乱や誤解を生じさせる恐れがあるのである。尚且つ、第 2 部の理論的検討において、TAT の場合は厳密にはストーリーという基準はなく、原因・結果という直線的な軸が基準となっていると考察したことからも、過去・現在・未来という言葉は分析時点では使用しない方が望ましいと考えられる。

同様に、哲学者の坂部（2008）も物語的な時間に関しては、「過去－現在－未来という一般に常識としておこなわれる時間のありかたについての観念を、すくなくとも一旦は徹底して括弧に入れ、＜時制＞（Tempus, tense）の問題は、さしあたり、＜時＞ないし＜時間＞（Zeit, time）の問題とは別であり、後者を基準にしたり、あるいは前者の問題を後者のうちに還元・解消したりすることは、問題をまるごと取り逃がすことになる」と述べ、言語学者 Weinrich, H. の時制論をもとにして、物語の時制について考察している。坂部（2008）は物語の時制を、＜発話の態度＞という基準から＜はなしの時制＞と＜かたりの時制＞に二分する。前者は、『先週の出来事を話す』『明日のスケジュールについて話し合う』といったように、目前の行動状況にかかわる内容を発話する際の時制である。一方後者は、『友人と子ども時代の思い出を語り合う』『今までの人生を振り返って語る』というように、目前の行動状況からは自由な内容を発話する際の時制である。心理療法や TAT の場面では、後者の発話を行うことが多い（次回の面接予約や、検査日時の確認などは前者の発話になるが）。さらに坂部は、両者の時制それぞれに、＜発話の方向＞に基づく＜回顧時制＞＜ゼロ段階＞＜予見時制＞、＜浮き彫り付与＞に基づく＜背景＞＜前景＞という 2 つの下位分類基準を設けている。＜回顧時制＞＜ゼロ段階＞＜予見時制＞とは、我々が通常、過去・現在・未来として認識する 3 区分を、厳密な表現に直したものである。そして、この 3 区分それぞれに＜前景＞と＜背景＞がある。＜前景＞は、ある一地点における事態や出来事を表し、＜背景＞はその事態や出来事に関わる背後の状況を表す。坂部が掲載している、ある文学作品の一文を例にとると、『その人は、神様と、草原で会うことになって

いたんだ。そこで急いで行っていたが、途中で一人の百姓に出会った。』という物語は、<かたりの時制>の<回顧時制>に位置し、下線は<背景>、二重線は<前景>を表している。また、<回顧時制><ゼロ段階><予見時制>について、坂部が英語、独語、仏語の時制を分類したものを表6に示す。

表6 「発話の方向」による時制分類（坂部，2008）

	回顧時制	ゼロ段階	予見時制
英・独	現在完了	現在	未来，未来完了
	過去完了	過去	
仏	複合過去	現在	未来Ⅰ，未来Ⅱ
	大過去，前過去	半過去，単純過去	条件法Ⅰ，条件法Ⅱ

点線より上は話しの時制，下は語りの時制

TAT においては、坂部の分類がそのまま使用できるわけではないが、物語的な時間を分類したこの基準を参考にして、時間性に関する分類の仮説生成を行う。

第2節 方法

1. **協力者**：F 大学主催の市民講座受講者のうち、調査協力に同意が得られた 29 名（男性 3 名，女性 26 名で、いずれも中高年を中心とした成人¹⁾）であった。協力者の多くが課題に対して意欲的、積極的であった。全員 TAT は今回が初めてであり、TAT に関する知識はほとんどなかった。また、協力者は調査実施まで筆者との関わりはなかった。
2. **実施時期**：2010 年 G 月であった。
3. **実施場所**：F 大学内の講義室にて実施した。
4. **心理検査**：Harvard 版 TAT 図版のうち、協力者の負担と人称性の立ち現れやすさを考慮して、図版 1，2，3BM，20（補助資料参照）の 4 枚を用いた。この 4 枚を選んだ理由を以下に述べる。図版 1 は、導入として重要と考えたためである。本調査の協力者は、初めて投映法を体験する方々であったため、課題に対するショックや抵抗感を最小限にするために、通常の施行でも導入として使用されているこの図版を選定した。図版 2 は、TAT 図版の中で登場人物が三人描かれている唯一の図版である。人称性を切り口にするにあたり、登場人物の多いこの図版を選んだ。次に、誰もが悲嘆や苦悩を見るような図版 3BM は主人公との同一化が行われやすいため、一人称と三人称に分かれやすいと予想して選定した。図版 20 は、被検者を内省的な気持ちにさせ、自分の人生を振り返る要素を持っている。そのため、時間に関する発話がなされやすいという予想から選んだ。加えて、TAT 体験における心的動揺を落ち着かせ、体験を心に収めやすくなるよう、通常

の施行でも最終図版として使用されているこの図版を選定した。なお、図版を4枚としたのは、予備調査において5枚以上の実施は協力者の心的負担、身体疲労が大きかったためである。

5. 調査用具：TAT 図版4枚，記録用紙，IC レコーダー，筆記用具を用いた。

6. 施行の手続き：まず，調査内容を口頭で説明し，同意が得られた者のみを対象とした。

次に，TAT 施行のために協力者に3名ずつのグループになってもらい（知人同士が同じグループにならないよう配慮を行った），検査者，被検者，記録者の役割を交替して行ってもらった。検査者となった協力者には，教示として「これから，1枚ずつ絵をお渡しします。その絵を見て，簡単なお話をつくってください。その絵がどういう状況で，その前にどういうことがあり，これからどういう風になっていくか，ということ，1つの簡単なお話にして，私に話してください。お話は，長くても短くても結構ですし，正しいお話や間違っただけのお話というものはありませんので，自由に，気楽に話してください。絵は，全部で4枚あります。」と被検者に伝えるよう指示した。TAT 施行中，筆者が各グループを見て回る形で関わった。図版の呈示順序は，心的負担を最小限にするという観点から，図版1，3BM，2，20とした。課題終了後は，グループ毎にTAT体験の振り返りと感想の共有を行い，最後に全員で体験を共有する時間をもった。調査内容の記録は，協力者の承諾を得た上でICレコーダーによって録音した。実施時間は1時間～1時間半程度であった。

なお，本来ならば協力者と筆者の一対一で課題を行うべきであるが，今回は時間性に関する分類基準の検討という<テスト性・客観性>に位置する目的であること，また仮説生成の第一段階であることから，プロトコルデータ数を優先してこのような実施形式をとった。今回の研究で得られた仮説をもとに，第二段階として心理臨床場面に即した形式での実施を予定している。

第3節 結果

1. 物語の分類基準の作成

まず，録音した音声データを文字に変換したプロトコルデータを作成し，人称性の違いによって，主人公を『私』『僕』といった一人称で命名している群（以下，一人称群）と，『彼』『この人』といった三人称で命名している群（以下，三人称群）に分類した。次に，プロトコルを繰り返し読みながら，河野（1998）の語りの様式の分類や，坂部（2008）の

時制分類を参考にして、TAT の時制に関する分類基準を作成した。各項目の名称とその判定基準を表 7 に示す。そして、各図版に対する物語において、その項目が認められるか否かを判定した。判定の際、全体の 10%について筆者と他の 1 名（臨床経験 5 年、精神科医）で独立に判定を行ったところ、90.6%の一致を見たので、残りは筆者のみで行った。

表7 TATの時制に関する分類

分類項目		判定基準	図版1における例
主人公の視点	回顧時制	前景	・図版の状況に至る原因となった出来事の語り 「バイオリンを落として壊してしまった」
		背景	・出来事の背景や、付随する状況の語り 「お父さんが買ってくれた」「とても嬉しかった」 ・出来事から図版の状況までの持続的な事態の語り 「壊してからずっと落ち込んでいる」
	ゼロ段階	前景	・図版の出来事の語り 「バイオリンを前にして悩んでいる」
		背景	・図版の出来事に付随する状況や背景の語り 「ときどき涙ぐみそうになる」「不安でたまらない」
		予見	・図版の状況において予見時制に向けられた語り 「明日必ずお父さんに打ち明けよう」
	予見時制	前景	・図版の状況の後に至った出来事の語り 「お父さんに正直に打ち明けた」「許してもらった」
		背景	・出来事の背景や、付随する状況の語り 「夕飯を食べた後で」「申し訳なさそうにしながら」 ・図版の状況から出来事までの持続的な事態の語り 「お父さんが機嫌のいい時をうかがいながら」
語り手の視点		・語り手の視点による語り 「これはどんな状況だろう」「思い浮かばないです」	

2. 分類結果

図版 1 では、一人称群 13 名、三人称群 16 名であった。両群の分類結果を表 8、表 9 に示す。なお、従来の分析・解釈の過去・現在・未来に対応する〈前景〉項目に網かけをし、各物語において分類項目が認められた場合には●を記している。

同様に、図版 2 における一人称群 12 名、三人称群 17 名の分類結果を表 10、表 11 に、図版 3BM における一人称群 14 名、三人称群 15 名の分類結果を表 12、表 13 に、図版 20 における一人称群 10 名、三人称群 17 名の分類結果を表 14、表 15 に示す。図版 20 では、図版を絵や写真に見立てて反応した者が 2 名いたので、今回の分析対象からは除外した。

4 枚の図版の分類結果からは、図版の状況よりも後の方向に向けた語りで、一人称群は〈ゼロ段階〉の予見、三人称群は〈予見時制〉の前景を語りやすい傾向が認められた。

表8 一人称群の分類結果（図版1）

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	自分		●	●	●				●
2	(少年), 私			●		●			
3	(男の子), 僕	●	●	●	●	●	●		
4	(命名なし)	●	●	●	●	●			●
5	自分	●	●	●	●	●			
6	僕	●		●		●			
7	僕	●	●	●	●	●			
8	僕		●	●	●	●			
9	僕, ジョン	●		●	●	●	●		
10	僕	●	●	●	●	●			
11	(命名なし)	●		●	●		●	●	
12	(命名なし)			●	●	●			
13	僕, 自分		●	●	●	●			●

表9 三人称群の分類結果（図版1）

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	憂鬱そうな子	●		●			●		
2	男の子	●	●	●	●		●	●	●
3	男の子			●	●	●			
4	少年, 僕, この子	●	●	●	●		●		
5	少年, その子	●	●	●		●			
6	男の子, 彼	●	●	●	●		●		
7	男の子, 彼	●		●	●		●		
8	彼, 自分	●		●	●		●		
9	男の子	●		●	●		●		
10	男の子		●	●					
11	彼		●	●	●		●		
12	彼	●		●	●				
13	男の子, 彼		●	●	●		●	●	
14	男の子, 彼	●	●	●		●			
15	この子		●	●	●	●	●		
16	男の子, 彼	●	●	●	●		●	●	

表10 一人称群の分類結果（図版2）

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	私		●	●	●		●		●
2	私			●	●	●			
3	私			●	●	●		●	
4	私			●	●				
5	私	●	●	●	●	●			
6	自分		●	●	●	●	●		
7	私			●	●				
8	私	●		●	●	●			
9	私			●	●	●			
10	私	●		●	●	●			
11	私			●					
12	私			●	●	●			

表11 三人称群の分類結果（図版2）

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	娘		●	●	●		●	●	
2	女の子			●	●				●
3	女性			●	●				
4	女性, 彼女	●	●	●	●		●	●	
5	彼女		●	●	●		●		
6	彼女		●	●		●			
7	女性			●		●	●		
8	奥さん			●					
9	女性			●	●	●			
10	女の人		●	●	●		●	●	●
11	女性		●	●	●		●		
12	女性	●		●	●		●		
13	女の人			●	●		●		
14	男の子, 彼	●		●			●		
15	女の子		●	●		●	●		
16	女性	●		●	●		●	●	
17	女性	●	●	●	●		●		

表12 一人称群の分類結果 (図版3BM)

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	私	●	●	●	●		●	●	●
2	自分		●	●	●	●			
3	私			●	●				
4	女の人, 私	●		●	●	●			
5	私	●		●	●	●			●
6	私		●	●		●			
7	(命名なし)	●		●			●		
8	僕	●		●	●	●			
9	私			●	●	●			
10	(命名なし)	●	●	●	●	●			
11	私	●	●	●		●			
12	僕	●		●			●		
13	私			●					
14	(命名なし)	●		●		●			

表13 三人称群の分類結果 (図版3BM)

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	女の子		●	●	●		●		
2	A子	●	●	●	●	●			
3	女の子, この子	●	●	●	●			●	●
4	女性		●	●			●		
5	女性	●	●	●	●		●		●
6	彼女	●		●	●		●		
7	彼女	●	●	●			●		
8	女の人	●	●	●			●		
9	女の人		●	●	●	●			
10	女の人	●		●	●		●		
11	女性, 彼女		●	●	●		●		
12	彼女	●	●	●	●	●			
13	この人	●		●	●		●		
14	この人	●		●	●		●		
15	この方	●		●	●		●	●	

表14 一人称群の分類結果 (図版20)

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	私		●	●			●	●	●
2	私		●	●		●			
3	自分			●	●				
4	私	●		●	●	●			
5	僕	●		●			●		
6	(命名なし)			●	●	●			
7	僕			●	●	●			
8	(命名なし)			●	●	●			
9	僕	●		●		●			
10	僕	●		●	●	●			

表15 三人称群の分類結果 (図版20)

	主人公の命名	主人公の視点							語り手の視点
		回顧時制		ゼロ段階			予見時制		
		前景	背景	前景	背景	予見	前景	背景	
1	男性		●	●	●	●			
2	初老の男性			●	●		●		
3	男の人			●	●		●		●
4	兵士			●	●	●			
5	日本兵士	●	●	●	●		●		●
6	彼			●	●		●		
7	彼		●	●	●	●			
8	男性	●		●	●		●		
9	この人			●	●				
10	男性	●		●	●		●		
11	男の人		●	●	●				●
12	男の人	●	●	●	●		●	●	
13	中年の男性	●		●	●		●		
14	男の人	●	●	●	●		●		
15	男の人		●	●	●		●		
16	男性	●	●	●	●		●		
17	男性		●	●	●		●	●	

第4節 考察

1. 未来に向けた構造の差異

表16は、図版1における一人称群、三人称群の物語例である。図版の状況の後に至る結果を語る際、三人称群は結果としての出来事を語りやすいのに対し、一人称群は、出来事としては図版の状況から展開していないことが多い。その代わり、主人公は図版の地点に身を置きながら、その後の結果を予想したり願ったりする語りが起きやすい。決して一般化することはできないが、今回のデータに限定し、データに即した知見という意味でこのような特徴が見られた。物語の時制には被検者の時間的展望が投射されるという従来の仮説に基づくならば、図版の状況より後の時制の違いは、セルフ・ナラティブにおいて未来に向けた展望の質が異なることを意味していると考えられる。この点について考察をすすめる。

表16 一人称群、三人称群の物語例

TATプロトコル	
	初発反応時間 14" 全体反応時間 1' 37"
一人称群①	<p>…さーあ、困ったぞ。僕は、このバイオリンとどうやって付き合っていくといいんだろう。お母さんに「習え！」って言われて、これをクリスマスプレゼントにくれたんだけど、僕はこれから上手にやطيعけるかな？…うーん、<u>いつか、上手になってみんなに気持ちのいい曲が弾けるようになったらいいな</u>でも、どんなにかかるんだろう。<u>頑張ってみよ</u>。</p>
	初発反応時間 12" 全体反応時間 3' 22"
一人称群②	<p>…僕はジョンです。ちょっと悩んでいます。このバイオリンは、お父さんの大事なバイオリンなんです。お父さんの部屋から持ち出してきちゃって、ちょっと弾いてみようかなって思って弾いてみたんですけど、うっかり落としてしまって、バイオリンの先が欠けちゃったんです。で、自分では直せないし、誰に直してもらった方がいいのかも分からないし、でも早く直さないといけないんですよ。実は、<u>お父さんがこのバイオリンで一週間後に演奏会があるんです</u>。だから何としても直さないと、お父さん困るから。で、どうしようと悩んでいます。正直に言って、お父さんに言って直したらいいのかと思うんだけど、日頃からとても大事なものだから触らないようにと言われてたから、それがあって叱られるんだろうな…って思うのと。お父さんにとってこのバイオリン大事にしてたのを知ってるから、それを壊したことに對してすごく罪悪感があるかなと思って、悩んでいます。うーん、どうしようかなあ。<u>お母さんに相談してみよっかなあ</u>。</p>
	初発反応時間 14" 全体反応時間 1' 01"
三人称群①	<p>…今は、この絵は、バイオリンを前にちょっと憂鬱そうな子がいて。なんか憂鬱そう。この前にはどういことがあったんだろう？…今はバイオリンのお稽古をしないといけないんだけど、したくなくて憂鬱な感じ。この前に、お友達と喧嘩して、「今はバイオリンを練習する気分じゃないんだよ」と思っている。これからどういう風になっていくか、ですけど…<u>喧嘩してたお友達から連絡があって、遊びに行つて仲直り。で、バイオリンも楽しくなつてまた練習できる</u>。</p>
	初発反応時間 5" 全体反応時間 1' 48"
三人称群②	<p>…これは今、この子がバイオリンを習ってるんだけど、今ちょっと行き詰つて、うまくいなくなつて悩んで、バイオリンを見つめているところで。その前には、バイオリンのレッスンがあって、そこで自分が思い通りに弾けなくなつて、すごく辛い気持ちになつて。で、終わった後どうしたらいいんだろうとか、どうしようとかつていうふうに悩んでいるところで。で、この後は、しばらく彼はレッスンで聞いたことをもう一度思い出したり、自分がどうしようと思ひながら、そうですね、<u>彼は自分の好きなバイオリニストのCDを聞くと思ひます</u>。それで、それを聞いて、自分をもう一度リフレッシュして、また練習に励みます。</p>

下線部は<予見時制>の前景、二重線部は<ゼロ段階>の予見を示す。

坂部（2008）は物語の時制の特徴として、『今』の捉え方を挙げている。〈はなしの時制〉でも〈かたりの時制〉でも、語り手は、『今』という、まさに自分が今・ここにいる地点を基準とする。このときの『今』は、通常の常識的とされる時間理解において過去・現在・未来と言う時のような、過去と未来の持続に対比されるいわば点的な現在時点ではない。〈来し方〉から〈行く末〉までをも含めた幅をもった、一種の体験流として理解される。〈来し方〉から〈行く末〉へと向かい、〈来し方〉を振り返りつつ〈行く末〉を見定め、〈来し方〉から〈行く末〉までをも自らの幅のうちに含みこむものが『今』である。これは、語り手の時間的展望そのものであり、A系列の時間と言い換えることができる。

この特徴を踏まえながら考察すると、まず三人称群は、視点の二重化構造が『私が、彼について語る』となる。これは、語る主体と語られる主体の連続性が実感されにくくなり（投映仮説に基づくならば、主人公への同一化が起きにくくなり）、物語の意味は、童話やおとぎ話といった「人の運命を虚構の言辞で書き上げた作品」（大野，2001）に近くなる。すると、語られる主体の活躍する時間次元は、語り手の時間的展望を基準に考えるよりも、TATの枠組みである因果関係を基準に考える傾向が強まる。つまり、図版の状況より後の展開は、『語り手の時間的展望としての未来』という意味合いよりも、『図版の状況を原因として、それによって生じる結果』という意味合いが強まるのである。一方で、一人称群の視点は、『私が、（図版の主人公である）私について語る』という二重化構造となる。これは、語る主体と語られる主体の連続性が実感されやすくなり（投映仮説に基づくならば、主人公への同一化が起きやすくなり）、物語の意味は、セルフ・ナラティブに近くなる。すると、語られる主体の活躍する時間次元は、TATの枠組みである因果関係よりも、語り手の時間的展望を基準に考える傾向が強まる。つまり、図版の状況より後の展開を考える際に、『語り手の時間的展望としての未来』が反映されやすくなるのである。ここで、語り手が基準とする『今』の特徴に戻るならば、『語り手の時間的展望としての未来』には、完了形としての『未来に起こった出来事』は決して組み込めないことが明らかになる。なぜなら、我々は、自分が生きている『今』の地点より先のことは分からないからである。例えば我々は、『今』の時点では『明日の夜に雨が降った』と未来を完了形で言うことができない。『今』の時点から展望して、『この天気だと明日の夜は雨かなあ』とか『きっと明日の夜は雨だろう』といった具合にしか語れないのである。これは、〈来し方〉から〈行く末〉までをも自らの幅のうちに含みこむものとしての『今』の地点から、『今』に内包されている〈行く末〉しか語り得ないことを意味している。従って、表16の物語例において、三

人称群が『喧嘩してたお友達から連絡があった』『遊びに行って仲直りした』『バイオリンも練習できるようになった』『好きなバイオリニストのCDを聞いた』などと未来の出来事を完了形で語っているのは、語り手の時間的展望よりも因果関係を基準に構造化している可能性を考えることができる。さらに、一人称群の『いつか弾けるようになったらいいな』『頑張ってみよう』『お母さんに相談してみよう』といった語りも、時間的展望が現在指向的で、未来に対して無関心であるといった語り手の在りようを必ずしも投射しているわけではないとすることができる。セルフ・ナラティブに近い構造を有するために、物語の中に『未来』を完了形として組み込めず、あくまで図版の『今』の状況に内包される<行く末>しか語りえない可能性が生じるのである。これが、一人称群の<ゼロ段階>の予見に対応すると考えられる。セルフ・ナラティブは常に終わらない、完了形にならない形でしか語ることができないし、だからこそ書き換えられる可能性を含んでいるとも言えよう。

2. 分類基準の仮説提示

今回のデータからは、被検者が主人公を一人称で語った場合、従来の分類基準に従えば『未来を語っていない』『現在が中心の語りである』と誤って判断される可能性があること、加えて、過去・現在・未来を同じ分量で語っていたとしても、それが被検者の時間的展望をそのまま反映しているかは検査者が慎重に見極めねばならないことが明らかになった。従来の基準に従って過去・現在・未来に3区分する際、出来事のみ注目するのではなく、主人公の人称性と、物語の時制を加味して分類した方がよいという仮説が本研究において生成された。この仮説は、今後の研究において通常の施行形式で実施したり、他の図版でも検討したりすることによって精緻化されねばならないが、本研究ではその第一歩に着手することができたと考えられる。

<注>

- 1) 本研究では、協力者のプライバシー保護のために、年齢については同意が得られた者のみ回答してもらった。回答が得られなかった協力者も数名存在するため、今回は年齢を記載しないこととした。

第4部 臨床研究2—時間喪失への着目—

第7章 時間喪失に着目した時間性の検討（研究4）

第1節 問題・目的

従来の分析・解釈において、TATの物語に被検者の時間的展望が投射されるという解釈仮説は、ナラティブの視点に基づくならば次のように理解できる。TATでは、B系列（すなわち、物理的な性格をもった時間）に属する因果律によって出来事を配列する際、（主人公の人称性によって程度の差はあるが）A系列（すなわち、心理的な性格をもった時間）に属する被検者自身の心理的な時間（時間的展望）が想起され、参照されやすくなる。そのため、TATで出来事と出来事を繋いでいく行為は、必然的に被検者自身が体験した出来事を繋ぐ準備状態を整えることになる。出来事を繋ぐとは、物語る行為に他ならない。つまりTATは、被検者にセルフ・ナラティブを語りやすくさせる治療技法として活用できるのである。さらに、TATの図版は、人生の決定的な場面における決断や葛藤を思わせるような絵ばかりである。そのため、被検者が想起し参照する自身の体験は、自分の人生にとって重要かつ危機的であった出来事になる。これが、治療技法としての更なる特徴である。「その人が自己を物語る上で『重要』かつ『多様』な経験・出来事・エピソードを想起させ、過去の再構成を促進させる」（草島，2005）ことで、被検者の時間的展望の変化を促すのである。

しかしながら、鈴木（2002a）の指摘を振り返るならば、心理臨床場面でTATを実施した場合、「時間的経過も劇的なところも含んでいない、物語と言えないようなもの」も少なくない。必ずしも流れのある物語が語られるとは限らないのである。その原因が課題に対する拒否的・消極的な取り組み方に帰されない限り、流れのない物語、言わば時間というものが見出されずに喪失してしまっている物語にも、被検者の構成する意味世界が反映されているはずである。では、時間喪失の物語に対してナラティブの視点から読んでいくなれば、どのような解釈可能性があるのか。そこには、被検者のどのような意味世界が反映されているのか。本章では、この2点の探索的検討を目的とし、心理臨床場面におけるプロトコルを素材として検討を行う。

今回素材とするのは、筆者が、心理療法担当Th.の依頼でテスターとして関わって検査を行ったTATのプロトコルである。これはアセスメントを目的とし、〈テスト性・客観性〉が重視される文脈であったため、筆者は分析・解釈の根拠をTAT反応に求める意味で、Th.から詳しい面接経過やCl.の臨床像を聞かずに検査を行った。そして、アセスメント結果を

Th.にフィードバックして検査者としての役割を終了した。仮説生成研究という位置づけから、できる限り現場の文脈に即した検討を目指すため、今回は Cl.の臨床背景や面接経過などの詳しい臨床情報は最小限にとどめ、TAT のプロトコルにおける時間性の観点のみを検討の対象とする。なお、これには Cl.のプライバシーを保護する目的も含まれている。

第2節 方法

1. **被検者**：Sさん（仮名，60歳代女性¹⁾。筆者が検査前に Th.から聴取した大まかな情報として、Cl.は『子どもや夫との関係に悩んでいる』という主訴で自発的に来談された。依頼の経緯は、面接中に Cl.から自己理解を深めるために検査があるならば受けたいという希望があり、Th.としても Cl.の見立て及び面接方針の決定に役立つと判断してのことであった。敢えて TAT を選んだのは、Th.が、主に Cl.の人との関わり方の特徴を把握したかったためと、物語をつくるという課題が緊張度の高い Cl.の心理的構えを和らげると予想したためであった。

2. **実施時期**：2011年H月であった。

3. **実施場所**：F大学内の心理教育相談室にて実施した。

4. **心理検査**：Harvard版 TAT 図版のうち、16図版（白紙）を含む22枚を実施した（1, 2, 3BM, 4, 5, 6GF, 7GF, 8GF, 8BM, 9GF, 10, 11, 12F, 13MF, 14, 15, 17GF, 18GF, 19, 20, 12BG, 16）。図版選定と提示順序は、Bellak, L(1971), Cramer, P. (1996)を参考にしながら、20枚以上が使用されている近年の研究に従ったものである（鈴木, 1997；井口, 2002；渡部, 2009）。

5. **調査用具**：TAT 図版22枚，記録用紙，ICレコーダー，筆記用具を用いた。

6. **施行の手続き**：まず、TAT 施行に関する概要を口頭で説明し、課題への緊張緩和及び筆者との関係作りをある程度はかった後に、TAT を施行した。教示は、「これから1枚ずつ絵をお渡しします。その絵を見て簡単なお話をつくってください。その絵がどういう状況で、その前にどういうことがあり、これからどういう風になっていくかということ、1つの簡単なお話にして私に話してください。お話は長くても短くても結構ですし、正しいお話や間違ってお話というものはありませんので、自由に気楽に話してください。絵は全部で22枚あります」であった。検査終了後、体験の振り返りと感想の共有を行った。検査内容の記録は、被検者の承諾を得た上で ICレコーダーによって録音した。実施時間は45分程度であった。

第3節 結果

SさんのTATプロトコルを表17に示す。図版1枚毎の物語の流れだけでなく、22枚通しての流れと全体の印象を読み手に伝える狙いから、全プロトコルを記載する。実際のアセスメントでは、坪内(1984)、鈴木(1997)、安香・藤田(1997)、藤田(2002)、赤塚(2008)を基に総合的に分析・解釈を行い、Th.に結果をフィードバックしている。本研究では、この分析・解釈の中から時間性の観点のみを取り出し、それを手がかりにナラティブの視点による解釈可能性を検討する。

表17 SさんのTATプロトコル

図版	TATプロトコル
1	... (13") なんかこの子は暗い顔、表情に見えるんですけど、これは鉄砲なのか何なのか分からないんですけど。<Aさんの思われるとおりで自由にお話を作ってください結構です。>なんか別に嬉しくなくて、うーん、不安な感じが。で、この先もなんかこう、これをどうしようかなみたいな感じに思いますけど。そのくらいで、うん。(57")
2	... (13") これもなんか、あんまり良い思い出じゃなくて、なんかこう、いつか来たところ、自分の思い出のあるところみたいな感じで。うーん、でも、何かあんまり良くなかったことがあった場所みたいな感じですけど(笑) ... (12") ...で、遠くを見てるから、なんかこう気になってる。あの人はどうなってるかなって感じ。そのくらいです。<この絵の前にどういうことがあったとか、後にどうなっていくかっていうことはいかがですか?>この前に...何かすごくこう、うーん... (11") ...困った状況だったような感じで、この先も...がんばって...がんばっていかうじゃないけれども、こう、あの、先もまあ何か、あのー...やっていけるのかなみたいな、そんな感じに思います。(2'22")
3BM	... (6") この前は何か、あの...うーん、悪いことではなくて、すごく、何かこう、遊び疲れてたりなんかしてて、何かにすごく疲れて、ぐったりただ眠ってて。で、この先も、あのー...特別何か、こう普通の生活をしてる人って思う(笑)。(55")
4 (16") 夫婦か何か分かりませんが、普通のまあ家庭の夫婦で、あのー...奥さんが、旦那さんのことにすごくこう気にかけてる。うーん、でもこの人はすごく怖い。怖い。男の人が。うーん、でも女の人がなんか、この人に興味があるよう(笑)。全然興味っていうか、こう、あのー...嫌いな人ではなくて。うーん、なんかこう、ただ、こうあんまり仲の良い絵ではない、ないですね。...この先どうなっていくかっていうのは、この先もこう...悪い関係の二人じゃないと思うんですけど(笑)。(1'58")

5	... (7") これは、なんかこう、部屋、こう母さんが、こう、あの一、子どもが、うーん、どうしてるかな、どうしてるんやろって思ってドアを開けて、子どもの様子をこう、ちらっと見てるよう(笑)。で、笑ってもないし...大丈夫かなって思いながら、うーんと... (11") ...うん...うん、安心してるとし、感じではないと思うんですけど。うん。 (1'31")
6GF	... (12") この人達は、うーん、まあ夫婦かなと思います、で、あの一...奥さんになんかこう...奥さんに愛情をかける、何かひょうきんなことをしようとしてる感じで、旦那さんが。で、奥さんも、あの一...愛情は感じるかな、この人、女の人に、男の人に対して。で、この先もなんかこう、仲良しみたいな感じの、思うんですけど(笑)。 (1'18")
7GF	... (11") こう普通のおうちなのか、こう、写真館で写真を撮ってるんじゃないでしょうね。普通のおうちで、うーん、娘さんに、うーん、お母さんが小言じゃなけど、なんかこうしつけじゃなくて、うーん...大丈夫なんみたいなことを言ってる、それをこの女の子が、なんかちょっと無視、無視してるような感じで。うーん...ちょっとお母さんもそっぽむいてるみたいな、と思うんですけど。 (1'28")
8GF (16") この人...なんかこう恋愛かなんかをしてて、うん(笑)。で、あの人どうしてるかな一みたいな感じで、その人を待っているみたいな感じ。うん。 (44")
8BM (17") この人が、この男の人がなんかすごく憎しみみたいなのがあって。うーん、で、自分の中で、この人こういうの、うーん、まあ、これ手術をしているような感じだけど、自分がその憎しみを持っている人にこう、それをこう、殺してしまおうかみたいな(笑)。でもそれは、自分、自分の中でそう思ってるだけで。でもそれしたらどうなるかなってこの人は思ってるのかなって。でもできないか。でもこの人はそれをやっちゃおうかなって思ってる。 (1'30")
9GF (25") この小さい女の人、下の女の人(図版左の女性)、この人(図版右の女性)眺めてるんだけど、この人(右の女性)は何かこの人(左の女性)に対してあんまりいい思いを持ってなくて。で、その人を、あの、こう遠くから、ちょっと嫌な気持ちで、この人をこう見送って。自分はこう、隠れながら、うん、あんまり好きじゃない人...で、うーん...まああの人とあんまり会いたくないなみたいな。 (1'25")
10	... (7") これはあまり若くないご夫婦で、まあ今まで、何十年、まあ共に暮らしてて。で、お互いが、こう愛情が持ってる。で、あっ幸せっていうのが、この先も幸せで、お互いが同じような思いで思い合ってる人達かなって感じ。 (40")
11	... (15") これ滝かな、岩壁みたいな。... (25") ...これは別にどうってことないんだけど...うん、なんかこう、崖がこう崩れてきて。うん...この近くにも近寄りたくないって。うん、その高いところってのすごい怖い。うん... (32") ...あんまりなんか感じない、なんか、何とも感じないんですけど(笑)。 (2'02")
12F	... (12") この人がこの、後ろにある、あのおばあさんのような人を見て、人を。自分が「あっこんな風になっていくんやろか」っていうのを、この人があの、想像してて、自分のことを想像してるんかなって思いますけど。で、うーん...その崩れていくのを恐れているんじゃないけど、きっと自分もこうなっていくんかなって思ってるんと思ってるかなって思う。 (1'07")
13MF	... (17") これはなんか、あの、夫婦か何かな。その、うーん、恋人同士か。それは一緒に、夫婦かな、一緒に暮らしてるんやけど、うーん...この人は、女の人、死んでしまったのかな。病気かなにかで、息をしてないような感じで。で、この男の人は...まあ、普通に悲しんでる。で、その先は、悲しんでるけど、でもそう悲しんでもないのかな。うんうん。何となくただちょっと悲しい。はい。 (1'27")

14	... (5") これは自分の、あの一、アパートか何かの住んでる家で。んで、朝早、うん、朝は早い時間で...うーん、ただ窓を開けて...窓を開けて...あくせくしてる感じでもなくて、今日は、あの...いつもの朝がきたみたいな感じで。うん、なんか平和な感じがする。(58")
15 (33") なんか自分、なんかこう... (12") ...こうぞくぞくするような所に立ってて。...自分がこの先こう、どうなっていくのかなーって思ってた。...こう...暗いままの、なんか先で... (10") ...まあこの人の、こうなんか骸骨のような顔で...もうこのあれは、自分の先は決まってる、もう、うーん、これ以上、こう...進展も、何ていうのかな、良くないところがないところで。自分はもう、うーん、止まってしまってる、もうどうにももう、うん、暗ーい顔。先、先っていうんですか、<先?>先が。<ああ、先>が、このままずーっとこんな風なんかかなーみたいな。(2'35")
17GF	... (24") 今はこう、あの一、普通の家に住んでるんだけど、将来はきつとこう、あの一、もっとこうすごい、あの一、希望が持て、持てる。すごい先が明るいやろっていう、それを確信してるっていう、自分が。で、この向こうに住んでる人が(笑)。そう思ってるのかなって。(52")
18GF	... (18") なんか、あの、あんまり、あの一、こう幸せ、今までずっと幸せではなくて。んー、でなんか、たぶんご主人かなと思うんです。だけど、そのご主人が死んじゃって(笑)。で、あの一... (13") ...うん、でもすごくこの人、このご主人にすごく愛情があって。で、すごく愛おしいなあって思って。その、それでこう抱えてるっていうか、触れてるのかなって思う。で...この先もこの人はなんかこう、この人を忘れ、んー、もし死んで(笑)、死んで、死んでるんだとしたらこの絵が。こう、ずっと思い続けるような感じに思う。この奥さんがね。(2'01")
19 (20") こう、ぱっと見て思うことは、何かこう3歳か4歳の子が、こう自分の、絵の上手な子が、想像豊かな子が、ただこう絵を描いて、動物か何かちょっとよく分からんような絵を描いて。うーん... (17") ...うーん、で、もしこれを子どもが描いてて、そしてその子はすごく絵の才能がっていうか、ある子が、で、なんか、美術館に何かこうこの子は、絵が上手っていう、飾ってあるっていうふうな絵が。(1'20")
20	... (16") うーん...何かなこれ。... (21") ...こう、花火がこう、あの、はじいて。花火大会の花火がこう、はじいた残りが(笑)、こう落ちてきてるような感じで。うーん... (38") ...そうか、うーん... (23") ...花火、うーん... (23") ...で、なんかこう、その後に家族連れもたくさんいるんだけど、まあ楽しそうに帰る人もいるけれど、うん...悲しそうに帰る人もいるみたいな。うんうん。(3'08")
12BG	(3") うーん、これは、冬なのか春かで桜が咲いてるのか、どちらなのか。あ、春かな。で、草が、あの一、たくさん生えて、生えてきて。...うーん、春で草花もこう、ちょっと咲いてきてて。これは、うーん...さみしい、あんまり人がいなくて。あの山の中に、こう桜が咲いてて。でも、こう... (10") ...山の隅っこの方の川がちょっとちょろちょろ流れてて、そこにちょっとぽつり桜が咲いてて、人がだあれもあんまりいない感じ。(1'26")
16	(3") これは、えっ(笑)。何もない。<どう見ていただいても。>で、ここに、こう、何にもなくて。この真っ白が、うん...こう落ち着く、すっとする。うん(笑)。...こう何にもこう、別に描きたくないみたいな。うんうん。(46")

網かけ部分は、藤田(2002)の情報分析枠における『現在』のみの物語である。

第4節 考察

まず、アセスメントの際に行った分析・解釈の中から、時間性に関連する分析項目である、藤田（2002）の情報分析枠の3項目『時間の流れ』『テーマ』『結末』を抜粋する。次に、この部分に対してナラティブの視点から読んでいくなれば、どのような解釈可能性があるのか、そこには被検者のどのような意味世界が反映されているのかについて考察する。なお、ナラティブの視点による解釈の妥当性については、筆者と臨床心理士1名（臨床経験25年以上、臨床ナラティブ・アプローチを主とする）によって、臨床的妥当性²⁾を備えていると判断できる解釈に至るまで協議を行った。

1. 藤田（2002）の情報分析枠による分析・解釈

（1）時間の流れ：過去，現在，未来が語られているか

Sさんのプロトコルから、次のような時間性の特徴が抽出できる。①約半数³⁾が現在のみで、時間の流れのない物語になっている。②絵の状況を説明するだけか、絵から受けた印象を述べているだけのものも多く、厳密に言えば現在を語っているとも言い切れない物語がある（図版11，図版12BG，図版16）。③過去について言及した図版は図版2，3BM，10，18GFの4枚で、未来に比べて過去への言及は少ない。加えてその内容は、『困った状況だったような感じ』（図版2）や『今までずっと幸せではなくて』（図版18GF）のように、具体性に欠けるものである。④未来について言及した図版⁴⁾では、『この先』という言葉で言及しているものの、『この先もがんばっていこう』（図版2）や『この先も悪い関係の二人じゃないと思う』（図版4）といったように抽象的な表現で述べられることが多い。また、現在から未来に至るプロセスが省略されているため、時間的な流れが感じられない。

以上の分析から、Sさんは時間的展望が現在指向的で、時間的広がりも短く、未来に対して無関心であるか関心を向ける余裕がない可能性が示唆される。

（2）テーマ，結末

Sさんの物語は、図版8BMの『殺すか否かの葛藤』以外は明確なテーマを持たない。Murray,H.A.（1938）によると、テーマとは、主人公の内部にある欲求と、その個体に外部環境から作用してくる圧力の力学的構造を包括的で焦点を絞って表現したものであるが、Sさんの物語は欲求や圧力が生じていない。また、生じたとしても両者が結合することなく終わっている（例えば図版4）。結合関係や力学的構造が無ければ、物語の展開も生まれず、

必然的に結末も生じない。結末があったとしても、図版 3BM や図版 4 のように『現状の継続』という漠然としたものにならざるを得ない。また、TAT で何が見られるのかについては諸説あるが、現実への「かかわり方」(山本, 1992) が表れているというのが共通見解である。このことを踏まえると、S さんは外界に対して葛藤が生じない形での関わり方をしてきたことが推測される。

2. ナラティブの視点による分析・解釈

藤田 (2002) の情報分析枠による分析・解釈からは、S さんの時間的展望が現在指向的で、時間的広がりも短く、未来に対して無関心であるか関心を向ける余裕がないこと、人との関わり方では葛藤が生じない形で関わりやすいことが示された。被検者の時間的展望が投射されるとする解釈仮説と異なるナラティブの視点は、S さんの物語にどのような解釈可能性を提供できるのだろうか。以下に考察をすすめる。

(1) 並列的な語り—パラディグマティック優位な物語—

時間的流れがないとは、出来事と出来事が繋がっていないことを意味する。図版 4 (図 5) の『奥さんが旦那さんのことを気にかけてる』『旦那さんはすごく怖い』『奥さんは旦那さんに興味がある』『奥さんは旦那さんを嫌いではない』『二人は仲良くはない』『二人は悪い関係ではない』という語りのように、S さんのプロトコルは、図版に描かれている一つひとつの刺激に言及したり、印象を述べることはできているが、全体を構造化して物語としてまとめることはできていない。場面を読もうとしているが、場面構成になっていないのである。TAT は、図版を前にして浮かんできた様々なイメージから、特定のものを選択・配列して言葉にしていくプロセスである。S さんの内的世界では、このプロセスがどのように展開しているのだろうか。



図5 図版4の略画

大山（2004）は、イメージと言語の関係について考察する際、シンタグマティック（syntagmatic；統辞的）とパラディグマティック（paradigmatic；連辞的）という、ソシユール言語学の対比概念が助けになると述べている。例えば、『鳥が空を飛ぶ』という文では、『鳥』『空』『飛ぶ』という単語は、因果関係や論理関係を基本とする文法的制約にもとづいて連結されている。このような制約の仕方はシンタグマティックと呼ばれる。一方で別の制約もある。『鳥が空を飛ぶ』という一文では、『鳥』を『飛行機』や『とんぼ』に置き換えたり、『飛ぶ』を『飛翔する』に置き換えたりしても、文の持つ意味は失われない。すなわち、『鳥が空を飛ぶ』という文は、入れ替え可能な一群の単語の中から、特定の単語を選択して構成されているのである。この『鳥』『飛行機』『とんぼ』といった選択可能・置換可能な概念間関係をパラディグマティックと呼ぶ（両概念の特徴を表18に示す）。イメージを言葉にしていくプロセスとは、イメージをシンタグマティックとパラディグマティック両方の過程によって、言語という特定の形式に構造化していく作業なのである。ただし、検査によってプロセスの質は異なってくる。ロールシャッハ・テストの場合は、図版のどこに反応してもよく、全体としての統合性もさほど要求されないので、その語りはパラディグマティックな過程が優位になる。それに対してTATは、一つの物語を完成させなければならない。つまり全体の統合性が要求され、シンタグマティックな過程が優位になるのである。ちなみに、シンタグマティック概念は、出来事の時間的構造化という物語の特徴に即して言えば、構造化される前の出来事一つひとつの構造を示している。Sさんの物語は、『奥さんが旦那さんのことを気にかけてる』『奥さんは旦那さんに興味がある』『奥

さんは旦那さんを嫌いではない』のように、出来事（イメージと言い換えてもよい）一つひとつを語ることはできているが、それらが並列で置かれており、全体として一つの構造を形成していない。これが、時間的流れのない物語の構造である。選択可能・置換可能な出来事は述べられているが、選択・配列には至っていないという意味で、Sさんの物語はパラディグマティック優位であると言える。

表18 シンタグマティックとパラディグマティック（大山，2004）

統辞的 (シンタグマティック) 関係	鳥，空，飛ぶの関係	論理的，因果的な制約で リニアに結合
連辞的 (パラディグマティック) 関係	鳥，飛行機，とんぼの関係	類縁的關係，共通の性質をもつ ゆるやかな関係

（2）統合的形象化が不完全な物語

森岡（2002）によると、パラディグマティック優位な物語は、Ricoeur,P. (1984)（『時間と物語』第2巻）の述べる統合的形象化（configuration）が困難な例として理解することができる。形象化とは、『思想や感情など観念として存在するものを、何らかの手段で形にして表し出すこと』（大辞林 第三版）を意味するが、統合的形象化は、「目的・動機・行動主体・手段・他者との相互作用・予想外の結果などといった異質な要因」（萩原，2006）を、一つのまとまりをもった話へと組立てる働きを指す。つまり、セルフ・ナラティブにおいて頭の中に複数浮かんでいる行為や出来事を語り手の視点から統合し、聴き手に特定の意味を伝えるために必要な要素のみを選択・強調し、それ以外を排除・省略することによって、時間的順序や因果的連関、プロットを備えた物語をつくり出す行為を意味する。このとき、頭の中に浮かんでいる行為や出来事一つひとつは、語り手が実際に体験したエピソードであり、これは時系列的な次元と呼ばれる。一方で、それらのエピソードから新しい意味を持ったプロットをつくり出す次元は非時系列的な次元と呼ばれ、二つの次元の配合が統合的形象化を成立させる（森岡，2002）。

Sさんの図版4の語りにおいて、『奥さんが旦那さんのことを気にかけてる』『旦那さんはすごく怖い』『奥さんは旦那さんに興味がある』『奥さんは旦那さんを嫌いではない』『二人は仲良くはない』『二人は悪い関係ではない』とエピソードが並置されているのは、時系列

的な次元である。例えばここから、エピソードを取捨選択したりまとめたりして、『奥さんは旦那さんを愛しているけど、旦那さんは愛情が冷めてしまっている。それである朝奥さんに不満を言われて、旦那さんはうんざりして怖い形相になっている』と一つのまとまりある話をつくり出すならば、これは非時系列的な次元である。Sさんの場合は後者の次元がうまく機能していない、統合的形象化が不完全な物語と捉えることができる。

ここで、物語理解においてこの概念が強調しているのは、物語は筋（プロットやストーリー）や内容だけでなく、筋立てる行為によって成立している点である。TATの分析はどうしてもプロトコルの内容がメインとなるため、文字化された静的な情報をもとに記号化・数量化したり、プロットやストーリーを読み取る分析に終始しやすい。しかし、出来事と出来事が繋がっていないSさんのような物語の場合には、とりわけ行為面への注目が必要である。なぜ繋がっていないのか、どの次元で困難が生じているのか、それはどのような困難なのかといった、被検者がイメージを言葉にしていく動的なプロセスに目を向け、その時の被検者の語り方なども想起しながら検査者がプロセスを辿り直していく作業を分析に加えるならば、被検者のパーソナリティ解釈に新たな側面が見えてくる。Sさんの場合は、一つひとつの体験を語ることはできるし、体験に伴う感情を感じとる力も持っている。しかし、それぞれの体験が内的世界にばらばらに並置されていて、自分の基準で意味づけたり、まとめ上げたりすることが現時点ではできていない。TATの場合、構造化には因果律というB系列（物理的な性格をもった時間）の基準が大きく影響するが、セルフ・ナラティブの場合は、人生の時間的展望、つまり自分がどのような人生を生きてきたのか、またこれから生きていきたいと願っているかというA系列（心理的な性格をもった時間）の基準が重要になる。従って、Sさんは独特なA系列の時間を生きている可能性が推測される（時間的展望が現在指向的かどうかは、今の段階では分からない）。また、体験同士を繋いでしまうと心が破綻してしまうような、構造化を妨げる特殊な体験をしている可能性も考えられる。

（3）聴き手による再形象化

さらに統合的形象化の概念は、物語理解にもう一つの可能性を提供する。それは、統合的形象化の成立条件に聴き手の存在が入っていることと関係している。語り手によってセルフ・ナラティブが語られるとき、そこには聴き手に伝えたい何らかの意味が内在されている。しかし、物語が「何らかの意味を内在化し、そこで独自の世界を繰り広げているのだとしても、それらはいまだ可能性の段階にとどまっている」（萩原、2006）。その意味

が意味として理解され、物語の結末が納得のいくものとして確定されるためには、「筋をたどるという読みの行為を待たなければならない」（萩原，2006）のである。我々が友人に何かの体験談を語る際、語る相手によって、或いは相手のその時の気分や体調によって意味の受け取り方は様々で、場合によっては誤解されることもあるという経験則を思い起こせば、物語理解が聴き手の再形象化（re-configuration）によって初めて具体化するという指摘は理解に難くない。

ただし、心理臨床の場における Cl.の語りの理解には、Th.側の解釈枠組みにあてはめる姿勢だけでは不十分である。もちろん、「聴くプロセスの中で素材の不連続な断片，ばらばらの事実を繋ぎ合わせる作業」（森岡，2002）は大切であるし、その作業には Th.側の解釈枠組みが必要となるが、例えば S さんのような場合には「出来事に聞き手の側のプロットを与えるのではなく、むしろ出来事と出来事的首尾一貫しないことを尊重し、保存しつつ、その非一貫性を逆に治療的に活かす」（森岡，2002）姿勢も等しく大切になってくる。土井（1977）が、面接における聴き方のポイントとして、相手の話から物語を作り上げることを目標にするのではなく、話の中から出来事と出来事との繋がらない、イメージの浮かばない部分を見つけ、そこを丹念に掘り起こすことを挙げているように、物語の非一貫性を面接の中で話し合い、その妥当性を確認していくことで物語は書き換えられる可能性に開かれるのである。

（4）今後『物語』になる可能性を秘めた語り

ここまで、S さんの時間的流れのない物語をもとにして、A 系列の時間の独自性や体験の特殊性といった解釈視点と、出来事が繋がらない部分を扱っていくという面接の新たな展開可能性について考察した。最後に、語りの発達的变化にも触れておきたい。大山（2004）が、統合された物語は発達的な変化に伴って作れるようになると述べているように、物語をつくるにはある一定の成長を経なければならない。この視点には、Sullivan,H.S. (1953) のプロトタクシス (prototaxic), パラタクシス (parataxic), シンタクシス (syntaxic) という3つの体験様式の発達理論が参考になる。S さんのパラディグマティック優位な物語は、発達的にはパラタクシス（同時併存）という体験の一様式と対応する。パラタクシス的体験様式では、「さまざまな体験が互いに連れ立って起こると感じられはするが、何らかの秩序にしたがって結合しているという認識が欠けている。反省や比較検討は行われぬ。一步一步段階を追って思考が一つの方向性をもってすすむことはない。体験はその時かぎり

の、関係のないさまざまな存在状態の束となっている状態」(森岡, 2002)である。人は、言語を使って他者と体験を共有することで、パラタクシスの体験様式の段階から「合意によって確認された」(Sullivan, H.S., 1953)意味を獲得するシンタクシスの体験様式の段階へと成長していく。この発達理論に照らすならば、Sさんの物語は、シンタクシスの体験様式の段階に至る前の『発達途上の物語』『物語になる以前の語り』として理解することができる。TAT 課題で時間的流れのない物語が語られる場合、通常は時間的展望に乏しいといった否定的な解釈がなされることが多い。もちろん重要なパーソナリティ特徴ではあるが、ナラティブの視点はここに、『今後物語になる可能性を秘めている』という肯定的・発展的な解釈も付与することができると考えられる。Sさんの場合は、心理療法によってシンタクシスの体験様式に変容し得るという可能性である。

本研究において考察してきた、独特な A 系列の時間を生きている可能性、構造化を妨げるような体験をしている可能性、心理療法において今後物語になる可能性を秘めている、というナラティブの視点からの解釈は、従来の分析・解釈のように、断定的に言語化できるものではない。あくまで可能性の一つであり、それは今後の心理療法の中で確かめられてこそ意味を持つ。言い換えれば、ナラティブの視点による解釈は、やはり治療的利用の方向に適しているし、治療的文脈に位置づけてこそ効果を発揮することができると言えよう。それは、被検者のパーソナリティ特徴だけでなく、出来事と出来事との繋がらない部分を丹念に掘り起こして面接の中で話し合っていく、という面接の展開可能性からも示唆されるものである。

<注>

- 1) プライバシー保護の観点から、内容が損なわれない程度に個人情報の変更を行っている。
- 2) Bruner, J. S. (1986) は、人間科学に二つのモードを分けた。具体的事象に対して一般的な法則性、因果関係を把握する論理実証モードに対して、もう一つのモードとしてナラティブのモードがあることを提示した。このモードは、出来事の体験に意味を与えることが目標であり、具体的な出来事と出来事をストーリーによって繋ぎ、筋道を立てる。ブルーナーは、ナラティブの「迫真性 (verisimilitude)」を与える根拠は実践の中で確かめられると述べている。心理臨床場面では、臨床仮説はそのつど現場の中で確かめ、必要ならば修正していくのが常であり、ナラティブの視点は心理臨床の場でこそ活かせる。すなわち、臨床では「迫真性」が共有されることが重要であって、論理実証的妥当

性がすべてではない。

これを氏原（2005）は、「臨床的妥当性」という言葉で説明している。彼は、ロールシヤッハ・テストが実際の臨床に役立つためには、「単に推計学的な妥当性を満たしているだけでは不十分」であり、「治療のプロセスが大体見通した通りに進んだか」という「臨床的（主観的）妥当性」によって決まると述べている。

以上から、本論での分析・解釈の妥当性は、臨床的な有効性、迫真性という意味での「臨床的妥当性」に拠ることとする。

³⁾ 5, 7GF, 8GF, 8BM, 9GF, 11, 14, 19, 12BG, 16 の 10 枚。

⁴⁾ 1, 2, 3BM, 4, 6GF, 10, 12F, 13MF, 15, 17GF, 18GF, 20 の 12 枚。

第5部 臨床研究3—内言への着目—

第8章 内言の意味に着目した時間性の検討（研究5）

第1節 問題・目的

1. 対話の重要性—E系列の時間—

前章では、「時間的経過も劇的なところも含んでいない」（鈴木，2002a）流れのない物語に対して、出来事と出来事が繋がっていない点に着目し、ナラティブの視点からいかなる解釈ができるのかという可能性を検討した。その過程で浮き彫りになったのは、語り手の筋立てる行為によって語られた意味を、聴き手が受け取っていく再形象化によって物語が成立するという、物語の動的かつ相互作用的な側面である。これは、物語る行為にはE系列の時間が流れていること、E系列の時間が治療的効果に関与していることを指し示している。E系列の時間については、第2部49頁において概説したが、ここでもう一度取り上げたい。野村（2012）によると、この時間は「対話的な性格をもった時間」「インタラクティブ（相互作用的）に創られる時間」であり、語り手と聴き手の対話が成立している時、両者は必ずこの時間を刻んでいる。49頁のコンサートの例えは、語り手が語る内容にE系列も含まれることを示していたが、その語りを語っている場（語り手と聴き手がいる空間）にE系列の時間が流れていることの方を野村は強調する（ただしこれは、その場に『E系列の時間が実在している』という意味ではなく、『対話体験をその場で感じ取ったり、後から振り返ったり、誰かに語ったりする際、そこで使用される時間についての言葉には、必ずE系列が含まれている』という意味であることを注意したい）。

TATの〈物語性・主観性〉を重視する立場は、切断することのできない物語の流れを検査者が読み、検査者の主観や直感も根拠にしながら分析・解釈を行い、その結果を心理療法の場で活かしていくことでTATは治療的に用いることができるし、そのような使用にこそ適していると指摘する。心理療法への活かし方については、下山（1990）のTh.-Cl.関係の促進材料、草島（2005）のセルフ・ナラティブを語りやすくする契機、大山（2004）、海本（2005）のセルフ・ナラティブにおけるプロットの読み取りなど様々であるが、総じて物語の構造と物語る行為の機能に注目し、そこに治療的効果を見出していると言うことができる。これを時間性の観点から言い換えるならば、TATがE系列の時間を有していることが治療的効果をもたらすのである。この点に関しては、第6部の総合的考察で改めて検討する。

2. 発話以前の次元への接近

本論文は、TATの多層的な時間の中でも、プロトコルに示されるB系列(過去・現在・未来や、原因・結果という直線的な軸)とC系列(プロット)の時間を中心的に扱うものである。前章では、流れがなく、意味を読み取ることが困難な物語に対する解釈可能性を検討してきた。では、流れのある物語の場合は、どの部分に着目し、どのように意味を読み取っていけばいいのだろうか。具体的な分析視点について、先行研究では藤本(2006)が試論を行っているのみである。そこで本章では、語り手の構成する意味連関が物語のプロットに反映されるとする大山(2004)、海本(2005)の論に立脚し、プロットから語り手の構成する意味連関を読み取っていく際の分析視点について、探索的に検討を行うことを目的とする。

大山(2004)によると、プロットは「その語り手の視点から出来事の中に意味的な関連づけが行なわれ提示されるもの」で、ストーリーのように必ずしもB系列の時間に従うわけではなく、「どのような順序でどのような意味連関で語られるかに、語り手が構成している意味世界が反映」される。特にTATの物語は、人生の決定的な場面における決断や葛藤を思わせる絵をもとに作るため、「人生の決定的な場面においてその被検者が図らずも自ら毎回選びとり、自らが構成してしまうパターンが、この(TATの)物語構成にも表われて」しまうと言う。そして、数枚の図版だけでなく、20枚全てを実施することにより、語り手独自のプロットが繰り返される臨床的事実を指摘している。このとき、語り手の構成する意味連関は、イメージをシンタグマティックとパラディグマティック両方の過程によって、言語という特定の形式に構造化していく作業に立ち現れると考えられる。時系列的な次元と、非時系列的な次元の配合によって統合的形象化を成立させる過程に顕現すると言ってもいい。大切なのは、これらはすべて発話前の段階であり、内的世界で展開されているということである。被検者の内的世界で図版を通して喚起されたイメージが、自身の構成する意味連関に沿って選択・配列され、物語という形で言語化されて検査者に伝えられる。検査者は、語られた物語から、被検者のイメージを間接的に推測しなければならない。つまり検査者は、語られた言葉のみを分析するのではなく、それを手がかりにして、言葉が発せられる以前の次元にまで接近する必要があるのである。

3. 言葉の外面的な様相的側面・内面的な意味的側面

発話以前の次元である内的世界のイメージや意味連関については、中村(2014)が詳し

い。中村（2014）は、Vygotsky 心理学理論に基づいて、言語的思考の分析単位としての意味論を展開している。以下に、中村を引用しながら内的世界のイメージや意味連関についての考察をすすめる。まず、意味とは「言葉の不可分な成分」であり、言語現象そのものに他ならない。と同時に、「言葉の意味は一般化であり、あらゆる一般化は思考の最も固かなはたらきであるから、言葉の意味は思考現象そのもの」でもある。つまり、「言葉の意味は思考と言葉の統一体」であり、言語現象でも思考現象でもあるのである。

言語現象としての言葉は、「外面的な様相的側面」と「内面的な意味的側面」の二つの側面を有している。TAT 図版 1 における『少年がバイオリンを前にして悩んでいます』という発話を例にとると、文法的には『少年』が主語で、『バイオリンを前にして』は修飾語、『悩んでいます』が述語である。この発話の『バイオリン』が主語だと言う人がいないように、文法規則上の言葉同士の連関は覆らない。これが、言葉の外面的な様相的側面での関係である。ところが、「心理的な内面的な意味では、この句の主語と述語の関係は文法的なそれと一致しているとは限らない」。どういうことかと言うと、図版 1 を前にしたとき、我々がまず意識するのは、大抵は『少年』か『悩んでいる状態』である。真っ先に『少年』に注目する人もいれば、『悩んでいる状態』に引きつけられる人もいる。この時、前者の人の内的世界では、『少年がいるなあ。少年が…何をしているんだろう』と思考し、『少年がバイオリンを前にして悩んでいます』という発話に至る。この場合は、心理的にも『少年』が主語で、『悩んでいます』が述語となり、外面的な文法と一致する。しかし、後者の人の内的世界では、『悩んでいるなあ。悩んでいるのは…誰だろう』と思考し、『悩んでいるのは少年だ』と展開する。この場合は、『少年がバイオリンを前にして悩んでいます』と発話していても、心理的には『悩んでいる』が主語で、『少年』が述語になっているので、言葉の外面的な様相的側面と、心理的な意味的側面とが一致していないのである。このように、言葉というものは、「文法的な統語の主語・述語関係に規定された字義通りの外面的な意味とは相対的に独立に、意識の中では、心理的な文脈に規定された意味の上での独自の主語・述語関係が成立し、存在している」のである。これは、言語現象としての言葉の意味を考えた際に、実際に発話された言葉の意味と、内的世界で思考される言葉の意味の二層に分かれるということである。このとき、後者は考えたり思ったりしている意識の内容そのものを構成しているので、思考現象としての言葉の意味となる。

4. 内言—内面的な意味の世界—

思考現象としての言葉、すなわち「内面化された言葉、声に出されない、頭の中で展開される言葉」(中村, 2014) は内言 (inner speech) と呼ばれる。内的世界の思考や感情は、すべて内言という形式で存在している。そこでは、言葉の外面的な様相的側面である音声がゼロになり、現実世界では絶大な効力をもっている文法規則もその力を失う (我々が心の中で何かを思ったり考えたりしている時、文法規則に則って連関されている言葉やイメージがどれだけあるだろうか)。また、言語的な意味だけでなく、感覚的な意味 (カレーの味や救急車の音、雪の降る日の寒さ、香水の香りなど) も含まれる。内言では、内面的な意味的側面としての言葉の意味だけが前面に立ち現れるのである (以下、内言の意味と表記する)。内言の意味には、「状況や文脈に規定された、そこでの主体の経験を通じた知的な理解と感情的な態度が映し出されている。」例えば、実際にバイオリンを見たことも弾いたこともない人の内言では、図版 1 に描かれたバイオリンは、『弦を弓で振動させることによって音を出す弦楽器の一つ』という辞書的な意味 (外面的な様相的側面としての意味) しか持たないだろう。しかし、音大でバイオリンを専攻し、つい先日実技試験で単位を落とした人の内言では、『試験に落ちたショック』や『試験官への腹立たしさ』、『自信喪失』、『弦を持つ時の右手の感覚』、『課題曲の音色』といった個人的な意味が連関して生起している。このように、内言の意味は、一人ひとり異なる状況や文脈の中で、当人の意識の中でもっぱら主観化された意味によって構成されている。さらにそれらの意味は、(外面的な様相的側面の意味のように) 単語を単位として分節化されたり、文法規則に則って連関しているわけではなく、『意味』を単位として分節化され、主観的な価値観や経験則に則って『意味』同士が自由に結合したり、合同したりしている。そのような動的な展開によって、内的世界には『意味』の「巨大な塊」が構成されているのである。

以上のような考察を踏まえると、ナラティブの視点が重視するプロット概念を、より正確に理解することができる。まず、TAT において図版を通して喚起されたイメージを言葉にしていく行為は、図版を通して喚起された内言の意味 (パラディグマティック優位) を、外面的な様相的側面としての意味も有する言葉 (シンタグマティック優位) にして発話していく行為を指す。さらに、「どのような順序でどのような意味連関で語られるかに、語り手が構成している意味世界が反映」されるという大山 (2004) の言葉の、『意味連関』と『意味世界』という二つの用語が明確に区別できる。『意味世界』とは、内的世界における意味の巨大な塊を指し、『意味連関』とは、その塊を構成する個々の単位としての意味同士が結

合し、合同している網目状（並置的な連関で、ツリー状と対比される）のシステムを指すのである。音大生の例で言えば、意味世界における『バイオリン』という言葉の辞書的な意味の周りには、『試験に落ちたショック』『試験官への腹立たしさ』『自信喪失』『弦を持つ時の右手の感覚』『課題曲の音色』などの意味が網目状に連関している。そして、図版1の物語として、『少年はバイオリンを前にして悩んでいます。なぜなら、通っているバイオリン教室の進級テストに落ちてしまったからです。自分には才能がないんじゃないかと自信を失い、バイオリンを辞めようか悩んでいます。この後は、しばらく落ち込んだまま過ごすでしょう』と語ったとすれば、連関する意味同士の中で最も中心的な意味は『自信喪失』であり、その周りに他の意味が配置されている。ただし、これは内的世界のパラダイグマティックな過程においてであり、物語として発話する際には、シンタグマティックな過程においてB系列の時間（原因・結果という直線的な軸）も参照して一つの話に統合する作業を行った上で、上記の物語として発話されることになる。

ここで重要なのは、語り手の構成する意味連関が反映されたプロット（C系列の時間）に沿ってTATの物語が語られたとしても、「ことばは一つの口からは線条的、継起的に発さねばならない制約がある」（森岡，2002）ために、検者がプロットを読もうとする際にどうしても直線的で方向性を持ったB系列の時間を想像してしまうことである。しかし本質的には、内的な意味世界において語り手が構成している意味連関とは、一つひとつが平面的に並置されている網目状のシステムであり、「非線条的な性質」（森岡，2002）をもつものである。従って、分析・解釈の際に発話以前の次元にまで接近するとは、物語のプロットを読み取ると共に、それを手がかりにして、平面的に並置されている網目状の意味連関を読んでいくことに他ならないのである。

5. ドミナントな意味

内的世界には一つひとつの意味が平面的に並置されていると言っても、そこには中心的か、周辺的かという違いは存在する。我々は何か一つの出来事を体験した際に様々な意味を感じ取っているが、それら全てに同じ重みづけがなされることはあり得ず、必ず中心的な意味と周辺的な意味という、言わば『図』と『地』が存在する。音大生の例で言えば『自信喪失』が中心的な意味であるし、42頁の(e)の語りに戻るならば、『花瓶が割れた時の大きな音』『怒られる恐怖』『体のこわばり』『安心と深い感動』といった様々な意味の連関の中で、『安心と深い感動』が男の子にとっての中心的な意味である。男の子は、この中心

的な意味を父親に伝えたかったために、出来事が起こった時系列の順序で語るより、それとは逆行する順序であっても、中心的な意味から語ったのである（もともと、誰もが中心的な意味から語り始めるわけではないし、最後までそれを語らない人もいる。また、中心的な意味そのものを自覚していない人もいる。これが、物語のプロットから語り手の構成する意味連関を読み取る難しさであろう）。本論文では、この中心的な意味を『ドミナント（dominant；優勢）な意味』と呼ぶこととし、語り手の構成する意味連関を読み取る分析視点を検討するにあたっての手がかりとする。

なお、本章の目的に照らすならば、TATのプロットから読み取った語り手の構成する意味連関と、セルフ・ナラティブにおける意味連関との対応も検討しなければならない。そのため、今回はTATプロトコルだけでなく、Cl.の臨床像や面接経過といった臨床情報も素材として扱うこととする。また、本論文は＜物語性・主観性＞を重視し、TATを治療的に利用する方向を目指していることから、筆者が検査者と心理療法担当Th.の両方の立場を兼ねていた事例を取り上げる。

第2節 方法

1. **被検者**：Mさん（仮名、40歳代男性）。Mさんは、『職場の人間関係の悩み』を主訴に、当時筆者が勤務していたI市内のカウンセリング機関に来談した。面接の中盤で、草島（2005）の指摘するセルフ・ナラティブを語りやすくする契機を生み出す目的と、Mさんの人との関わり方の特徴を知る目的で、筆者からMさんにTATを受けてみないかと勧めた。結果をその後の面接で取り上げ、共に考える治療的意義を重視して、検査は筆者自身が担当した（詳細は、第3節の事例の概要で述べる）。
2. **実施時期**：全17回（J年12月～J+2年3月）の面接中10回目に実施した。
3. **実施場所**：面接場所と同じであるI市内のカウンセリング機関にて実施した。
4. **心理検査**：Harvard版TAT図版のうち、16図版（白紙）を含む21枚を実施した（1, 2, 3BM, 4, 5, 6BM, 7BM, 8BM, 9BM, 10, 11, 12M, 13MF, 14, 15, 17BM, 18BM, 19, 20, 12BG, 16）。図版選定と提示順序は、男性被検者に20枚以上を使用した鈴木（1997）に従った。
5. **調査用具**：TAT図版21枚、記録用紙、ICレコーダー、筆記用具を用いた。
6. **施行の手続き**：まず、TAT施行に関する概要を口頭で説明し、課題への緊張緩和をある程度はかった後に、TATを施行した。教示は、「これから1枚ずつ絵をお渡しします。

その絵を見て簡単なお話をつくってください。その絵がどういう状況で、その前にどう
いうことがあり、これからどういう風になっていくかということ、1つの簡単なお話に
して私に話してください。お話は長くても短くても結構ですし、正しいお話や間違った
お話というものはありませんので、自由に気楽に話してください。絵は全部で21枚あり
ます」であった。検査終了後、体験の振り返りと感想の共有を行った。検査内容の記録
は、被検者の承諾を得た上でICレコーダーによって録音した。実施時間は1時間10分
程度であった。

第3節 結果・考察

1. MさんのTATプロトコル

MさんのTATプロトコルと、途中で交わされた会話を表19に示す。実施中の非言語的
側面の情報として、Mさんは筆者のTATの勧めに対して、「自分が変わるためのヒントが
得られるかもしれないので、ぜひ受けてみたい」と快諾し、検査には非常に意欲的であった。
語り口は、面接中のセルフ・ナラティブと同じく理性的で、感情を抑えた淡々とした口調
であった。また、教示をしっかりと理解し、検査に意欲的だったMさんであるが、図版5
からは疲労が見え始めると共に、うっすらと涙を浮かべる場面が何度かあるなど、感情が
揺さぶられている様子が窺えた。休憩を2回挟みながら実施したが、図版17BM以降は姿
勢を変えたり、椅子に座り直したりと動きが多くなり、疲労の色が濃い様子であった。

表19 MさんのTATプロトコル

図版	TATプロトコル
1 (24") えー、バイオリンが弾けなくて、上手に弾くことができずに悩んでいる。自分はこれでバイオリン弾きが向いているかどうか、本当に上達するのかわかっていうことを悩んでいる。演奏して、ちょっと怒られてってことがずーっと続いてまして、で、現在悩んで。未来については、いろいろ悪戦苦闘ありながらも、それなりに認めてもらえるバイオリン弾きになったと。こんな感じでいいですか。(1' 17")
2 (31") パッと思いついたものでいいですか？<いいですよ>...まあちょっと、女性は男性に恋をしていて...男性とまあ話がしたいとか色々と思っているんですが、男性のお母さんがいるんで、ちょっとまあ躊躇っている様子です。えーっと、ずっと気になってて遠いところから見てるだけの状態で、なかなかきっかけがないです。未来...うーん、最終的には結ばれるんですが、ふとしたきっかけで話ができるようになって結ばれた...ぐらいでいいですか？ごめんなさい、それぐらいしか。(1' 38")
3BM	... (9") えー、泣いて泣いて泣き疲れて、もうそのまま眠りこんでしまった状態です。仕事がうまくいくかなと思ってたんですが、まあ色んな人から心ないことも含めて言われて、結構一大イベントだったんですけど、それをうまくいかず、人格を否定されるようなことまで言われて、外ではうまく普通に振舞ってたんですが、家帰ってドッと感情が込み上げてきて、泣いて泣き疲れて眠ってしまった、です。まあでも、ひとしきりしたらまた次の一歩へ歩み出すしかないということで...そのまま進んでいながら成長していく。終わりです(笑) (1' 28")
会話	<絵を渡すペースは早くないですか？>はい。基準が分からないので、もっとお話を作らないといけないのかもしれないんですけど。<思いついた感じでいいですよ。>はい。(ホッとした様子)
4 (18") せがまれてるんですが、まあそれに対して応えたくないというか、そんな感じです。何でしょう、何をせがまれているか...年は離れているんで娘と父親ですかね。一度自分の気に入った人に会って欲しいということでせがんでるんですが、その男の人に対してはいい噂を聞かないっていうのもあって、拒んできたんですが、いよいよ拒めないところまでいって、でもそれでも拒もうとしてこういう感じになると。ただまあ、一晩置いて、母親とも話をして、最終的には一度会うことになった。こんな感じでいいですか(笑) (1' 27")
5	... (8") えーと、ドアを開けたら花瓶が置いてあった。この部屋には誰もいないはずだったんですが、明かりもついていて花も活けてあったんで、人の気配と言うか、誰かが帰ってきてしばらく経つんだなあ。...すみません、もう思い浮かばないです。(1' 08")
6BM (21") 母親と息子の関係で...何でしょう、まあ母親としては息子を戦争に取られたくないということだったんですが、息子が志願して戦地へ赴くことになって、いよいよ最後の時なんですが、息子も母親も言葉を交わせずいると。...で結局、まああまり言葉を交わせないまま家を出てしまうと。やっぱり母親としては息子は死んでしまうかもしれないので、周りの色んな人も戦場で亡くなってるっていうのを聞いてるので、ちょっとショックと言いますか、受け入れることができずに、きちんと息子を見送ることもできないまま別れを迎えるという、ことでいいですか。(2' 11")
7BM	... (16") 父親と息子の関係で、いや.....なんか難しいですね(笑)。なんか答えを探してしまいますね。作ったらいくらでも言えるんですが、より近いものを言おうとしたらあれは違う、これは違うって、結局何も(笑)<正解はないので、思いついた感じでいいですよ>いいですか。...なんか、悪だくみって感じがしますね。表情からいいような感じが受けられないんで、年輩の人がいろいろ指図をして悪知恵を働いてると言いますか、「まあこれでいこう」というか。どんな悪いことなんか、そこまでは想像はできないですけど、そういうふうに感じました(笑)。よろしいでしょうか。(2' 07")
8BM (19") 手術をしてる風景で、少年は何を思ったか...なんか、絵的にこれは、昔の、西洋の感じがします。えー、自分は、少年は、将来は医者になって多くの人を救いたい。自分の腕で多くの人を救いたいと、できるだけ最新の医療を勉強して、苦痛なく手術ができる医者になりたいというふうにいるところ。はい、すいません。(1' 19")

9BM	... (12") 疲れて集団で寝ているところですね。午前からずっと農作業をしていて、やけにかき入れ時と言うか大変な時期だったんで、ちょっと昼ごはん食べて、その休憩と言うか、かなり身体が疲れてしまったんで。...と言いながらも不自然ですよね...。ちょっと変えまして、縁起が悪いかもしれませんが、亡くなっている絵かなと思います。人の上に人がこんな感じにいるっていうのは不自然なんで、血の痕も見られたりするんで...亡くなってる人達を見てこの男が驚いてると言いますか。そういう絵かなと思います。(1' 53")
10	... (10") これ終わったら休憩させて貰っていいですか？<はい>...えーっと、まあ子どもが母親のおっぱいを飲んでいる絵です。自分も2歳の息子がいて、母親のおっぱいを飲んでる場面を見るんですが、まあ遊び疲れて、さんざん泣いて、ぐずって、それでおっぱいを飲んで安らいで、そのまま眠りにつこうかなあというところですよ。母親は、年を取ってできた子ということもあって、子どものことがとても愛おしいと言いますか、そういう風に思っている絵です。(59")
休憩	入れなくなってきた。しんどくなってきた。目的があってはっきりしてるテストならいいけど。今週は職場の人のことでストレスがあつてしんどい。そのせいかもしれない。<お疲れのようですよ、ここまでにしましょうか>いや、結果は知りたいので最後までやる。<じゃあ、好きな時に休憩をとりますから仰ってくださいね>
11	これはどう見たらいいんですか？<どう見て下さってもいいですよ>(図版をくるくる回す)..... (1' 32") 岩場に虫がいるとかですかね(笑)。それぐらいしか分からないです。童話で、虫が鶴みたいな首の長い鳥みたいな生き物と対話をしているところですかね。自分の現状を変えたいと言いますか、『どうして俺はこうなんだ!』みたいなことに対して、この人はいろいろと問いかけをしていて、最終的には道は開けるんですが。そういう一場面かなと思いました。(2' 34")
12M (43") 安らかに眠っているように見えてるんですが、ちょっともう治らない病にかかってしまって、ちょっと東洋医学を知っているおじいさんが、気力と言うんですか、そういうことで治そうとしている場面です。ずっと長いこと、2時間くらいぶつぶつ言いながら唱えて。でも2日前からずっと眠りっぱなしなんで、ずっと気を与えていると言いますか、そういう場面かなと思います。(1' 53")
13MF (55") 付き合ってる恋人と、衝動的にカッとなって殺めてしまって、で、男の方は激しく「なんてことをしてしまったんだ」ということで激しく悔いてると言いますか。そういった場面です。(1' 24")
14 (1' 01") 屋根裏部屋の窓を開けてる場面かなと思います。.....ちょっと長いこと家を空けていて、仕事の関係か何かでずっと外国に行って、ようやく自分の国に、自分の家に帰ってきて。あっちこっち窓開けて、で屋根裏部屋の窓を開けた時に、懐かしい景色がそこに見えるという場面です。(1' 58")
15 (30") たくさんお墓があって...神父さんがお祈りをしています。.....戦争で多くの人が亡くなって、お祈りしながら『この戦争って一体何だったんだろうか』『本当にやるべきだったんだろうか』『いつまで続くんだろうか』『神よ救いたまえ』と祈ってる場所かなと思います。(1' 51")
休憩	昨日、職場で話せる人と深い話をした。自分は仕事から逃げてるのか、自分のやり方を変えないか、と思っている。そのヒントが欲しいので、最後までテストを受けたい。
17BM (26") そうですね、綱でどンドンどンドン上に登って行って、登って登って、でちょっと一段落というか休憩というか、しているところですかね。...で周りの景色を見たりとかして、一段落したらまた登り続けて行ってっていうことで。登ることは大した作業ではない、この人にとっては全然大した作業ではない。肉体には自信があるし日常もやってることかなっていうところですね。...もともとの仕事は煙突そうじの仕事をしていて、仕事柄こういった肉体を手に入れたと言いますか。そういういったところですよ。すみません、以上です。(2' 03")

18BM	<p>..... (47") 夢を見ていてうなされていて、うなされていて...自分を裏切った人とか、成功するために踏み台にしてきた人から恨みとか呪いとかかけられて、で、もがき苦しんでいる夢を見ているところかなと思います。(1' 28")</p>
19	<p>..... (31") 雪の中で車が走ってるんですが、あまりにも雪が強くてあまり早く進めない。ゆっくりゆっくり進んでいるところかなと思います。あまりにも雪が強くて、車の上におぼけと言うんですかね、おぼけが取り憑いていて...早く進めてた車なんですけども、ひょっとしたらこのおぼけのせいで、まあ雪も降って。この地方の入りにはいけないところに入ってしまった言うんですかね。その時期に入りはいけないところに入ってきてしまって、で、化け物が取り憑いて、予想もしなかったことが。車が遅れたりとか、急に車内が冷え込むですとか、そういったことが起きていると。で、その時車内の人に「この地方では昔こういったことがあって」みたいな話をやって。最終的には車は動き出し、ある場所を抜けたらそのまま動き出して目的地に辿り着いたっていうことで。その地方の話を車内の人達はしていたっていうところかなと思います。(2' 26")</p>
20	<p>..... (28") まあ、あのー、経済成長がずっと続いてて、工場で夜も煙突から大量の煙が吹き出して、ずっと夜中も工場が動いている風景です。...景気が潤って行って人々の暮らしは豊かになってはいるんですが、その裏というか陰で、労働者達が疲弊していくと言いますか。彼らも病んだりとか、大気汚染にさらされたりとか、そういったことが起きて行って、後からどんどん問題になってくるんですが、そういう日本で言ったら昭和40年、50年くらいの光景なんかかなと思います。(1' 43")</p>
12BG	<p>..... (1' 03") 小川の木陰にボートがあって、そこで散歩していて、二人の人影があるんですが、普段は都会にいる男と女なんですけど、ちょっと休日に休養っていうことで自然があるところに出て。で、そこでボートを置いてしばらく散歩に出て、語らっているところです。他愛のない話をしてるところかなと思います。(1' 58")</p>
16	<p>...過去、現在、未来って話を全く無視して喋ってるんですけど構わないですか？<いいですよ>..... (46") なんか、無から始まって最後無に帰って言葉があるんですけど、色んなことを手に入れようと思って頑張ったり、色んなものを獲得して行って、例えば欲しかった物とか地位とか名誉とか、結局手に入れられなかった物とか、叶わなかった夢であったり、叶えられた夢であったり、色んな...お金とか財産とか、っていうふうにごく普通に過ごして行っても、最終的には、亡くなる時には何も持たずに亡くなると言いますか。最終的には、まあちょっと、いろいろ絵があってそこから考えていったんですけど、今何も無いんで、最後には何も無いと言いますか。なんか結局、色んな人が色んなことのために動いたりとか、知恵絞ったり、周りから圧力かけられたり、踊らされたり、また踊ったり、頑張ったりしてても、結局は、例えば手に入れた瞬間何てことなかったりとか、やり方によっては自分の性格に反した事をやったりとか、周りを傷つけたりとか。周りに踊らされてやったことっていうのは、もう別に、「本当はそれは自分が欲しかったの？」っていうものであったりとか。それを得るために自分を変えたりとかしていったんで。そうしたもので結局、数年で誰かの手に渡ってしまったりしたりするんで。そんなんだったら、何て言うんですかね...たぶん自然に自分のやりたい事をやって、周りとの折り合いもたぶんあるんでしょうけど、それはもう最低限の振舞いで過ごして行って、死ぬ時に悔いがないように死ねたらいいかなと思います。どうせ、いろんなもんを手離して死んでいくことになると思うんで。こんな感じでいいでしょうか。(3' 24")</p>

2. 臨床情報

(1) 事例の概要

本事例は、職場の人間関係を主訴に来談した M さんに対して面接を行い、既に終結して数年が経過した事例である。全 17 回 (J 年 12 月～J+2 年 3 月) の面接中 10 回目に TAT を実施した。なお、面接経過及び TAT のアセスメント内容について、定期的にスーパーヴィジョンを受けていた。

【Cl.】 M さん (40 歳代男性)、中堅企業に勤めるサラリーマン。¹⁾

【主訴】 職場の人間関係の悩み。

【家族構成】 妻と子ども 2 人の 4 人家族。

【問題の経緯】 M さんは大学を卒業し、比較的規模の小さい中小企業に 2 社 (それぞれ数年) 勤めた後、J-6 年に給与・待遇面のよい現在の中堅企業に転職した。経済面では安定しているが、職場の人たちの意欲が低く、ほとんどの人が定時で退社する。ほぼ毎日 20 時 21 時まで残業し、休日出勤もしている M さんは、周りの意欲の低さに不満を抱いている。上司からは実績が評価され、他の人の仕事まで任されることもあるため、「なぜ自分ばかりが…」と余計に不満が溜まってしまう。職場では人間関係の横のつながりがなく、相談できるような相手がいない。これまでの会社はチームワークがしっかりしていただけに、どうしても比較してしまう。現在は仕方がないと諦めて他の人と極力関わらないようにしているが、やはり腹が立つストレスが溜まる。J-3 年には、心身症の一つである重篤な身体疾患に罹患し、月 1 回の通院と食事制限を続けている。仕事のストレスに加えて、好きなものが食べられないことが辛く、気分が優れない状態が続いている。そんな時に妻からカウンセリングを勧められ、来談に至った。M さんは、「不安が強い。そのせいで寝てもすぐに目が覚める」と自覚症状を話し、「不安の原因が複数あって絡み合っているので、カウンセリングで整理したい。それに、考え方が固くて物事を受け流せない自分の性格を直したい。そういうことを気軽に話せる相談場所が欲しい」とカウンセリングへの思いを語った。

【臨床像】 身長は 175cm 前後、ややふっくらとした体型。理系大学出身であることも影響してか、非常に理知的で、会社の会議場面のよう感情を抑えて事実のみを淡々と話すのが特徴的な方である。銀縁の眼鏡が、理知的な印象をさらに強めている。

【見立て・方針】 初回面接で筆者は、M さんの感情面が言語化される代わりに身体化している印象を受けた。菅野 (1981) は、心身症者全般に関して、一見安定し情緒の統合性が

良いが、内面的な過度の統制とかかわりの回避、感情閉鎖の傾向があると指摘しており、これらの特徴はMさんにも当てはまった。そこで、対人場面でのアレキシシミックな関わりが主訴と関係しているのではないかとの見立てを行った。方針として、まずは複数ある不安について整理していきながら、面接の場が安心して自分を語れる場となること目指し、長期的にはMさんが心と身体の繋がりを取り戻し、不安や不満といった感情を身体を通してではなく言葉で語れるようになることを目指した。

【面接構造】1回50分の個人面接を行った。面接のペースについては、Mさんはほぼ毎日残業し、休日出勤もしていたため、カウンセリング機関の開室時間に間に合う日程をその都度調整しながら月1回～2回のペースで行った。

(2) 面接経過

Cl.の言葉を「 」, Th.の言葉を< >, その他の言葉を『 』で示す。

【TAT実施まで】(第1回～9回)

初回から9回目までは、前回から今回までの間に起こった職場での出来事を引き合いに、同僚への不満と、仕事がいかに忙しくて手が回っていないかということが語られた。Mさんは、書類作成などPCで行う作業に加えて、社内の他部署との会議、後輩指導、関連会社の担当者との打ち合わせ、プレゼンテーションなど、筆者が聴いていて息が詰まりそうに感じるほどの多忙ぶりであったが、仕事内容や起こった出来事のみを淡々と語る様子が印象的であった。また、6年間同じ部署に属し、異動希望を出そうと思いつつもなかなか出せずにきたこと、診断書を提出して仕事量を減らしてもらおうとも思うが、今抱えている仕事のことを考えるとできないことが度々語られ、不満やストレス過多な状況を変えたいと思いつつも現状維持が続いている状況が窺えた。

4回目では、『頑固で融通がきかない』と同僚によく言われる話から、「自分を変えないといけないと思ってます。でも、これまでの自分を否定したくない。だから今まで見ないようにしてきたんです」と語り、<自分を変えることは、これまでの自分の否定に繋がる?>との投げかけには曖昧に頷くのみであった。5回目では、投票で部署の統括リーダーに選ばれたことを話し、鳴っている電話も取れないほどの忙しさになったとこぼした。「もうどうしようもないと思っています。体は一つだし、できないものはどうやってもできない。責任は上司にありますし。うちの部署は14人いるんですが、統括リーダーも押し付け合いで思いやりがない。それで私がやることになったんだから、周りのせいだと思っています」

と話し、言外に周囲への怒りや不満を感じ取れた。また、リーダーの仕事の全体像が見えない不安に対して、〈前任者に聞いてみては？〉と筆者が投げかけると、『『そのファイル見といてください』と言われるだけだろうから聞く気はないです』と話した。ストレスからどうしても過食してしまうと話し、Mさんは目に見えて太っていった。

しかし9回目では、職場で話せる相手が一人できたことが幾分嬉しそうに語られ、これからはその人と飲みに行く機会を増やそうと思っているとのことだった。面接の最後に、筆者からTATに誘うと、「自分が変わるためのヒントが得られるかもしれないので、ぜひ受けたい」と快諾した。

【TAT実施】(第10回)

実施方法については、第2節で述べた通りである。分析・解釈にあたっては、坪内(1984)、鈴木(1997)、安香・藤田(1997)を参考にしながらも、主には赤塚(2008)の精神分析的枠組みを取り入れた方法に従った。また、〈物語性・主観性〉を重視して、非言語的側面や検査者の主観性も解釈の根拠とした。その結果を表20に示す。

表20 MさんのTATの分析・解釈

	解釈内容	根拠	
パーソナリティの側面	基本的な在りよう	<ul style="list-style-type: none"> ・知性、思考を重視して生きており、感情が未分化な傾向にある。 ・そのぶん感情が揺さぶられやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語的反応（冷静な語り、因果関係を重視した内容）と非言語的反応（疲労が強く、涙ぐむ）のギャップが大きい。
		<ul style="list-style-type: none"> ・葛藤したり悩んだりする状況を避けたり、そのような状況から距離を取って自分を守る傾向にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・葛藤が表現されない。（#7BM, #8BMなど）
		<ul style="list-style-type: none"> ・完璧主義的で強迫的なところがある。 ・自分の決まった捉え方に従えようと適応できるが、それ以外の捉え方ができない。 ・曖昧な状況への耐性が低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・#5で細部に注目したり、#9BM「血の痕」#12BG「人影」という図版にない刺激を確信して語る具象しぼりの傾向。 ・#7BMの、より近いものを探す強迫的な硬さ。 ・「こんな感じでいいですか？」「基準が分からない」など、明確な枠を求める語り。 ・休憩中の「目的があつてははっきりしているテストならいいけど」そうでないものはしんどい、という語り。
	人との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・孤立感、孤独感が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己イメージを表す#3BM, #17BMの内容。
		<ul style="list-style-type: none"> ・他人に対して、攻撃するかされるか、100%頼るか一人で何とかするかという極端な関わりをしやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・#3BM, #18BMの内容。
感情	感情	<ul style="list-style-type: none"> ・攻撃心が非常に強い。 ・そのぶん罪悪感も強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・#8BMで敵意・攻撃性の処理を「絵的にこれは」と客観的に語って回避しているところから、攻撃性の強さが推測される。 ・#13MFで、カッとなるほどの攻撃性が窺える。 ・#15, #18BMでは後悔や罪悪感の念が語られている。
		<ul style="list-style-type: none"> ・病や死に対する不安が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・#6BM, 9BM, 12, 20, 16の、病や死にまつわる語り。
		<ul style="list-style-type: none"> ・性的なことへの拒否感が強い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・セクシャルカードである#4, 10, 13MFの内容。
感情との向き合い方	感情との向き合い方	<ul style="list-style-type: none"> ・防衛機制として、隔離（TATでは解離との判別は困難）、抑圧（否認との判別は困難）、合理化、知性化を用いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・隔離：ストーリーに情緒性を入れず、論理的、説明的、客観的につくる。（#8BMなど） ・抑圧：検査に意欲的でありながらストーリー生産が抑制的である。（#5など） ・合理化：#7BMや#10, 知性化：#19や#20の語り。
		<ul style="list-style-type: none"> ・離人感を感じている可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・#5での情緒表現のなさ。
両親との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・父親に対して拒否感が強い可能性がある。 ・母親に対しては、死にまつわって受け入れられないものを抱えている可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・父親カードである#7BMの語り。 ・母親カードである#6BMの語り。 	

【TAT 実施以降】（第 11 回～17 回）

11 回目では、「今日は親のことを話せたらと思います」と M さんから切り出し、初めて両親の話題を口にした。母親は M さんが 20 代後半の時に末期ガンで亡くなったこと、その時は 2 社目に転職するか悩んで苦しい時だったが、誰にも相談せずに母親を見舞い続けたこと、母親が病院から一時帰宅した年の瀬に、父親も入れて 3 人で母親の作ったおでん

を食べたこと、その年明けに母親が他界したこと、今は一人暮らしの父親を世話しているが、父親は昔酒飲みで暴れていたのも今でも複雑な気持ちであること、などが語られた。

12回目にTATの結果について話し合った。筆者から、血液検査のような確定診断ではなく、あくまであの時点での心の一側面を表したに過ぎないと断りを入れた上で、表20の解釈内容の部分を分かりやすい言葉に直して伝えた。Mさんは、「テストでここまで分かるのかと驚きます。モヤモヤしていたものが分かった。周りの人が色々と言っていたのも、こういうことだったんだろうと思います」と頷きながら、「孤立感はいつもある。周りに対して諦めているが、どこかで人を求めていると思う。これまで自分の思いは置いてこざるを得なかった。そうしないとやってこれなかった。」「今日この結果を知らなかったら、このまま死んで行ったんだろうなと思います。何とかして変えたい。」と結果から賦活された思いを語った。最後に、「でも、やっぱり辛いですね（苦笑）向き合うというのは」と辛そうな表情を見せたので、<一人で向き合おうとせず、ここで二人で向き合っていきましょう>と返すと、ホッとした表情になった。

13回目では、周囲と仕事量があまにも違うことに「不公平感がある。自分だけ重い荷物を背負わされてる気持ちがあります」と話した。昔はもっとがむしゃらに働いていたという話題から、前の会社で自分が頑張った結果、仕事で成功して皆で喜んだ体験が語られ、「あの頃の話ができて良かったです。成功体験なので、聴いてもらえて良かった」とふつと笑顔になった。

14～17回目は、統括リーダーになってから病気の調子が思わしくないこともあり、体調のことを上司に打ち明けて異動を願い出るプロセスが語られた。上司からは『体調面の問題はもっと早く言うべきだった。周りのことを考えていない。これからは自分のやり方に固執するんじゃなくて、周りを思いやるべきだ』と言われたこと、その言葉には愛情があり、自分を思いやってくれているのが伝わったので素直に受け取れたことが語られた。また、隣の部署の課長が自分にだけ内緒話をしてくれたことから、口が堅いと信用されると幾分誇らしげに語った。最終回では、今より仕事量の少ない部署に異動が決まったので、春から暫くは自分の力で頑張りたい、今のように自分に自信がついたのはカウンセリングのおかげなので感謝している、といった内容が語られ、面接は終結となった。

3. ナラティブの視点による分析・解釈

表 19 は、以上のような文脈の中で実施した TAT である。ここから、切断することのできない物語の流れを読み、流れに示されるプロットから語り手の構成する意味連関を読み取る際の分析視点を検討していく。なお、分析の妥当性については、筆者と臨床心理士 1 名（臨床経験 25 年以上、臨床ナラティブ・アプローチを主とする）によって、臨床的妥当性を備えていると判断できるまで協議を行った。

(1) セルフ・ナラティブの連続線上にある語りとして読む

まず大切なのは、物語を読む際の姿勢である。TAT の物語は、(独特の視点の二重化構造を有しながらも) 語る主体も語られる主体も共に被検者であることから、被検者のセルフ・ナラティブの連続線上に位置づけることができる。もちろん、心理検査という固有の文脈における反応であることは無視できないが、それを一旦括弧に入れて、面接 10 回目で語られた M さんのセルフ・ナラティブの一部、という視点で読んでみることは、M さんの発話以前の次元に接近するためには必要な作業であるし、分析視点の一つと言っても過言ではない。

(2) B 系列から C 系列への時間の移行

次に、物語の流れが B 系列、C 系列どちらの時間を中心に配列されているか、という視点で読み直す。M さんの場合は、基準とする時間が B 系列から C 系列に途中で移行している。最初の 4 枚までは、因果関係という B 系列の時間に沿って物語は流れるが、図版 5 あたりからこれが崩れ始める。教示をしっかりと理解していた M さんが、図版に対する印象を直接語るようになってきたのである。その後、図版 6BM で B 系列に戻るものの、7BM 以降は因果関係がほとんど語られなくなる（図版 11, 19 以外）。この時、うっすらと涙を浮かべる M さんの姿からは、図版に心が揺さぶられている様子がありありと感じられた。図版 9BM では、B 系列から C 系列への移行が明確に現れている。



図 6 図版 9BM の略画

【図 6 に対する M さんの語り】『疲れて集団で寝ているところですね。午前からずっと農作業をしていて、やけにかき入れ時と言うか大変な時期だったんで、ちょっと昼ごはん食べて、その休憩と言うか、かなり身体が疲れてしまったんで。…と言いながらも不自然ですよ…。ちょっと変えまして、縁起が悪いかもしれませんが、亡くなっている絵かなと思います。人の上に人がこんな感じにいるっていうのは不自然なんで、血の痕も見られたりするんで…亡くなってる人達を見てこの男が驚いてると言いますか。そういう絵かなと思います。』

ここでは物語を語り直している。最初の物語は、『午前』『昼』という B 系列に属する言葉を入れながら、因果関係に基づいて配列しようとしている。鈴木（1997）によると、休憩、休息というテーマはこの図版の最も標準的な反応である。しかし、語られた物語（外面的な様相的側面としての意味）と内言（内面的な意味的側面としての主観的意味）とのズレの大きさを『不自然ですよ』と表現し、『縁起が悪いかもしれませんが』と前置きした上で語り直している。後半の物語からは、『死の予感』という内言の意味を強く感じ取ることができる。この図版に血の痕に見える部分は描かれていないが（坪内（1984）の Dd 反応にも記載されていない）、M さんはどこかにはっきりと血の痕を見ている。この図版を媒介として、普段は内的世界の周辺に伏せられている『死の予感』という意味が喚起され、一気にドミナントな意味として意識されたと考えられる。内言がストーリーとして加工されず、そのまま露出しているような感じである。すなわち、ここで B 系列から C 系列へと

時間が移行している。後半の物語は、Mさんにとってドミナントな意味である『死の予感』が反映されて配列されたプロットになっている。

(3) 意味連関におけるドミナントな意味

Mさんの物語の流れは、大半がプロット（C系列の時間で、本来は非線条的な性質をもつ）に沿っていることを確認できた。しかしこの時点では、「ことばは一つの口からは線条的、継起的に発さねばならない制約がある」（森岡，2002）ために、どうしても直線的で方向性を持ったB系列の時間に沿って読もうとしてしまう。例えば、プロットに沿っていると確認できた後でも、図版5や図版9BMの物語を『図版の状況しか語っていない』『現在しか語っていない』と感じるとしたら、その背景には直線的なB系列の時間が流れている。

そこで筆者が行ったのは、物語のプロットを読み取ろうとする前に、Mさんの構成する意味連関を読み取る作業である。意味連関とは、内的世界における意味の巨大な塊を構成する個々の単位としての意味同士が結合し、合同している網目状のシステムのことである。図版9BMでのMさんの語り直しのように、TATの図版は自身を媒介として、被検者の構成する意味連関の中でも、ドミナントな意味を喚起させる作用を持つと考えられる。筆者は、意味が平面的に並置されている網目状の視覚イメージを思い浮かべながら、ドミナントな意味が何かという点を分析視点にして物語を読み直した。その結果を、表21に示す。

表21 Mさんの意味連関におけるドミナントな意味

ドミナントな意味	読み取れる図版	読み取れる箇所
ずっと同じ状態が続いている (停滞に近い)	1, 2, 4, 11, 12, 17BM, 19	<ul style="list-style-type: none"> ・#1「ずーっと続いてまして」、#2「ずっと気になってて」、#11「現状を変えたい」「いろいろと問いかけをして」、#12「ずっと」を強調して語る。 ・#4：せがまれて、拒んでという膠着状態が続いている。 ・#17BM：登り続ける状態が続いている。 ・#19「あまり早く進めない」「ゆっくりゆっくり進んでいる」
一足飛びに展開させる・させなければならない	1, 2, 4, 11, 19	<ul style="list-style-type: none"> ・#1「いろいろ悪戦苦闘ありながらも」、#2「ふとしたきっかけで」、#4「一晩おいて、母親とも話をして」、#11#19「最終的には」、と結末への経緯を省略している。同じ状態が続いていた状況から、なぜ、どうやって展開したのが具体的なイメージが湧かない。 ・一足飛びに展開した結末は、ハッピーエンドである。 ・#12と#17BMは、同じ状態が続いていくと読み取れる語り。
死の予感	6BM, 9BM, 12, 20, 16	<ul style="list-style-type: none"> ・#6BM「死んでしまうかもしれない」「ショック」「受け入れることができない」、#9BM「亡くなっている絵」「血の跡」、#12「治らない病」、#20「病んだり、大気汚染にさらされたり」、#16「死ぬ時に悔いないように死ねたらいいかな」「死んでいくことになる」
否定的な感情を抑え込んでいる	3BM, 17BM	<ul style="list-style-type: none"> ・#3BM：人との関わりでドッと込み上げてきた否定的な感情を、「次の一歩へ踏み出すしかない」と抑え込み、現状改善を諦めている。しかし、諦めきれないのではないかとも読み取れる。 ・#17BM：「どんどんどん」「登って登って」と行動面を強調している反面、それに伴う感情（疲れたり、愚痴をこぼしたり、無気力になったりしそうなものだが）が一切語られておらず、アンバランスな印象を受ける。
人との関わりで後悔している	13MF, 15, 18BM	<ul style="list-style-type: none"> ・#13MF「激しく悔いている」、#15「本当にやるべきだったんだろうか」「神よ救いたまえ」、#18BM：裏切った人、踏み台にしてきた人から恨み・呪いをかけられてもがき苦しむ、という語りから、自分の（時には衝動的な）行動に対する後悔が読み取れる。 ・いずれも人との関わりの中で起こっている。
静けさ、安らぎ	10, 14, 12BG	<ul style="list-style-type: none"> ・#10：授乳という安らぎの場面。子どもが眠っているという静かな状況。 ・#14：久しぶりに自分の家に帰ってきた安堵感。一人しかいない静かな空間。 ・#12BG：休日に休養にきて安らいでいる。二人しかいない静かな空間。

(4) 物語のプロット

この作業の後に、反復するプロット（C 系列の時間で、本来は非線条的な性質をもつ）が線条的な制約をもつことをふまえ、それを読み取る作業に戻った。線条的な制約がある以上、そこには言葉の継起的、直線的な展開がなければならない。表 21 に即して言えば、Mさんの物語のプロットは、『ずっと同じ状態が続いている（停滞に近い）』『一足飛びに展開させる・させなければならない』というドミナントな意味と関わっている。つまり、『停滞に感じられるほどずっと同じ状態が続いている。しかし、何とか事態を動かさなければ

ならず、経緯を省いて一気に変えてハッピーエンドに持っていく（持っていかざるを得ない）』というプロットが読み取れるのである。もちろん、全ての図版に共通して見られるわけではないが、少なくとも図版 1, 2, 4, 11, 19 の物語はこのプロットに沿って選択・配列されている。また、図版 12, 17BM については、『停滞に感じられるほどずっと同じ状態が続いている』というドミナントな意味が、そのままプロットとして表れていると考えられる。

4. セルフ・ナラティブとの対応

TAT の物語は、人生の決定的な場面における決断や葛藤を思わせる絵をもとに作るため、「人生の決定的な場面においてその被検者が図らずも自ら毎回選びとり、自らが構成してしまうパターンが、この（TAT の）物語構成にも表われて」（大山，2004）しまう。そして、「どのような順序でどのような意味連関で語られるかに、語り手が構成している意味世界が反映」される。今回、M さんの TAT から読み取れたプロットは、『停滞に感じられるほどずっと同じ状態が続いている』であった。これは、6 年間同じ部署に属し、不満やストレス過多な状況を変えたいと思いつつ現状維持が続いているという M さんのセルフ・ナラティブのパターンが、そのまま反映されていると見なすことができる（ナラティブの視点では、『異動もできずストレス過多な状況が 6 年継続している』という部分を、事実かどうかの判断は一旦おいて、M さんの語りを通して生まれる体験の現実として理解する）。ただし、その後の展開は少し異なる。TAT では、『何とか事態を動かさなければならず、経緯を省いて一気に変えてハッピーエンドに持っていく（持っていかざるを得ない）』というプロットが読み取れたが、TAT 実施以降の面接では、M さんが上司に体調面を打ち明けて異動を願い出る経緯が語られており、面接中の筆者の印象では、一足飛びに事態を動かした感じは受けなかった。もしかしたら、6 年間動かせなかった事態に対して、「これまで自分の思いは置いてこざるを得なかった。そうしないとやってこれなかった」と肯定的に振り返れたことが、「何とかして変えたい」という思いを強め、M さんの 6 年間の経過からすれば『一気に』とも捉えられる大きな変化を起こす契機となったのかもしれない。

また、TAT から読み取ることができたドミナントな意味は、セルフ・ナラティブとの斉一性が認められる。人との関わりに関しては、セルフ・ナラティブでは不満や敵意、攻撃性が前面に出ており、TAT で読み取れた後悔の意味は強くは感じなかった。しかし、攻撃性と後悔は表裏一体でもあり、例えば『頑固で融通がきかない』と同僚によく言われる話

から「自分を変えない」と思うに至った語りには、言語化こそされなかったが、内的世界では後悔の意味も連関していたのかもしれない。

今回の結果を一般化することはできないし、議論の余地は多分に残っているが、Mさんの事例に限って言うならば、TATから読み取れたプロットは、語り手の構成する意味連関を（少なくともその一部を）反映していると結論づけることができる。

5. ナラティブの視点の特徴

最後に、投映仮説に基づく従来の分析・解釈にはない、ナラティブの視点による分析・解釈の特徴を2点挙げたい。

1つは、TATの結果をパーソナリティ特性として被検者側に帰するのではなく、（被検者の統合的形象化と、検査者の再形象化という相互作用によって生まれるために）被検者、検査者両者の中間領域に帰することができるので、TATの読解について、書き換えの可能性をもった生成的で応答的な側面が強調されることである。時間性に即して言い換えるならば、インターアクティブ（相互作用的）に創られるE系列の時間を強調するという特徴がある。『あなたのパーソナリティ特性として〇〇の傾向があります』という理解と、『あなたは現実を〇〇のように意味づける傾向があります』という理解では、可変的なニュアンスが異なってくる。もっとも、心理検査である以上、被検者固有のパーソナリティ特性を明らかにすることも大切なので、どちらが良いというわけではなく、やはり両方の側面を併せ持っていることがTATの醍醐味であると言える。

もう1つの特徴は、TATにおいて反復するプロットを読み、被検者の意味連関やドミナントな意味を浮き彫りにするためには、数枚ではなく20枚すべての実施を重視することである。今回の研究によって明らかになったのは、図版1枚ずつの物語の流れだけではなく、全図版通しての流れや、繰り返し表れるプロット、ドミナントな意味を読み込んでいくことが、分析視点として重要な役割を持つことである。20枚以上を使うと、実施及び分析・解釈に多大な時間と労力を要することになるので、限界はあると思われるが、＜物語性・主観性＞を重視してTATを用いる場合は、できる限り全ての図版を実施した方が結果を心理療法の場で活かしやすいと考えられる。

<注>

1) プライバシー保護の観点から、内容が損なわれない程度に個人情報の改変を行っている。

第6部 総合的考察

第9章 要約・臨床哲学的考察

第1節 要約

本章では、まず第1部から第5部までの要約を行う。

本論文は、ロールシャッハ・テストと並ぶ代表的な投映法でありながら、その基本的性格や分析・解釈法の曖昧さ故に使用頻度の低い TAT について、現場のアセスメントから一旦離れ、基本的性格の一つである物語性についてナラティブの視点から検討することを目的とした。なお、物語性の中でも、物語の流れとして理解されている時間性的問題に本論文は着目した（第1部）。

第2部は、理論的検討を行った。まず、TAT に関する先行研究を整理し、〈テスト性・客観性〉〈物語性・主観性〉の二側面を有することが TAT の基本的性格の一つであることを確認した。次に、〈物語性・主観性〉を重視する立場の中でも、ナラティブの視点とそれ以外の視点では物語理解がどのように異なるかを検討し、後者は主に『検査者との関係性』『非言語的側面』を、前者は主に『物語の流れ』を活かして理解していることを明らかにした。そして、先行研究では曖昧であったナラティブの視点の定義を、『TAT のプロトコルを、(1) 視点の二重性、(2) 出来事の時間的構造化、(3) 他者への志向という3つの特徴を有する語りとして理解すること』と明確にした上で、物語の流れとは出来事の時間的構造化（出来事を選択と配列）であること、そこにはストーリーとプロットという二種類の基準が存在することを考察した。さらに、両方の基準に影響を与えるものとして、因果関係に基づく論理的な基準が TAT にはあること、教示の『これまで・今・これから』はこの基準を意味することを指摘した。加えて、TAT の時間性には、プロトコルに示される物語の流れだけでなく、実施日時や全体反応時間、初発反応時間といった物理的な時間や、被検者の時間的展望の投映として語られる心理的な時間も含まれることから、野村（2010；2012）の系列時間論に依拠して、TAT の枠組み内の時間概念を A～E 系列の時間の言語で整理し直し、TAT 反応の多様な時間性について、全体的な理解を得ることができた。また、投映仮説に基づく従来の分析・解釈は、プロトコルに投映される被検者のパーソナリティ特性を明らかにするのに対し、ナラティブの視点による分析・解釈は、物語の流れに反映される被検者の意味連関を明らかにするものであることを明示した。

上記の理論的知見に基づいて、第3部から第5部では臨床研究を行った。第3部では、従来の分析・解釈において、物語の流れを過去・現在・未来に3区分する際の分類基準を

探索的に検討した。坂部（2008）の物語の時制論に依拠しながら、主人公の人称性によって協力者 29 人（図版 4 枚分）の物語を分類した結果、図版の状況から結末までの構造化に違いが見られた。三人称群は結果としての出来事を語りやすいのに対し、一人称群は、出来事としては図版の状況から展開していない代わりに、図版の地点からその後の結果を予想したり願ったりする語りが起きやすかったのである。これは、主人公を一人称で語った場合は、『私が、（図版の主人公である）私について語る』構造となり、セルフ・ナラティブの『私が、私について語る』構造に近くなるのに対し、主人公を三人称で語った場合は、『私が、彼について語る』構造となり、セルフ・ナラティブから遠ざかるために構造化の違いが生じたと考えられた。その結果、従来の分析・解釈において過去・現在・未来に 3 区分する際は、出来事のみ注目するのではなく、主人公の人称性と、物語の時制を加味して分類した方がよいという仮説が生成された。

第 4 部では、時間喪失の物語（時間的流れが生じていない物語）に着目し、ナラティブの視点から読んでいくならばどのような解釈可能性があるのか、そこには被検者のどのような意味世界が反映されるのかを探索的に検討した。S さん（60 歳代女性）の物語に対して、パラディグマティック、シンタグマティックというソシユール言語学の概念と、Ricoeur,P.の統合的形象化概念、Sullivan,H.S.の発達理論を基に解釈した結果、S さんの物語はパラディグマティック優位で、統合的形象化が不完全であることが明らかになった。これを病理と見るのではなく、聴き手による再形象化によって、今後物語になる可能性を秘めていることが考察された。そして、ナラティブの視点が、時間喪失の物語に肯定的・発展的な解釈を付与できる可能性を強調した。

第 5 部では、物語の流れの分析視点を検討することを目的として、発話以前の次元である内言に着目し、中村（2014）の内言の意味論に依拠しながら、M さん（40 歳代男性）の TAT にナラティブの視点から解釈を試みた。その結果、（1）セルフ・ナラティブの連続線上にある語りとして読む、（2）物語の流れがどの系列時間を中心に行っているか判断する、（3）語り手の構成する意味連関を読む（具体的には、意味が平面的に並置されている網目状の視覚イメージを思い浮かべながら、ドミナントな意味が何かという観点から物語を読む）、（4）ドミナントな意味の中から、線条的な展開がイメージできる意味を拾い上げ、そこから物語のプロットが何であるかを読む、（5）TAT に表れたプロットとセルフ・ナラティブとの対応を検討する、という分析視点を仮説として生成した。また、投映仮説に基づく従来の分析・解釈にはない、ナラティブの視点による分析・解釈の特徴として、TAT

で明らかになる被検者の特性のうち、書き換えの可能性をもった生成的で動的な側面を強調すること、数枚ではなく 20 枚すべての図版の実施を重視することを挙げた。

第 2 節 臨床哲学的考察

第 5 部までで、TAT の時間性に関する上記のような理論的知見、臨床的仮説を導出することができた。しかし、時間性について検討を行うならば、議論せねばならない主要部分がまだ一つ残っている。それは、第 2 部 48 頁で記した「過去・現在・未来という時制がない B 系列とそれがある A 系列とを混同することがしばしば」（野村，2012）あるという事実、第 3 部 58 頁で記した、物語の流れは本来 B 系列か C 系列に属するにも関わらず、分析の際に過去・現在・未来という A 系列の言葉を使いやすい事実についてである。なぜ我々は、A 系列と B 系列の時間を混同しやすいのだろうか。混同したとしても、なぜそこに引っかかりを感じにくいのだろうか。この点について、精神科医の木村（1982）の時間論をもとに考察を行う。

1. 順序づけを可能にする前提条件

木村（1984）の時間論に基づくならば、A 系列と B 系列・C 系列の時間を混同しやすい理由は、出来事の時間的構造化が可能となる前提条件に関わっている。物語を B 系列のストーリーで語るにせよ、C 系列のプロットで語るにせよ、出来事と出来事の間『より前』『より後』という順序づけを行わなければならない。そして、この行為が可能になるのは、ある前提条件を満たした場合に限られるのである。浅野（2001）は、物語の働きを述べる中で、木村（1978）のある離人症者の言葉を引用している。

「自分というものがまるで感じられない。自分というものがなくなってしまった。自分というものがどこか非常に遠いところへ行ってしまった。いまここでこうやって話しているのは嘘の自分です。何をしても自分がしているという感じがしない。……テレビや映画を見ていると、本当に奇妙なことになる。こまぎれの場面場面はちゃんと見えているのに、全体の筋がまるで全然分からない。場面から場面へびよんびよん飛んでしまっ、そのつながりというものが全然ない。……私の自分というものの時間と一緒に、瞬間ごとに違った自分が、何の規則もなくてんでばらばらに出ては消えてしまうだけで、今の自分との間に何のつながりもない。」（木村，1978）

この言葉に対して、浅野（2001）は次のように述べている。「患者は、二つのことを訴えている。一つは自分というものがなくなってしまったということ、もう一つは、テレビ番組や映画の筋がとらえられなくなるということである。ここでいう『筋』、すなわち複数の場面をつないで『全体』を作り上げていくものは、…物語に他ならない。したがってこの患者の訴えが意味しているのは、物語に関わる能力と自分というまとまりと一緒に失われてしまったということだ。この二つの喪失は単なる偶然によって同時に起こったのではない。そうではなくて、そもそも自己をひとつのまとまりへと作り上げていく力は、自分自身についての物語を語ることによって産み出されるのであり、物語に関わる能力の衰退は当然自己のまとまりの解体をもたらすことになるのである。」

ここで浅野が指摘しているのは、「物語に関わる能力」すなわち「複数の場面をつないで『全体』を作り上げていく」時間的構造化の能力と、「自己をひとつのまとまりへと作り上げていく力」が密接に関連しているということである。両者は相互連関の関係にあるが、本論文では議論を分かりやすくするために、時間的構造化を可能にする前提条件に「自己をひとつのまとまりへと作り上げていく力」がある、という因果関係で捉えることとする。

2. 自己の連続性感覚

我々がセルフ・ナラティブを語る際、ある出来事が、もう一つの出来事に比べて『より前』か『より後』かという順序を、一体何によって決定しているのだろうか。大抵は、B系列の「物理的な性格をもった時間」（野村，2012）を基準にしていることが多い。例えば、海外旅行の話題について語ろうとして、5年前にマレーシアに行った、3年前にシンガポールに行った、来年ドイツに行こうとしている、という3つの出来事を語ろうとしたとする。この時、B系列の時間に照らせば、マレーシアはシンガポールより『前』の出来事であり、ドイツはシンガポールより『後』の出来事である。そのため、B系列のストーリーとして語るならば、マレーシア、シンガポール、ドイツの順序で語る事となる。また、『本当はずっとドイツに行きたかった。これまでは費用も時間もなく叶わなかったが、来年ようやく行けそうで楽しみだ。海外旅行と言えば、仕事でシンガポールに行ったことがある。その前に家族旅行でマレーシアに行った経験があるので、地理的に近いシンガポール行きはさほど負担を感じなかった。しかしヨーロッパは初体験なのでとても不安だ』という順序で語るとすれば、C系列の時間であるプロットを基準にしている。

重要なのは、B系列、C系列どちらの基準で語ったとしても、その語りにはA系列の時

間が混在していることである。A系列とは、過去・現在・未来という「心理的な性格をもった時間」で、「自分と一体となった方向性をもった変化で、生きるために何らかの目的を果たし、語ることによって意味をもつ主観的な時間」（野村，2012）である。ここで、改めてA系列の時間について考えてみる必要がある。「自分と一体となった方向性」とは、自己の連続性感覚に他ならない。つまり、出来事の順序づけを可能にしているのは、3つの出来事を体験した（体験しようとしている）のは全て同一の自分であるという自己の連続性感覚と、それに裏打ちされて生みだされる『今・ここの自分』という起点なのである。これは、「自己をひとつのまとまりへと作り上げていく力」（浅野，2001）と同じものを指している。先の旅行体験の例に戻って、この語りが2015年に起こったものだとする。そうすると、語り手は2010年にマレーシア、2012年にシンガポールに行き、2016年にドイツに行くことになる。この時、2010年は2012年の『後』には来ないし、2016年は2010年の『前』になることもない。これが、純粋なB系列の時間である。しかしここに、2015年に生きている『今・ここの自分』という起点が加わると、一気にA系列の時間が混在してくる。2015年が『現在』になり、2010年と2012年は『過去』に、2016年は『未来』の出来事になるのである。ストーリーとして語られる『5年前』『3年前』『来年』という言葉は、自己の連続性感覚と、現在という起点がなければ語ることのできない言語であり、B系列の根底にはA系列が存在している。プロットとして語られる場合も、その主観的な意味連関の根底には同じ前提条件が成立している。このように、語り手が生きた人間である限り、物語がどの系列で語られるにせよ、その根底にはA系列の時間が必ず流れている。そして、A系列の時間の本質は、自己の連続性感覚（野村の言葉を使うならば「自分と一体となった方向性」）であり、そこから生み出される『今・ここの自分』という起点である。この感覚があって初めて、『より前』『より後』という出来事の順序づけが可能となるし、時間が『流れる』ものとして体験されるのである。

では、自己の連続性感覚が失われてしまった離人症者の場合は、どのように時間が体験され、語られるのだろうか。木村（1982）から、患者の語りを引用する。

「時間の流れもひどくおかしい。時間がばらばらになってしまっていて、ちっとも先へ進んで行かない。てんでばらばらでつながりのない無数のいまが、いま、いま、いま、いま、と無茶苦茶に出てくるだけで、なんの規則もまとまりもない。」

木村は、このように語る離人症者においても、時計から時刻を読み取ったり、時間の量的経過を知ったりする能力には何の障害もないこと、過去・現在・未来という観念も保たれているし、時間が未来から過去の方へ流れていくものだという事、知的には十分に理解されていることを述べている。「それにも関わらず患者は、いまの印象と次の印象とを時間という観点で結びつけることができない。二つの出来事がそれぞれ異なった時計の針の位置で起こっても、それが何分後のことであるのかは言えるが、その間に時間が経ったという感じでこの二つの出来事を結びつけるということができない」のである。つまり、自己の連続性感覚が失われてしまった者の場合でも、B系列の時間で語ることはできるし、A系列の時間も知的には理解している。しかし、連続性感覚と起点が失われているために、時間が一つの方向に向かって滑らかに流れる感覚にならず、ひどくおかしい流れ方をする、ばらばらで繋がりのないものとして時間が体験されるのである。

3. 生の既存性と死の未知性

木村(1982)は、時計で計測される時間のことを「もの」としての時間(本論文で言うならばB系列の時間)、時間が経ったという感覚で経験される時間のことを「こと」としての時間(A系列の時間)として、両者を区別している。そして、「もの」としての時間を次のように説明している。「内部的あるいは外部的に対象化されたものが時間を占めるという場合、そこで考えられている「時間」とは、時計やカレンダーで数的に表されうるような時間量のことである。長いとか短いとかいう計測の可能な時間、あるいは空間化された眼に見える時間のことである。そのような時間は、それ自体もの的に対象化された時間である。…ものの時間ということを使うとき、われわれは時間というものを、時計やカレンダーなどの形で実際に眼に見えるものとして、あるいはもっと内面的な仕方ではあっても、やはり一種の時間表象ないし時間のイメージとして、内部の眼で見えるものとして考えている。考えているだけでなく、それを計っている」。時計やカレンダーで数字として数えることのできる「もの」としての時間は、「本性上、前後対照的であって可逆的な連続量のようなもの」である。このことが示しているのは、「物理学の時間に前後非対称な不可逆性が、いかにすれば過去と未来との非互換性が導入されるのは、決して計測量そのものの一次的な性質によるのではなく、観測という行為が二次的に加えた操作によるもの」だということである。そして、この二次的な操作こそが「こと」としての時間だと述べている。「こととしてのいまは、未来と過去のあいだに切れ目を作らない。というよりもむしろ、われわ

れの自然な体験に即していうならば、このいまのひろがり『いまから』と『いままで』との両方向に展開してみたときに、そこではじめて未来と過去のイメージが浮び上ってくる。いまは、未来と過去、いまからといままでをそれ自身から分泌するような、未来と過去とのあいだなのである。未来と過去とがまずあって、そのあいだにいまがはさま込まれているのではない。あいだとしてのいまが、未来と過去を創り出すのである。こととしてのいまは、こうして時間の流れ全体の源泉となる」。この論に依るならば、我々の語りにおいては、A系列の時間とB系列の時間は混在しているだけでなく、B系列の根底に、前提としてA系列が存在するという構造が成立する。

さらに木村（1982）は、A系列の本質について次のように述べている。「既知と未知としてのいままでといまから、生の既存性と死の未来性、有限な人間の個別的生存に対してその有限性それ自身によって必然的に課せられているこの両方向性が、われわれの日常の時間に以前と以後、過去と未来の区別を与えているのであり、時間に絶対的に不可逆的な流れという概観を与えているのである。」「未来が『まだ来ない』ものであり、過去が『過ぎ去って帰らない』ものであるのは、時間の本性に根ざしたことでなくて、むしろわれわれ人間が死すべきものであるという有限性の反映であるにすぎない。われわれが自己と呼んでいるものも、時間と呼んでいるものも、実はわれわれの死とのかかわり方の様態にすぎない」。つまり、今・ここという現在、過ぎ去って帰らない過去、未だ来ていない未来というA系列の時間の方向性は、本質的には語り手の生の既存性と、死の未知性に関わって生まれている。だからこそ、離人症者のようにA系列の方向性が失われてしまった場合は、うまく物語をつくることができないのである（ただし、この場合の物語のおかしさは、内言の意味を読み取らなければ感じ取れないかもしれない）。

以上の考察を踏まえると、なぜ我々がA系列とB系列の時間を混同しやすいのか、混同したとしてもそこに引っかかりを感じにくいのかについては、我々が生きる人間であるという応えが適切ではないだろうか。

第10章 Murray,H.A.の意図

第1節 TAT 成立の背景

次に、第2部36頁で述べた、ナラティブの視点とMurray,H.A.の人格理論との親和性について考察を深めていく。そして、プロットとテーマ、語り手の意味連関と力学的構造の違いについて明らかにすることを目指す。

そもそも創始者である Murray,H.A.は、どのような意図で TAT を考案し、教示を作成したのだろうか。大山（2004）によると、Murray,H.A.の時代のアメリカ心理学会では、イギリス流の機能主義や進化論の流れを汲む行動主義と、ドイツ流の生態学的心理学やゲシュタルト心理学という異質な二つの心理学的潮流が拮抗していた。前者は、心や個体の行動を要素に分け、その形成は環境によって規定されると考えるものであり、対して後者は、個体の行動の全体性を重視し、環境との相互作用から心を解明していこうとする志向性があった。Lewin,K.や Allport,G.W.の人格理論は後者の代表的なものであり、Murray,H.A.の人格学もこの流れにあった。

田淵・森岡（2013）によると、Murray,H.A.は人を性格特性に切り分けるような方法論ではなく、パーソナリティをトータルにとらえる方法を若いときから模索していた。そこで注目したのが伝記的資料である。第 2 次世界大戦中は極秘裏にヒトラーのパーソナリティ研究を行っていたようである（Elms, 1994）。とくに注目すべきは、1920 年代から作家メルヴィルの伝記を書き始め、『モビーディック（白鯨）』に関する評論を手がけ、『ピエール』の編集を行ったことである（ただし、Murray,H.A.のメルヴィル研究は友人の作家に酷評され、未完に終わった点は惜まれる）。Murray,H.A.の目標は、パーソナリティの新しい概念化を行うことであり、そのために伝記心理学を一つの科学的な原理として創造しようと考えたのである。もっとも、パーソナリティの解明にあたって、行動データだけでなくライフヒストリー全体にも注目したのは Murray,H.A.だけではない。心理学の歴史を辿ってみると、伝記的資料を用いてパーソナリティを研究する心理誌（psychobiography）という方法は以前から見られた。しかし、Murray,H.A.の独自性は、心理誌という方法にもまして、直接的に作家が創造した作品世界に身をおく方法を取ったことである。『ピエール』の編集に携わりながら、こういった教養小説（主人公が様々な体験を通して内面的に成長していく過程を描く小説）における主人公の成長過程を描き出す方法を、そのまま心理学の方法に使えるか模索していた節がある。そして、この編集作業を通じて、Murray,H.A.はパーソナリティ理解に迫る方法を着想したと推測される。つまり、小説に出てくる登場人物たちの発達とプロットの展開に注目し、それを通じて作者のパーソナリティ理解が行えると考えたのである。

このような背景を踏まえると、「個人の時間的に長い活動の系列の中から一部分である生活体に生じたエピソード（出来事）を取り上げることによって、その個人の人格を研究することができる」（山本, 1992）という欲求-圧力理論も理解しやすくなるし、小説という

物語からパーソナリティ理解を目指す方法は、ナラティブの視点そのものであると言える。そのため、ナラティブの視点と Murray,H.A.には理論的親和性が見られると言うよりも、理論的原点が同じであったと捉える方が正確であろう。

第2節 欲求-圧力理論

では、理論的原点が同じでありながら、TATの分析視点としてナラティブはプロットを、Murray,H.A.はテーマを中心に据えている点、TATから明らかになるパーソナリティ特性として、ナラティブは語り手の構成する意味連関を、Murray,H.A.は欲求-圧力の力学的構造を指摘している点については、どのように理解すれば良いのだろうか。これについては、Murray,H.A.の欲求-圧力理論を熟考する必要がある。

欲求-圧力理論を理解するために、まずは具体的な分析方法を確認していく。Murray,H.A.が考案したTATの欲求-圧力分析は、以下の7つの分析項目からなっている。

- (1) **欲求と圧力**：欲求とは、主人公が環境に働きかける行動を引き起こす内部からの力であり、圧力とは、主人公に働きかける環境から生じる力を意味する。そして、物語を力動的な欲求-圧力の結合体としてのテーマと見なし、これを分析する。物語の主人公の欲求-圧力が、被検者のそれを投射しているものと仮定し、分析と解釈をすすめていく。欲求は、①対人関係の欲求、②社会的欲求、③官能快楽欲求、④圧力排除欲求、⑤防衛回避欲求に分類される。圧力は、①対人関係の圧力、②環境的圧力、③内的圧力に分けられる。
- (2) **水準分析**：欲求や圧力がどういうレベルで働いているかを分析する。
- (3) **内的状態**：主人公が物語の中で明確に述べている感情や気分、身体感覚をリストアップする。
- (4) **解決行動様式**：欲求と圧力のダイナミクスをどのように解決するかを分析する。
- (5) **結末**：物語がどのように終わるかを分析する。
- (6) **生活領域**：①家族領域、②異性領域、③社会領域（仕事、職業、学校領域）、④反社会領域の領域ごとの欲求-圧力、そのほかの傾向を見る。
- (7) **形式分析**：TATの検査中に示す被検査者の態度（検査拒否、指示不履行、質問など）、物語の形式的・構造的特徴（一人称、固有名詞、感嘆詞など）、絵画刺激をどのように物語の中に利用するか注目して分析する。（上里、1993より抜粋）

この欲求-圧力分析に基づいて分析した例として、上里（1993）の事例を紹介する。表22は、16歳の不登校女子のプロトコルである。このプロトコルに対する分析・解釈を表23に示す。

表22 16歳の不登校女子のTATプロトコル（上里，1993）

図版	TATプロトコル
	初発反応時間25秒 全体反応時間2分00秒 * < >は検査者のことば
1	弾いていたんだけど、思うように弾けなくて、考え込んでしまっている。で、どうしたらうまく弾けるか、ほんとに悩んでいる。……今、考えてるんだけど、どうしたらいいかっていうのがわかって、すぐ、もう1回、練習をし始める。……あ、終わり。<この物語の前は？>……先生に注意されて、それで悩んで考えていたんだけど、それがわかって、練習を始める。

表23 欲求-圧力分析による分析・解釈

分析	<p>(1) 欲求と圧力 (2) 水準分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主人公…男の子 ・欲求……理知 (バイオリン, 現実行動水準) <li style="padding-left: 2em;">達成 (バイオリン, 前行動: 思考水準) ・圧力……挫折 (バイオリン, 現実行動水準) <p>(3) 内的状態…悩んでいる (4) 解決行動様式…能動的 (5) 結末……不定</p>
解釈	<p>主人公は誰なのか、語り手はそれを明確に述べていない。まるで自分が絵の中の少年であるかのように語っている。物語は短い、語り手自身の現実の苦悩が痛いほど伝わってくる。</p> <p>物語は「弾いていたが思うように弾けず、どうしたらいいか悩んでいる」というものである。今まで「弾いていた」主人公には、特に強い成就欲求は認められない。明確ではないが、あるとすれば理知欲求であろう。だが、ただ何となくバイオリンを弾いていたのかもしれない。「弾いていた」と語るだけである。語り手が最も重点を置いて語ったのは、次の「考え込んでいる」、「悩んでいる」という部分である。そこで、なぜ主人公は悩んでいるのが重要になってくる。理由は2ヶ所で述べられている。まず「思うように弾けなくて」、次に「どうしたらうまく弾けるか……悩んでいる」。つまり、「今まで比較的スムーズに進んできたのに、思うように弾けなくなってしまう、どうしたらよいかわからない」ところに源泉がある。挫折の圧力と見ることができよう。この状態は、今まで学校生活が順調に進んできたのに、突然行けなくなってしまう語り手の姿に重ねてみることができる。</p> <p>では、つまづきから、主人公はどのようにして事態を解決していくのだろうか。「考えていると、どうしたらよいか分かる」とある。ここで「どうしたらよい」のかについては具体的に解決方法を述べていない。これは語り手自身、自分の問題について、未解決で整理されていないためと考えられる。それなのに、「わかって」としたのは「何とかそのうちわかって解決するだろう」という語り手の楽観主義的傾向の表れと見ることができる。</p> <p>結末は不定、未来は非常に近いものである。「これからのことはわからない」ということの表れ、または独自のなためかと思われる。</p>

表 23 の解釈で注目すべきは、『欲求』と『圧力』の捉え方である。解釈の際、大山 (2004) の述べるように、『欲求』をフロイト的な欲動 (need) と解したり、『圧力』を欲求阻止の障害と考えたりしてはならない。Murray,H.A.の考える『欲求』とは、「有機体のこれまでの経験やこれからの志向性などが、まさに『今』に集約されているもの」で、「有機体が環境と出会うことで誘発されたり形成されたりしてきたもの、あるいは有機体が未来へ向け投企するものなどの総体が、『今・ここ』の環境の布置のもとで体现されているもの」を指す。そして『圧力』とは、「そのような欲求をもたらすよう環境から有機体に及ぼされる歴史的・現在的な力動的作用」である。ここで重要なのは、欲求が圧力をつくり出すと同時に、圧力が欲求をつくり出しているという両者の力動的な関係である。表 23 の解釈に戻ると、理知欲求、達成欲求と、挫折という内的圧力を分類して終わるのではない。両者の力動的な構造に注目して、「今まで比較的スムーズに進んできたのに、思うように弾けなくなってしまい、どうしたらよいのか分からない」というテーマ (『欲求』と『圧力』の力動的構造) を導き出している。

ここで、もう一つ浮かび上がってくるのは、『欲求』と『圧力』の力動的構造は、語り手の構成する意味連関との理論的重なりが大きいことである。表 23 の「語り手が最も重点を置いて語ったのは…」という分析視点は、第 5 部で示したドミナントな意味の読み方とほぼ同じである。筆者がこのプロトコルをナラティブの視点から読むならば、「考え込んでしまっている」「ほんとに悩んでいる」という表現に注目し、『現在歩みを止めている、その立ち止まりの深さ』をドミナントな意味として読み取る。これほど深く考え込んでいる主人公が、「どうしたらいいかっていうのがわかって」と展開するのは不自然である。M さんの事例のように、深く立ち止まっている状態を何とか変えたいという語り手の思いが、一足飛びな展開を生じさせたと考えられる。さらに表 23 の解釈を読み進めると、「今まで学校生活が順調に進んできたのに、突然行けなくなってしまった」という語り手のセルフ・ナラティブが記されており、TAT の意味連関との整合性を確認することができる。すなわち、『欲求』と『圧力』の力動的な関係とは、語り手が人生を生きる中で様々な体験をし、それによって生じた主観的な意味連関であると言い換えることができる。そして、力動的な関係の中でも、「有機体のこれまでの経験やこれからの志向性」(大山, 2004) を表現したものがプロット、それを『今・ここ』の一点に集約して表現したものがテーマであると解釈できる。海本 (2005) が、プロットを「時間的、空間的な広がりを持ち、物語のつながりや流れに視点が置かれたもの」、テーマを「包括的でかつ焦点を絞る方向にあるもの」

と定義していることも、この解釈を補強するものである。表 23 で言えば、『現在歩みを止めている、その立ち止まりの深さ』というドミナントな意味を、Murray,H.A.の重視するテーマで表現すれば『思うように弾けなくなり、どうしたらよいか分からない悩み』になり、ナラティブの視点が重視するプロットで表現すれば『今まで比較的スムーズに進んできたのに思うように弾けなくなり、どうしたらよいか分からず深く立ち止まっている。今はまだ変化のきっかけを見い出せない』になるということである。

要するに、ナラティブの視点と Murray,H.A.は本質的にはパーソナリティの同じ部分に注目しているが、それを一点に統覚したものを重視するか (Thematic Apperception Test というテスト名が、主題を統覚する意味であることから窺える)、その流れを重視するかにおいて異なっていると言える。加えて、Murray,H.A.は無意識の領域を想定する投影仮説に基づいているため、欲求-圧力の力学的構造や力動的作用は、語り手の意識の領域しか想定しない意味連関とは概念が異なっている点も踏まえておかなければならない。

以上の考察は、ナラティブの視点が Murray,H.A.の人格理論と同一であると主張するものではない。少なくともナラティブの視点は、理論的原点が Murray,H.A.と同じであり、またパーソナリティの同じ部分に注目していることから、一般的な分析・解釈からかけ離れた外れ値的な存在というわけではない、と主張するのみである。なぜなら、投影仮説に依るか依らないかという明確な違いがそこには横たわっており、この部分の検討は今後の課題として残るからである。

第 1 1 章 総合的考察・今後の展望

第 1 節 総合的考察—TAT の時間性とは—

本論文は、基礎研究及び仮説生成型研究という位置づけのもと、TAT の時間性とは何かという問題について、ナラティブの視点から理論的・臨床的な検討を行ってきた。結果として得られた知見を、この問いに応える形で整理する。

ナラティブの視点から時間性について検討する場合、検討対象となるのは実在する時間ではなく、語られた時間と、時間について語る行為であるという認識を基本姿勢とする。時間は在るモノではなく、我々の経験の意味として語りだされるモノなのである。この認識で TAT の枠組みを俯瞰すると、枠組み内にある多様な時間 (検査日時、全体反応時間、初発反応時間、被検者の体験している時間、物語の流れ、被検者と検査者の相互作用など) は、図 4 のように整理することができる。

TATの 時間	心理的な時間	物理的な時間	非時間	対話的な時間
	内在化 されたもの	外在化 されたもの	停止 したもの	同調化 したもの
	・被検者が体験 している時間	・検査日時 ・全体反応時間 ・初発反応時間 ・ストーリー ・因果関係に 基づく軸	・図版の提示 ・プロット	・被検者と検査 者の相互作用
	A系列の時間	B系列の時間	C・D系列の時間	E系列の時間

図4 TATの時間の種類

これら多様な時間の中でも、分析・解釈の際に重要となる『物語の流れ』に焦点をあてるならば、『物語の流れ』とは、TATの物語が有する3つの特徴（視点の二重性、出来事の時間的構造化、他者への志向）のうち、『出来事の時間的構造化』を意味していることが明らかになる。これは、構造化の際に、主としてどの系列時間を基準にするかによって、ストーリー（B系列の基準）とプロット（C系列の基準）の二つに分類できる。また、どちらの構造化であっても因果関係（B系列の基準）に強く影響を受けることがTATの特徴であり、その意味でストーリーの厳密な基準は因果関係である。さらに、どちらの構造化にも根底にはA系列の時間が流れており、その本質は生の既存性と死の未知性に由来する自己の連続性感覚である。

このような理解に基づいて『物語の流れ』を分析・解釈する際、被検者の時間的展望を明らかにするべくストーリーを読もうとするならば、過去・現在・未来と言うA系列の時間ではなく、物語の時制というB系列に沿って時間を分類する方が、より本質的である。また、主人公の人称性によって構造化の質が異なることも忘れてはならない。

一方、被検者の意味連関を明らかにするべくプロットを読もうとするならば、(1)セルフ・ナラティブの連続線上にある語りとして読む、(2)物語の流れがどの系列時間を中心に行っているか判断する、(3)語り手の構成する意味連関を読む（具体的には、意味が平面的に並置されている網目状の視覚イメージを思い浮かべながら、ドミナントな意味が何かという観点から物語を読む）、(4)ドミナントな意味の中から、直線的な展開がイメージできる意味を拾い上げ、そこから物語のプロットが何であるかを読む、(5)TATに表れたプロットとセルフ・ナラティブとの対応を検討する、という分析手順を踏むことが、一つ

の仮説として挙げられる。また、心理臨床場面では『物語の流れ』が語られないことも多々あるが、そのような物語に対しては、その後の心理療法における再形象化行為によって、今後物語になる可能性を秘めているという肯定的・発展的な解釈を付与することができる。

従来の分析・解釈を採用するか、ナラティブの視点による分析・解釈を採用するかは、TAT を用いる目的や、検査者の依拠する理論的立場によって異なるが、ナラティブの視点が投映仮説に立脚していないこと、20 枚全てを実施する方が望ましいこと、被検者と検査者の相互作用という E 系列の時間が要であることは踏まえておかなければならない。

必然的に E 系列の時間が組み込まれ、重視されるナラティブの視点は、アセスメントとして TAT を用いる場合よりも、心理療法で治療的に用いる場合に効力を発揮する。例えば、TAT の施行によって Cl.と Th.の関係性を促進させたり、パラディグマティック優位な Cl.の語りを物語に成長させるという面接方針を提供したり、Cl.の構成する意味連関を共有し語り直していくことでセルフ・ナラティブを書き換える可能性を生み出す、といった効力である。

以上のような、ナラティブの視点による時間性理解は、決して Murray,H.A.の人格理論から離れるものではない。ナラティブの視点は、Murray,H.A.と同じ理論的原点から出発している上、Murray,H.A.の重視するテーマを、流れのあるプロットという側面から語り直しているとも考えられるからである。ただし、投影仮説に基づく Murray,H.A.の理論と全く同じわけではないので、このあたりは更なる検討が必要である。

第2節 今後の課題と展望

本論文では、TAT の時間性について、上記のような知見を得ることができた。しかし、これらの知見はあくまでも仮説生成の第一歩であり、現段階では一般化することはできない。また、心理臨床場面における物語と時間の関係は複雑であり、野村（2010；2012）の系列時間論に依拠するだけでは掬えない部分もあると考えられ、さらなる探求の必要性がある。そのため、今回生成された仮説を足がかりに、仮説検証型研究によって仮説を検証したり、別の実践の場で得られたデータをもとに新たな仮説を生成したりと、仮説の生成と検証を循環させながら、時間性に関する新たなモデルを生み出していくことが今後の課題であり、展望でもある。また、Murray,H.A.の人格理論に関する更なる考察を行わなければ、ナラティブの視点が TAT にどこまで貢献できるか、その射程が定まらないことも課題である。しかし、翻せば、創始者の意図や検査の本質に沿うならば、ナラティブの視点は

TAT に新たな時間性理解を生み出す可能性を有していると言える。TAT に限らず、心理検査という文脈をナラティブの視点から捉え直すことで、そこで語られる時間と、時間について語る行為が書き換えられる可能性は十分にあり、その可能性は、心理検査領域における研究・実践の発展に大きく寄与するものであると信じている。

— 引用文献 —

- 赤塚大樹 (2008) TAT 解釈論入門講義 培風館.
- 赤塚大樹・豊田洋子 (1994) Westen, DのTAT解釈理論に関する研究 愛知県立看護短期大学雑誌, **26**, 101-112.
- 安香 宏 (1990) TAT 異常心理学講座Ⅷ テストと診断 みすず書房 p119~169
- 安香 宏 (1992) 第三章 TAT の分析・解釈技法をめぐって 臨床心理学大系第6巻 人格の理解② 金子書房 p53~88
- 安香 宏・藤田宗和 (1997) 臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社.
- 安香 宏・坪内順子 (1968) TATの分析法と解釈基準の検討——刺激認知と物語構成の特徴からみた 臨床心理学研究, **7**, 1-14.
- 雨宮真理子 (1995) 対人不安と攻撃性についての一考察——対人関係質問票と内的崩壊感尺度及びTATを用いた検討 日本性格心理学会大会発表論文集, **4**, 74-75.
- 安藤満代・田村三穂 (2003) 慢性腎疾患患児と母親への心理学的介入事例 The KITAKANTO medical journal , **53**, 47-53.
- 浅野智彦 (2001) 自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ 勁草書房.
- 粟村昭子 (2007) TAT (主題統覚検査) についての一考察 関西福祉科学大学紀要, **10**, 55-62.
- Bellak, L. (1971) *The TAT & CAT in clinical use*. New York : Grune&Stratton.
- Bruner, J. S. (1986) *Actual Minds, Possible Worlds*. Harvard University Press. ブルーナー 田中一彦 (訳) (1998) 可能世界の心理 みすず書房.
- 蝶間林一美・水口公信・森口弥生・中里克治 (1983a) TATとSTCからみた患者の心理的特徴 (第2報) 心身医学, **23**, 179.
- 蝶間林一美・水口公信・森口弥生・中里克治 (1983b) TATとSCTからみた患者の心理的特徴 (第3報) 心身医学, **23**, 79.
- 蝶間林一美・水口公信・森口弥生・中里克治 (1984) TATとSCTからみた末期がん患者の心理的特徴 (第4報) 心身医学, **24**, 72.
- 蝶間林一美・水口公信・鬼頭弥生・中里克治 (1985) TATとSCTからみた患者の心理的特徴 (第4報) 心身医学, **25**, 79.
- 蝶間林一美・水口公信・森口弥生・中里克治 (1986) 末期癌患者の心理的特徴 (第1報) ——TAT

- とSCTによる研究 心身医学, **26**, 569-577.
- Cramer, P. (1996) *Storytelling, Narrative, and the Thematic Apperception Test*. The Guilford Press.
- Dreger, R. M. (1982) *The relation between Rorschach M and TAT content categories as measures of creative productivity in a representative high-level intelligence population*. 金沢大学臨床心理学研究室紀要, **1**, 44-45.
- 土井真由子 (2002a) ある身体症状を抱える人のTAT反応に関する一研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, **48**, 284-296.
- 土井真由子 (2002b) アトピー性皮膚炎を抱える人の攻撃的衝動心性に関する研究—TAT反応をもとに 心理臨床学研究, **20**, 394-399.
- 土井真由子 (2003) アトピー性皮膚炎患者のTAT反応をもとにした語りの構成に関する一研究 心理臨床学研究, **20**, 521-532.
- 土井健郎 (1977) 新訂 方法としての面接——臨床家のために 医学書院
- Elms, A.C. (1994) *Uncovering Lives*. Oxford University Press.
- 萩原康一郎 (2006) 物語的理解と自己同一性：ポール・リクール『時間と物語』を中心に 文芸学研究, **10**, 21-48.
- 藤掛 明 (2003) 編集者への手紙 氏原氏—鈴木氏のTAT論争を読んで 臨床心理学, **3(2)**, 236-238.
- 藤田宗和 (2001) TATの情報分析枠 (the Frame of Information Analysis) の提案—TATプロトコル分析のための新しい枠組み 犯罪心理学研究, **39**, 1-16.
- 藤田宗和 (2002) 情報分析枠 (FIA) による解釈 臨床心理学, **2**, 650-655.
- 藤田裕司 (1984) 非行少年における母子病理—TATでとらえたその諸相 犯罪心理学研究, **22**, 1-14.
- 藤田裕司 (1992) 精神障害者のTAT (その1) —境界例の場合 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **40**, 241-254.
- 藤田裕司 (1996) ある殺人未遂犯のTAT反応 犯罪心理学研究, **34**, 25-35.
- 藤田裕司・藤野由貴・辻本 晶・岩湫恵子 (1993) TATの集団学習事例 (I) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **41**, 225-238.
- 藤田裕司・平岡洋介・西面友史 (2003) TATの集団学習事例 (15) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **52**, 77-90.

- 藤田裕司・平岡洋介・西面友史 (2004) TATの集団学習事例 (16) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **53**, 25-36.
- 藤田裕司・堀内浩佑・平沼 遊 (2007a) TATの集団学習事例 (17) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **55**, 85-90.
- 藤田裕司・堀内浩佑・平沼 遊 (2007b) TATの集団学習事例 (18) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **56**, 91-100.
- 藤田裕司・小笹 環・澤田佑子 (1996) TATの集団学習事例 (7) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **44**, 301-316.
- 藤田裕司・三野真理・林かつら (1996) TATの集団学習事例 (6) 障害児教育研究紀要, **18**, 17-28.
- 藤田裕司・中井隆司・清水康男・松森 毅 (1997a) TATの集団学習事例 (9) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **45**, 279-287.
- 藤田裕司・中井隆司・清水康男・松森 毅 (1997b) TATの集団学習事例 (10) 障害児教育研究紀要, **20**, 27-38.
- 藤田裕司・中村友子・山内寿枝・蔡 昭慧 (1993) TATの集団学習事例 (2) 障害児教育研究紀要, **15**, 17-30.
- 藤田裕司・阪木啓二・富田和士・小栗脩平 (1999) TATの集団学習事例 (11) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **48**, 93-101.
- 藤田裕司・阪木啓二・富田和士・小栗脩平 (2001) TATの集団学習事例 (12) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **49**, 185-198.
- 藤田裕司・篠崎真理・林 和代 (2002) TATの集団学習事例 (13) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **50**, 307-315.
- 藤田裕司・篠崎真理・林 和代 (2003) TATの集団学習事例 (14) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **51**, 353-363.
- 藤田裕司・高橋美香・大蔵真彩子・桐石かおり・窪田容子・曾我本政史・林 陽一 (1994a) TATの集団学習事例 (3) 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **42**, 331-337.
- 藤田裕司・高橋美香・大蔵真彩子・桐石かおり・窪田容子・曾我本政史・林 陽一 (1994b) TATの集団学習事例 (4) 障害児教育研究紀要, **16**, 33-54.
- 藤本麻起子 (2005) 摂食障害者の内的世界—TAT図版19における「守り」という観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 181-192.

- 藤本麻起子 (2006) TATの分析・解釈について 京都大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 174-186.
- 藤本麻起子 (2007) 摂食障害を抱える人の在り方について 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 58-71.
- 郷古英男 (1980a) 心理診断の技法—TATの施行法と解釈の技法1 調研紀要, **37**, 1-21.
- 郷古英男 (1980b) 心理診断の技法—TATの施行法と解釈の技法2 調研紀要, **38**, 25-66.
- 花沢成一 (1957) 肺結核患者の心理に関する一考察—戸川氏らのTAT日本版による 日本大学文学部研究年報, **7**, 151-161.
- 原田 (慶澤) 華 (1999) 青年期の孤独感—質問紙とTAT物語から見た内的世界の様相— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 393-405.
- 畑中千紘 (2006) コラージュ表現についての考察—コラージュ制作の仕方にもみる対象とのかかり方—京都大学大学院教育学研究科紀要 **52**, 213~225
- 広瀬 隆・氏原 寛 (1987) ある女子大学生のTAT解釈事例—対象関係的思考の観点より 大阪市立大学生生活科学部紀要, **35**, 205-216.
- 広瀬 隆・氏原 寛 (1990) 自我像の二面性と対象関係との関連について—TATを用いたその予備的研究 大阪市立大学生生活科学部紀要, **37**, 189-199.
- Holt,R.R. (1961) The nature of TAT stories as cognitive products: a psychoanalytic approach. Kagan,J. & Lesser,G.S.(eds), *Contemporary issues in Thematic apperception methods*. Springfield.III. Charles C Thomas, pp3-41.
- 本田時雄 (1970) TAT 反応時のポリグラフ反応について 臨床心理学研究, **9**, 13-20.
- 堀口美津子 (1982) TATにおける時間制限の効果について—敵意場面を用いて 京都大学教育学部紀要, **28**, 225-234.
- 細谷紀江・村山ヤスヨ・桂 戴作 (1990) 心療内科受診者における達成動機に関する研究 (第1報) — TAT方式による測定結果と, SDS得点の関係 心身医学, **30**, 94.
- 一木仁美 (2006) 非臨床群におけるアレキシサイミア特性の空想の様相と感情体験 臨床心理学研究, **24**, 76-86.
- 井口敏之 (2002) TATの事例 臨床心理学, **2**, 645-649.
- 井上直美 (2007) DV被害者に対するトラウマのアセスメント—TATを用いたトラウマの影響に関する多次元的アプローチ お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **9**, 40-53.

- 井上直美・林 果林・天野雄一・端詰勝敬・坪井康次 (2009a) 主題統覚検査 (TAT) による回避と麻痺の機制的区別に関する妥当性の検証 心身医学, **49**, 682.
- 井上直美・林 果林・天野雄一・端詰勝敬・坪井康次 (2009b) 主題統覚検査 (TAT) による回避と麻痺の機制的区別に関する妥当性の検証 女性心身医学, **14**, 60.
- 石原志信 (2003) バセドウ病を抱える人の世界創造のあり方について—TAT反応を手がかりに 京都大学大学院教育学研究科紀要, **49**, 422-429.
- 石谷みつる (1993) TATによる青年期女性の対人関係についての研究 日本教育心理学会総会発表論文集, **35**, 496.
- 石谷真一 (1994) 男子大学生における同一性形成と対人的関係性 教育心理学研究, **42**, 118-128.
- 岩川 淳 (1966) TATスコアリングに関する一考察—内容分析を中心として 臨床心理, **5**, 38-50.
- 泉 ひさ (1963) 未熟児に関する研究 教育心理学研究, **11**, 43-47.
- 角田 豊 (1998) 共感性と自己愛傾向の関連 心理臨床学研究 **16** (2) ,129~137
- 皆藤 章 (2004) 第1章 投映法論—イメージと人間 皆藤章 (編) 臨床心理査定技法2 誠信書房 pp.2-49.
- 上里一郎 (監修) (1993) 心理アセスメントハンドブック 西村書店
- 神野秀雄 (1980) ある自閉児の人格構造 (I) —TAT反応を中心として— 愛知教育大学研究報告 (教育科学) , **29**, 263-276.
- 神野真麻 (2009) 日英青年のアイデンティティ形成に関する比較研究—TAT物語分析をもとに 日本教育心理学会総会発表論文集, **51**, 428.
- 菅野信夫 (1981) 心身症における症状の身体化について 心理学研究, **52(1)**, 30-37.
- 河合隼雄 (1993) 物語と人間の科学 岩波書店.
- 河合隼雄 (1994) 昔話の深層 講談社.
- 河合隼雄 (1996) 物語とふしぎ 岩波書店.
- 河合隼雄 (2001a) 「物語る」ことの意義 河合隼雄 (編) 講座心理療法2心理療法と物語 岩波書店 pp. 3-19.
- 河合隼雄 (2001b) 物語を生きる—今は昔, 昔は今 小学館.
- 河合隼雄 (2002) 昔話と日本人の心 岩波書店.
- 川越友美子・安香 宏・藤田宗和 (2001) .認知的側面からみたTATの分析枠組みの検討

- 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **4**, 24-40.
- 川越友美子・藤田宗和 (1999) TATにおける教示の効果と信頼性 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **2**, 32-50.
- 木村 敏 (1978) 自覚の精神病理 紀伊國屋書店.
- 木村 敏 (1982) 時間と自己 中公新書.
- 木村法子 (1983a) 対人恐怖についての一考察—TATに表わされた自己と他者を通して 京都大学教育学部紀要, **29**, 134-144.
- 木村法子 (1983b) TATによるRepression-Sensitization次元の研究 心理学研究, **54**, 95-101.
- 木村 駿・岡部宏行 (1977) M-TAT診断法による精神薄弱児の空想に関する研究 群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編), **27**, 297-317.
- 小西恒子 (1963) . 農村と漁村における家族関係を中心とする行動様式の差異—TATによる研究 甲南大学文学会論集, **20**, 10-28.
- 小島潤子・安藤寿康・大野 裕 (1998) 双生児の互関係—TAT9GF図版からの考察1—そっくりなきょうだいから得るイメージとは 日本性格心理学会大会発表論文集, **7**, 26-27.
- 小島潤子・大野 裕 (2000a) 双生児の相互関係—TAT9GF図版からの考察2 日本性格心理学会大会発表論文集, **8**, 86-87.
- 小島潤子・大野 裕 (2000b) 双生児の相互関係—TAT9GF図版からの考察3 日本性格心理学会大会発表論文集, **9**, 28-29.
- 河野莊子 (1998) 非行少年の「語り」の様式からみた時間的展望—バイク窃盗を主訴に来談した高校生の事例を通して— 青年心理学研究 **10**, 48-58.
- 小山充道 (2012) TAT 津川律子 (編) 投映法研究の基礎講座 遠見書房 pp.104-127.
- Lewin, K. (1954) *Time perspective and moral*. New York : Houghton Mifflin. (レヴィンK. 末永俊郎 (訳) 時間的展望とモラル 東京創元社 1942)
- 槇田 仁・増野信子 (1995) 性格テストの活用法—投影法 (TAT) 児童心理, **49**, 146-149.
- 丸井文男 (1960) TATの標準反応に関する研究—特にEmotional tone, Outcome, Shiftを中心にして 心理学研究, **31**, 83-93.
- 丸井文男・今井清満 (1964) TATの臨床的診断カテゴリーの検討—診断的予見性について 臨床心理, **3**, 95-100.

- 丸山仁美 (2010) 臨床群におけるアレキシサイミア特性と空想の様相の関係——心理検査と心理面接から 純心人文研究, **16**, 103-116.
- 水口公信・蝶間林一美・鬼頭弥生・中里克治 (1982) TATとSCTからみた患者の心理的特徴 (第2報) 心身医学, **22**, 95.
- 水口公信・蝶間林一美・中里克治 (1981) TATとSCTからみたがん患者の心理的特徴 心身医学, **21**, 93.
- 水口公信・蝶間林一美・中里克治 (1982) TATとSCTからみたがん患者の心理的特徴 心身医学, **22**, 75-76.
- 水島恵一 (1956) 非行少年の社会的予後に関する研究 教育心理学研究, **4**, 21-29.
- 森岡正芳 (2002) 物語としての面接 新曜社
- 森岡正芳 (2004) ナラティブとは何か 北山修・黒木俊秀 (編著) 語り・物語・精神療法 日本評論社 pp.147-160.
- 守屋慶子 (1994) 子どもとファンタジー —絵本による子どもの「自己」の発見— 新曜社
- 宗方比佐子 (1983) 投影法による対人的価値観の測定 教育心理学研究, **31**, 283-291.
- 村井則子 (1980) 老人におけるTAT反応についての一研究 東北福祉大学紀要, **4**, 69-76.
- Murray, H. A. et. al. (1938) *Explorations in personality*. Oxford University Press. (マレー 外林大作 (訳編) パーソナリティ I, II 誠信書房 1961, 1962)
- Murray, H. A. (1943) *Thematic Apperception Test Manual*. Harvard College.
- Murray, H.A.,ed. (1949) *Pierre, or, the Ambiguities, by Herman Melville*. Hendricks House.
- 内藤綾子 (2005) TATにおける防衛機制コーディングシステム作成の試み 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **7**, 82.
- 内藤哲雄 (1994) TAT 図版による個人別イメージ構造分析 日本教育心理学会総会発表論文集, **36**, 206.
- 中村昭之 (1973) 共感性の研究 (1) ——方法論を中心とした文献的考案 駒澤大学文学部研究紀要, **31**, 26-48.
- 中村和夫 (2014) ヴィゴツキー理論の神髄—なぜ文化—歴史的理論なのか— 福村出版
- 中島由恵 (1959) 音TATのこころみ——音TATの妥当性について 教育心理学研究, **7**, 19-24.
- 中島啓之 (2012) TATにおける「物語」の意味 中京大学心理学研究科・心理学部紀要

12(1),185-191.

那須光章 (1975) 不安条件下において他人の存在がおよぼす社会的親和動機の喚起に関する研究 教育心理学研究, **23**, 143-153.

根本橋夫・毛利新治・寺島泰誉・中沢 智・山本真理 (1984) 「心配性」の実証的一考察 千葉大学教育学部研究紀要 (第1部), **33**, 25-43.

西田 保 (1978) 競争場面における運動パフォーマンスに及ぼす達成動機づけの影響 体育学研究, **23**, 13-23.

西原幸江 (2003) 「TATエンカウンター・グループ」に関する研究 愛知学院大学文学部紀要, **33**, 135.

西河正行 (2008) Thematic Apperception Test (主題統覚検査) の力動的な理解について 大妻女子大学人間関係学部紀要 (人間関係学研究 社会学社会心理学人間福祉学), **10**, 95-124.

西河正行 (2009) Thematic Apperception Test (主題統覚検査) の施行法の意味—Cramer のTAT理論を用いた批判的検討を通して 大妻女子大学人間関係学部紀要 (人間関係学研究 社会学社会心理学人間福祉学), **11**, 1-15.

西本智恵 (2000) 心理検査に見られる慢性腎疾患患児の心理的特徴について 広島大学大学院教育学研究科紀要 (第三部 教育人間科学関連領域), **49**, 263-270.

野口裕二 (2009) ナラティブ・アプローチの展開 野口裕二 (編) ナラティブ・アプローチ 勁草書房 pp.1-25.

野村直樹 (2010) ナラティブ・時間・コミュニケーション 遠見書房.

野村直樹 (2012) ナラティブから見た時空 江口重幸・野村直樹 (編) N: ナラティブとケア第3号 遠見書房 pp.51-60.

越智啓太 (2003) 展望 投影法を用いた性的虐待被害児童の識別—批判的展望 犯罪心理学研究, **41**, 63-78.

小川芳子 (1993) . 「生きる自信」—希死念慮者との半年間の関わりから 共立薬科大学研究年報, **38**, 11-28.

岡本圭史・榎下成子・佐藤親次 (2008) 鳥獣人物戯画絵巻より得た図版の特性ならびに神経心理検査への応用の可能性に関する研究 感情心理学研究, **15**, 24-32.

小此木啓吾・馬場禮子 (1972) 精神力動論 医学書院.

大淵憲一 (1977) TAT攻撃反応をめぐる諸問題 心理学評論, **20**, 387-413.

- 大淵憲一 (1979) TAT攻撃反応と刺戟価の役割 大阪教育大学紀要 (IV 教育科学), **27**, 185-190.
- 大野一典・熊本悦明・毛利和富・青木正治・豊島 真・杉山善朗 (1985) インポテンス患者における心理学的検討 日本泌尿器科学會雑誌, **76**, 1486-1492.
- 大野 晋 (2001) 源氏物語のもののあはれ 角川書店.
- 大矢泰士 (2003) TAT (主題統覚検査) による対象関係のアセスメント 臨床心理学研究, **1**, 75-85.
- 大山泰宏 (2004) 第2章 イメージを語る技法 皆藤章 (編) 臨床心理査定技法2 誠信書房 pp. 51-100.
- Rapaport, D. (1968) *Diagnostic Psychological Test*. International Universities Press.
- 齊藤文夫 (1995) TATの8BM図において冷情的攻撃空想を語る非行少年の諸特徴 犯罪心理学研究, **33**, 29-40.
- 齊藤文夫 (2002) 連続放火少年のTAT反応を読む 武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学編), **50**, 75-83.
- 齊藤文夫 (2003) マアレー版TAT第1図および第2図の原典の探求 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **5**, 51-59.
- 齊藤文夫 (2008) マアレー版TATによる親殺し犯の人格特徴に関する一考察——原始的攻撃性と自己像に着目して 犯罪心理学研究, **46**, 25-38.
- 佐治守夫 (1963) TAT 井村恒郎 (編) 臨床心理検査法 医学書院 pp.198-235.
- 坂部 恵 (2008) かたり ちくま学術文庫.
- 坂野剛崇・澁澤敏雄・宮野祐子・奥野浩一・齊藤安彦・久永 諭・倉崎俊和 (2007) .非行少年のTATに関する研究——分析の着眼点の抽出及び非行種別反応の特徴 家裁調査官研究紀要, **6**, 118-160.
- 関根忠直・緑川澄子・馬場宗雄・植元行男・土川隆史・青木顛子 (1964) ロールシャッハテストとTATによる"Drive Content"の研究——精神分裂病・神経症に適用して 臨床心理, **3**, 85-94.
- 関山 徹 (2001a) Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版 (SCORS-C) 評定マニュアル 中京大学心理学部紀要, **1**, 69-78.
- 関山 徹 (2001b) 強迫性格とTAT反応——強迫傾向を有する大学生の人間表象の分析 ロールシャッハ法研究, **5**, 13-27.

- 関山 徹 (2003) 統合失調症患者のTATにおける人間表象 ロールシャッハ法研究, **7**, 23-36.
- 下仲順子 (1979) 施設老人におけるTAT分析の試み 老年心理学研究, **5**, 10-21.
- 下山晴彦 (1983) 高校生の人格発達と進路決定—テストバッテリーを用いての縦断的事例研究 東京大学教育学部紀要, **22**, 211-222.
- 下山晴彦 (1990) 「絵物語法」の研究—対象関係仮説の観点から— 心理臨床学研究, **7(3)**, 5-20.
- 進藤 眸 (2006) 非行性の認定 (VIII) 補遺 その1 心理検査による非行性のアセスメント (2) —ロールシャッハ・テストおよびTAT 人間科学研究, **28**, 35-45.
- 白井利明 (1997) 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.
- 染谷かなえ (2005) TAT物語の現在部分に表出された否定的感情から個性的特徴の反映を見極める基準の模索 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **7**, 81.
- 外川江美 (1999) TATを用いた情緒未成熟な非行少年の教育効果査定に関する研究 (1) 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 739.
- 外川江美・岡田守弘 (2002) TATを用いた非行少年の教育効果査定に関する研究 (2) —被検者の意図が混入した反応の解釈について 日本教育心理学会総会発表論文集, **44**, 453.
- 宗田直子・岡本祐子 (2007) 「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる方法論に関する検討—TAT (Thematic Apperception Test) を導入する試み 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **5**, 68-83.
- 草島弘典 (2005) TATの使用に関する新たな一提案—自己の物語という視点から 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **4**, 95-107.
- 杉浦世絵 (2003) 老年期の心理的特徴についての一考察—TATを手がかりに 愛知学院大学文学部紀要, **33**, 130.
- 杉山 崇 (2007) 抑うつ心の心理臨床に向けたロールシャッハ法, TAT, SCTと各種質問紙法の実施法および臨床的利点—投影法, 質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察 山梨英和大学紀要, **6**, 19-39.
- Sullivan, H. S. (1953) *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York : Norton. サリヴァン 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹八郎 (共訳) (1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房

- 須和田美穂（1993）養護施設児の家族イメージ 障害児教育研究紀要, **15**, 49-62.
- 鈴木正義（1960）TAT反応を規定する文化価値についての研究（2） 教育心理学研究, **8**, 71.
- 鈴木睦夫（1997）TATの世界—物語分析の実際— 誠信書房
- 鈴木睦夫（2000）TAT パーソナリティ—26 事例の分析と解釈 誠信書房
- 鈴木睦夫（2002a）TAT—絵解き試しの人間関係論 誠信書房
- 鈴木睦夫（2002b）TATの基本 臨床心理学 **2 (4)**,547-554.
- 鈴木睦夫（2002c）まとめ—少しばかりのコメント 臨床心理学 **2 (4)**,669.
- 鈴木睦夫（2003a）氏原氏の疑義に答える 臨床心理学 **3 (1)**,73-78.
- 鈴木睦夫（2003b）氏原氏の「感想」についての感想 臨床心理学 **3 (2)**,375-378.
- 鈴木睦夫（2004）TATとロールシャッハ・テスト—相似点と相違点 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **4**, 11-25.
- 田畑 治・生越達美・間宮正幸・渡辺直登（1979）臨床青年心理学研究（III）男子症例に関する考察 名古屋大學教育學部紀要（教育心理学科）, **26**, 55-75.
- 田淵和歌子（2011）TATに関する国内研究の文献展望—ナラティブの視点から— 神戸大学発達・臨床心理学研究 **10**,31-39.
- 田淵和歌子（2013）ナラティブ・アプローチによるTAT物語の検討 人間性心理学研究 **30(1・2)**, 39-51.
- 田淵和歌子・森岡正芳（2013）物語としてのTAT 森岡正芳（編） N：ナラティブとケア第4号 遠見書房 pp.62-67.
- 橘 良治・子安増生（1978）達成動機づけとアナグラム解決課題の関係について 教育心理学研究, **26**, 252-256.
- 高橋 悟（2005）TAT課題における自己体験と「自意識」 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 204-217.
- 高橋茂雄（1960）投影検査による児童の攻撃的行動の研究 教育心理学研究, **8**, 17-23.
- 高瀬由嗣（2008）ロールシャッハ・テストとTATの関係 明治大学心理社会学研究, **3**, 1-13.
- 田中良枝・中丸澄子（2006）高齢者における個人回想法に関する一研究—思い出を語るごとと、それに伴う内的な変化のプロセス 心理教育相談センター年報, **14・15**, 51-66.
- 徳本 祥・北山 修（1995）自尊感情と欲求不満解決様式との関連について—TAT図版を利用して 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, **40**, 37-45.
- 豊田洋子（2002）関係性と防衛を中心にしたAさんのブラインド・アナリシス 臨床心理学,

2(5), 656-661.

豊田洋子・赤塚大樹 (2004) TAT分析・解釈の視点としての防衛機制 愛知県立看護大学
紀要, **10**, 59-65.

豊嶋秋彦 (1998) 心理テスト「TAT」から人間性にせまる——心に寄り添い理解し癒す一つ
の試み CEL, **45**, 21-23.

豊嶋秋彦 (2004) TATノート——「手がかり仮説集」作成の試み 弘前大学大学院教育学研
究科心理臨床相談室紀要, **1**, 28-34.

坪内順子 (1979) 女性が犯罪に陥る心理的危機の分析——特に中年後期の危機を中心として
TATを用いた分析 犯罪心理学研究, **14**, 1-14.

坪内順子 (1984) TAT アナリシス 垣内出版

塚本伸一 (1985) 複数モデルと達成動機が児童の自己評価基準に及ぼす効果 教育心理学
研究, **33**, 215-220.

辻井景子 (1980) TAT物語にみる男性像—女性像 京都大学教育学部紀要, **26**, 303-313.

氏原 寛 (1991) 第3章 心理学的アセスメント 河合隼雄 (監修) 臨床心理学 (第2巻)
—アセスメント 創元社 p69~94

氏原 寛 (2002) TAT事例を読む 臨床心理学, **2(5)**, 662-668.

氏原 寛 (2003a) 鈴木氏のコメントについての疑義 臨床心理学 **3(1)**, 72-73.

氏原 寛 (2003b) 鈴木氏の「答え」についての感想 臨床心理学 **3(2)**, 233-236.

氏原 寛 (2005) ロールシャッハ・テストとTATの解釈読本—臨床的理解を深めるために
— 培風館

海本理恵子 (2004) TAT再考 京都大学大学院教育学研究科紀要, **50**, 386-398.

海本理恵子 (2005) TAT (Thematic Apperception Test) に表されるプロットについて—
ナラティブの観点から 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 153-166.

若本純子 (2004) 老年期における多面的自己に対する関心と自尊感情を用いたパーソナリ
ティモデルの検討—TATプロトコルの内容分析 お茶の水女子大学心理臨床相談セン
ター紀要, **6**, 1-12.

渡部 洋・土屋隆裕 (1995) 樹木画の印象的評価の特徴について 東京大学教育学部紀要,
34, 195-205.

渡部千世子 (2009) TAT実施によって自己開示が促進された中年期女性の面接事例—TAT
の心理療法的意義についての考察 心理臨床学研究, **27(2)**, 184-194.

やまだようこ (2006) 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己—— 心理学評論, **49**, 436-463.

山本和郎 (1966) TAT—かかわり分析法— 異常心理学講座Ⅱ 心理テスト みすず書房

山本和郎 (1992) TATかかわり分析——豊かな人間理解の方法 東京大学出版会

山本和郎・越智浩二郎 (1964) プロジェクティブテストの現象学的研究 (1) ——TATの新しい分析の試み 教育心理学年報, **3**, 82.

—補助資料—

Harvard 版 TAT 図版の略画（安香・藤田，1997 より）



↑ (1) 図版 1



↑ (2) 図版 2



↑ (3) 図版 3BM



↑ (4) 图版 3GF



↑ (5) 图版 4



↑ (6) 图版 5

6 BM



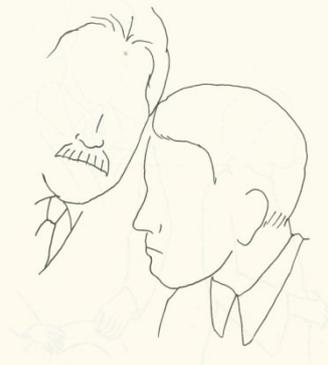
↑ (7) 図版 6BM

6 GF



↑ (8) 図版 6GF

7 BM



↑ (9) 図版 7BM



↑ (10) 図版 7GF



↑ (11) 図版 8BM



↑ (12) 図版 8GF

9 BM



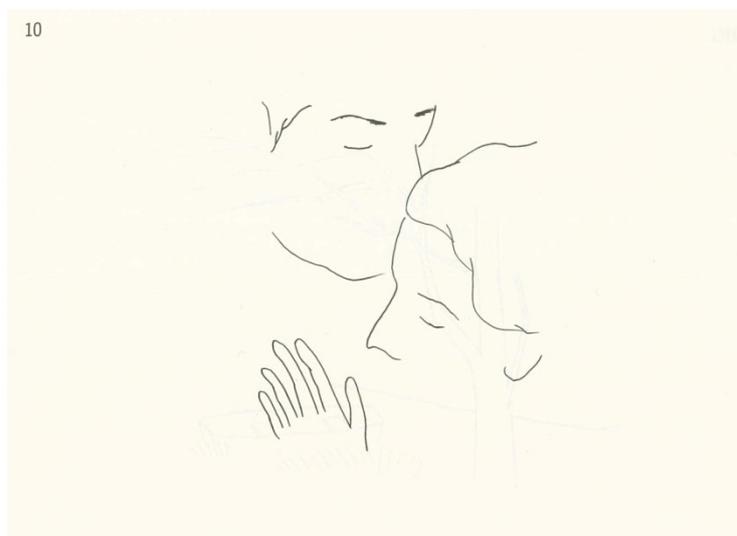
↑ (13) 图版 9BM

9 GF



↑ (14) 图版 9GF

10



↑ (15) 图版 10



↑ (16) 图版 11



↑ (17) 图版 12M



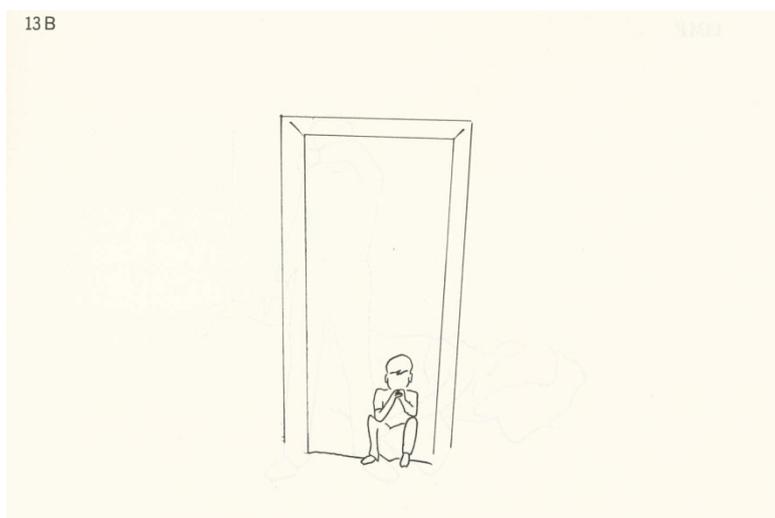
↑ (18) 图版 12F



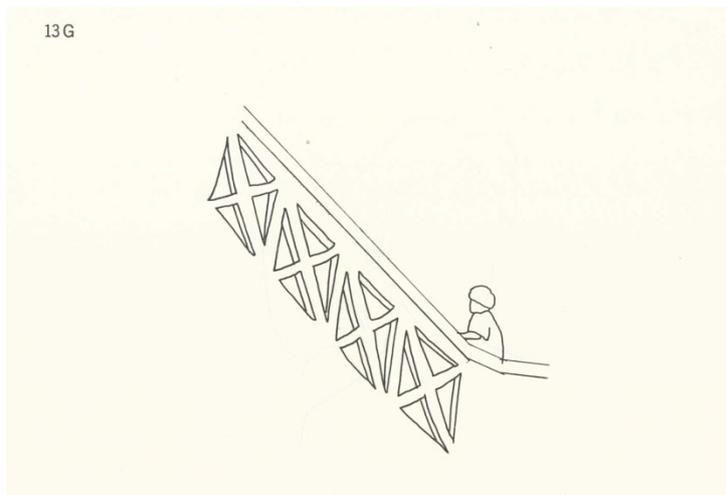
↑ (19) 图版 12BG



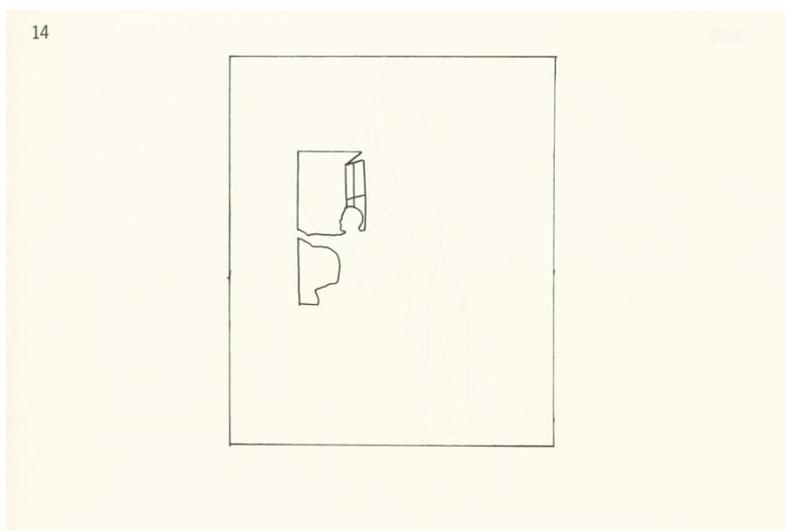
↑ (20) 图版 13MF



↑ (21) 图版 13B



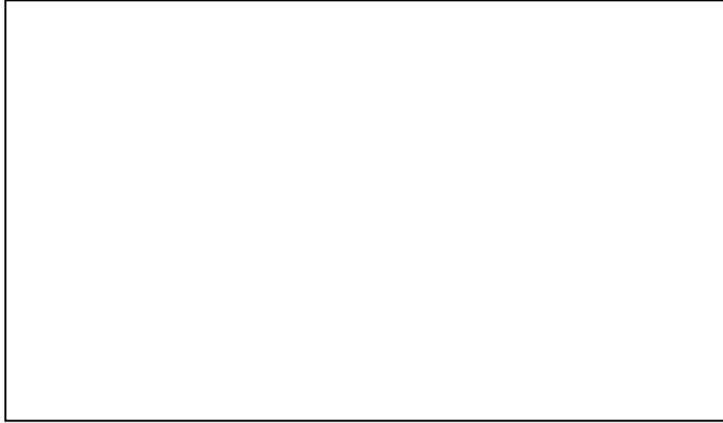
↑ (22) 图版 13G



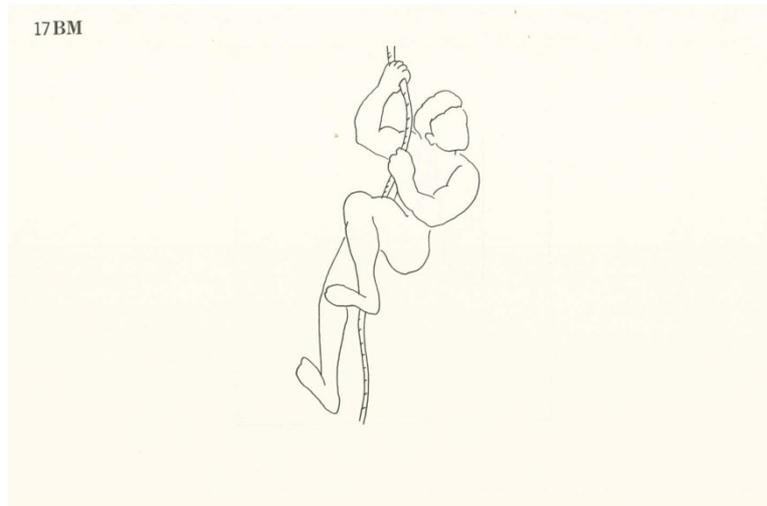
↑ (23) 图版 14



↑ (24) 图版 15



↑ (25) 図版 16 (白紙図版)



↑ (26) 図版 17BM



↑ (27) 図版 17GF



↑ (28) 图版 18BM



↑ (29) 图版 18GF



↑ (30) 图版 19



↑ (31) 图版 20

謝辞

本論文『TATにおける時間性の検討—ナラティブ・アプローチの立場から—』は、平成26年度博士学位授与申請のため、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に提出したものです。学部生時代から心理臨床場面における時間の問題に関心を寄せていた筆者が、修士課程時代にTATと出会ったことで、この論文は始まりました。「離人症やPTSDといった、時間の体験の仕方に悩みを抱えるクライアントの役に立つ研究ができれば」との思いからスタートし、その過程でTATが時間の体験の仕方を変えうるという治療可能性に触れたことから、TATの治療的利用に向けた研究ができないかと取り組み始めたのがこの論文です。現場での分析・解釈からは一旦離れ、なぜTATにそのような治療可能性があるのか、TATの有する時間の性質とは何かについて、本質を明らかにしたい一心で研究を重ね、なんとか今日に至ることができました。

本論文を完成させるにあたり、本当に多くの方々に支えていただきました。

まず、研究3において研究協力をご快諾してくださった29名の皆さま、研究4でTATプロトコルを掲載させてくださったSさん、研究5で、TATプロトコルのみならず臨床情報の掲載も快く了承してくださったMさんに、心よりお礼申し上げます。研究3は今から4年前のことになりますが、お一人お一人のお顔が今もありありと浮かびます。気さくで優しい皆さまのおかげで、臨床研究における重要な仮説生成を行うことができました。Sさんには、テスターという立場で関わらせていただきました。Sさんの今後ますますのご多幸をお祈り申し上げます。Mさんとは、1年3ヶ月にわたって心の作業を共にさせていただきました。面接終了後も、Mさんは今頃どうされているだろうか、心身の調子はいかがだろうかと思ひながら過ごしています。努力家で、真っ直ぐな信念をお持ちのMさんですから、新しい部署でも頼りにされていることと思います。今後一層のご活躍と、ご健康をお祈り申し上げます。

また、本論文の審査にあたってくださった、指導教員である神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の森岡正芳先生はじめ、同教授の吉田圭吾先生、同准教授の齊藤誠一先生、京都橘大学健康科学部教授の中村和夫先生、名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授の野村直樹先生に、心より感謝申し上げます。先生方には、本当に熱心なご指導・ご鞭撻を

賜りました。森岡先生には、臨床ナラティブ・アプローチが何であるかを基礎から教えていただきました。また、真摯に臨床研究を重ねるお姿から、研究者・臨床家としての姿勢を身をもって教えていただきました。振り返ると、最初の出会いから長い年月が経過しました。研究者として歩みの遅い筆者を、いつも温かく見守り、自由に研究活動が行える枠組みを一貫して与えていただいたことを、深く感謝申し上げます。

吉田先生には、熟達した臨床家のお立場から、TATの分析・解釈に関する深く鋭いご助言とご指導を賜りました。心理検査の研究は、クライアントの臨床プロセスと照らし合わせて熟考することで意味を持つこと、それが臨床的妥当性であることを具体的に教えていただき、研究者としてだけでなく、臨床家としても多くの学びをいただきました。

齊藤先生には、学術論文としての形式と論理性について、親身なご助言とご指導を賜りました。内容と同じくらい形式も大事である、第三者の評価に耐えうる論理性を確保せねばならないというお言葉は、筆者に何よりも必要なものでした。齊藤先生に論述方法や文章表現について教えていただいたおかげで、文字通り本論文を執筆することができました。

中村先生には、神戸大学から京都橘大学に移られた後も継続してご指導・ご鞭撻を賜りましたことを、改めて感謝申し上げます。中村先生の温かい励ましのお言葉と、香り高いコーヒーを飲みながらの議論がなければ、本論文の完成には至りませんでした。特に内言の意味論について、心を尽くして教えていただいたおかげで、第5部を執筆することができました。

野村先生には、ナラティブ研究会に端を発し、様々な場でコミュニケーション理論を教えていただきました。特に系列時間論について、理解の遅い筆者にも懇切にご指導していただきましたことを厚くお礼申し上げます。野村先生のおかげで、本論文に一貫性を保った枠組みが与えられたと共に、常に温かい眼差しでインターアクティブな対話をされる先生のお姿から、E系列の時間の大切さを身をもって教えていただきました。

他にも、博士論文執筆の不安や苦しさを共に語り合い、励まし合った博士課程の仲間である、多田幸子さん、田仲由佳さん、山根隆宏さん、竹井夏生さん、神野雄さんをはじめとする皆さま、臨床現場の第一線で活躍する立場から研究の大切さを語り、応援してくれた修士課程の仲間である、岡本美智子さん、東雅美さん、三好留美子さんをはじめとする皆さまに、心より感謝申し上げます。共に研究・臨床の道を歩む皆さまの存在がなければ、今日までモチベーションを保ち続けることはできませんでした。本論文の執筆過程は、志

を同じくする友のありがたみを噛みしめた過程でもありました。

最後に、子どもの頃から本質を迫及する姿勢の大切さを説き、研究生活を静かに見守ってくれた父、筆者の最大の理解者である亡き祖母、傍らで常に支え、叱咤激励してくれた夫をはじめとする家族の皆さまにも、改めて感謝申し上げます。

本論文は、前述の皆さま以外にも、本当に多くの方々のご支援・ご指導によって完成させることができました。本論文を研究の途の第一歩とし、今後の研究活動を通して心理臨床の場に貢献していくことが、今回支えていただいた方々への恩返しであると思っています。感謝の意と共に今後の決意も表し、また皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈りして、謝辞とさせていただきます。

平成 27 年 1 月 16 日

楠本和歌子